事實小說

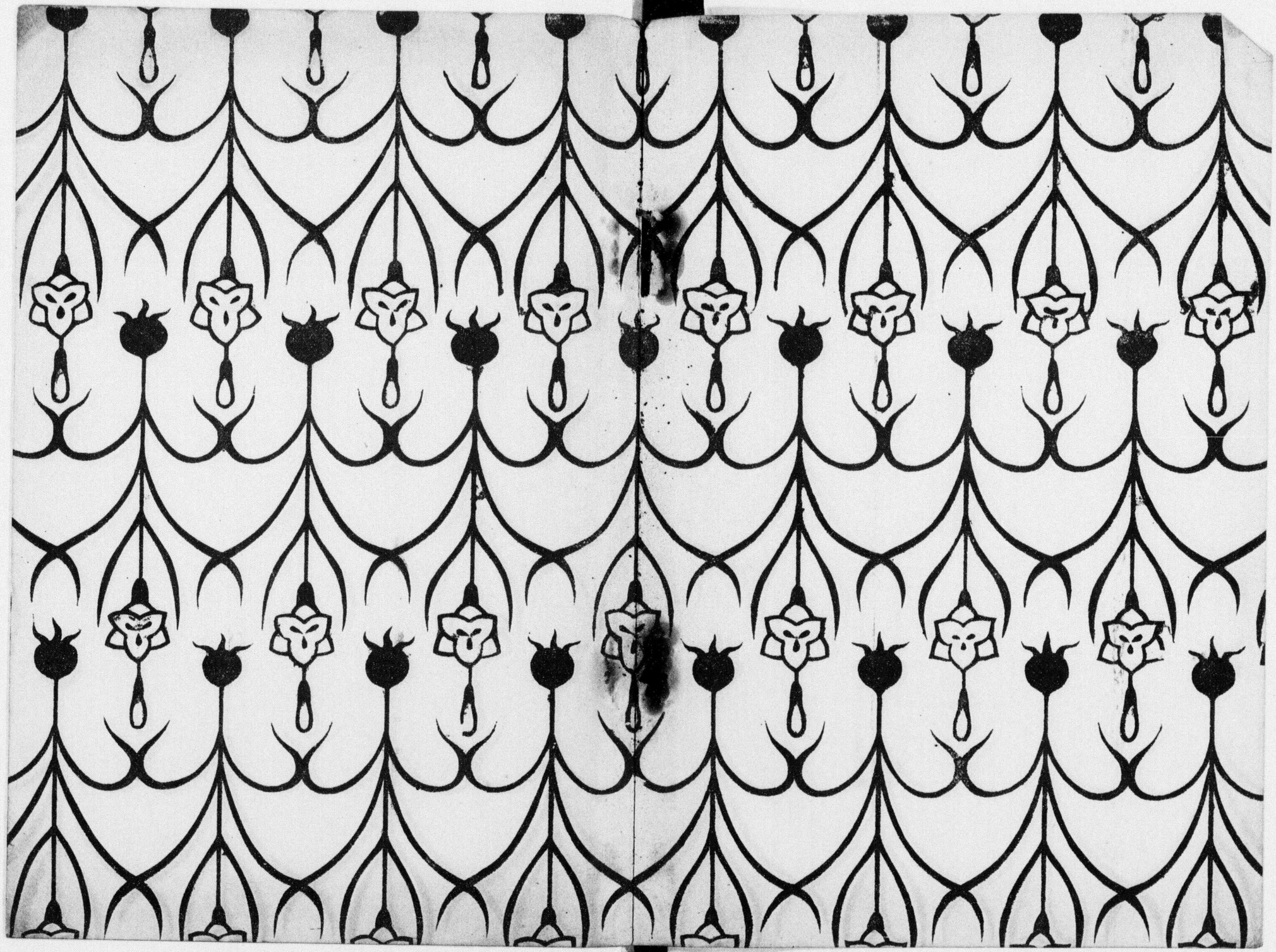
千里眼【後編】

渡邊默禪 作

鈴木錦泉 畫

271
278

始



特104
222

千里眼

後編

渡邊默禪作

鈴本錦泉畫

大正
2.2.41
閲覧

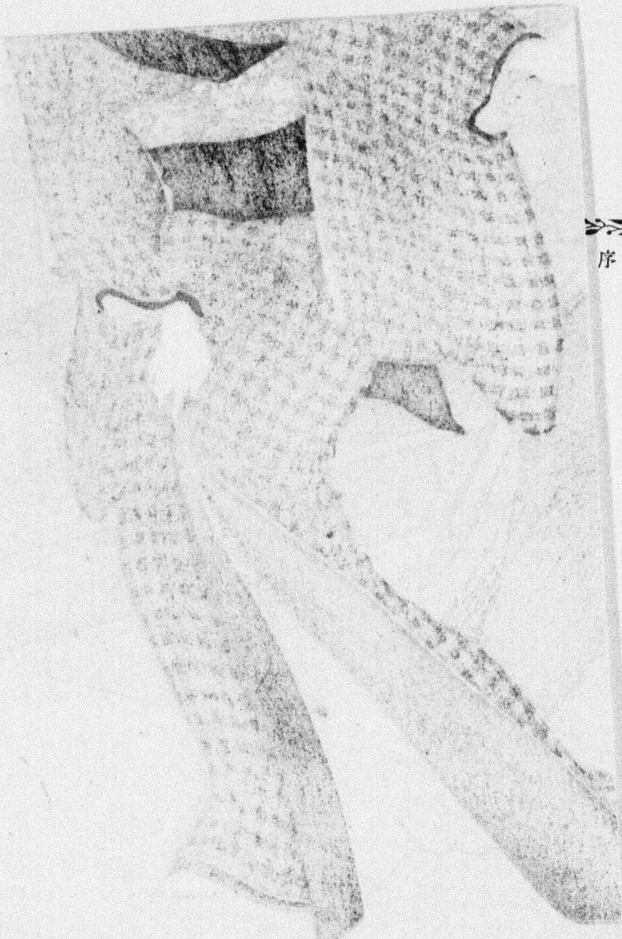
序

亥の春

叨りにエゾノスチシズムの領分に立入りて心靈の神秘な說き、奇を好のむ現代思潮に媚びんとするなどの野心は毛頭も是無し、只だ「千里眼」なるものが雨後の筍の如くに現れ出で此處かしこに持囃さるゝが可笑しさにとツくの昔に夫以上の「女の驚法使ひ」が現れて、本山の免許を取つたことを知らぬかと、當人に代つて事實を證據立て、既得權侵害の訴へを持出さんとするまで也、而して一面には世の學者代先生門に向ひ、プルンチエルの所謂「科學の破産」の時代が接近し來れるを、今更の如くに驚かるゝ其の暢氣さを警告し奉らんとす

人は皆神となり得べし、ボテンシヤル、ゴツトなりとは或る神秘哲學者の主張する所なりとか、「千里眼」の主人公横山花子の如きは、神に近き或る特別の靈的能力を有せる女性なりき、爾も其の運命は如何、死は如何、地球に踵を着けて歩み、立方數尺の僅かな空氣を呼吸して生きつゝある動物は、本來究竟人間の殻を破り得ざるもの乎、其處に何やら深遠さうな問題が有りさうなり、敢て問ふ、五カイ三ヤリの哲學者先生、心靈の相場なるものは果して這麼ものに候哉

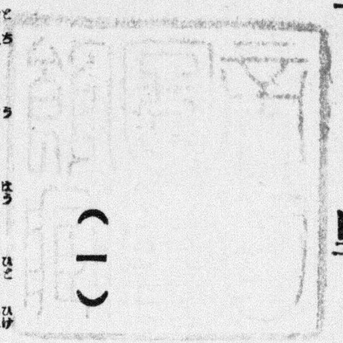
默禪序



千里眼（後編）

渡邊默禪

（一）



柳橋でも賣れる方では他に敗を取らぬ梅吉、緒〆の珠か夾袋、頭髪の物の一つか二つならば、最う流行が廢つたから若干にでも持つて去つて呉れと、偶々には投出す塲合もあるであらうが、商賣物の三絃から化粧道具、女性には是が命の綺羅一式、帶といはず羽織といはず、長襦袢から三襲の江戸褄模樣、赤いのやら青いのやら、眼も綾の花紅葉、簞笥に三棹もあつたのを、玩物箱を引くり返したかのやう、ずらりと眼前におつぴろげて、さァ此の身代を若干で買うと物凄く出るのであるもの、誰かは本氣の沙汰と思ふべきやである。

小春と婆やは只惘れに顔を見合せた尋常事ではないと耳打の内相談、姐さんを小陰に呼んで、一体甚麼した譯でと云ふ口を皆まで開かせず、お前們の知つたことではない、後で噺して聽かせると天窓粉齏。その見脈に辟易して二人は默つて瞬めてゐる。

道具屋は怖なびつくである。山成す品物へ一通り眼を透して、是くらゐならばと十露盤に彈き上げた買値は、三百何兩に端錢がつく。

『仕樣がないねえ、それっぱかり』と梅吉は眉を蹙せた、『最つとお奮みな、實はね、道具屋さん、今度妾にお芽出たがあつてね』、『ヘイ』、『此の土地を引くことになつたんだが、先方さまは身一つで來て呉れ、慾じ碌でもない手廻道具なんぞ持つて來られては、却つて迷惑だと爾ふ被仰るもんだから、それで急に世帶を疊んぢまうのさ』、『ヘイ、成程』、『となると可厭でも一方の情郎は、手を切らなきやアならないわねえ』、『ヘエー、那麼お娛みがお有りなさるんで』、『いえさ、妾は情夫は借金のことなんだよ』、『御戲談でせう』、『それもね、先さまへ噺せない秘密の借金なんだから困るわ』、『浮氣の酬いですな』、『オホヽヽ、まア爾さ、その口が甚麼しても四百五十兩なけりやア、奇麗に洗へないの、其處へ來つて來て三百兩は些と劫腹だね、何とかならないかね、道具屋さん』。

變なことを聞くものだ、と他の二人は想つた。お芽出たがあつて世帶を疊む――那麼樣子はつひぞ素振にも見なかつたのである。突然！、善い意味の突然ならば耳寄の福音ではあるが、恐らくは惡い意味の突然、悲しい消息が其の言の裏に潛んでゐるのであらう、と胸を壓迫されるやうに感じた。

『ヘイ、そりやア最う。そんな御內情があつて見れば、五兩でも十兩でもお高く戴いて參りたいのですがな、御一新の兎解以來、コノ、道具類は下る一方でございまして、只今戴いたところが、何時足が附くことやら先の當がありません、まア當分は寢かし物です、此の御値段ならば大奮みの所で、でも足りないと被仰るなら、姐さん、只今お二階でチヨイと拜見しましたお腰の物彼箇をお入れ下さいましな、拵へは左程でもないが、中刃は五郎正宗と睨んで置きました、一緒にお拂ひくださるなら、默つて四百五十兩出しませう』、『いえ、可厭なことだよ、彼の腰の物ばかりは甚麼事があつても放されやしない、妾に取つて大事な人の記念なんだもの』。

何事を憶ひ起したか、梅吉は斯く言ふ下から泫然と珠の雫を零した。それを隱して俛目に考へてゐたが『ぢやア、面倒だから恁う爲ようぢやないか、此家の造作一式は妾の物だから、之を殘らずと、それから亡母さんのお讓り物で、或る御屋敷から拜領したといふ守袋があるか

ら、それを突括めて恰どにしてお呉れな』。

持つて來たのを見ると、時代のついた赤地錦の袋に、純金の二寸ばかり、精巧に彫刻した鬼子母神の像である。道具屋は顫ひ着いた。忽ち交渉成立、其日の夕刻までに金を調へ、衣類雜品は明日の午前に、造作は午後に取外すといふ約束をして、一旦引揚げて行つた。

其の跡で梅吉は小春と婆やを奥の間に呼んだ。未だ何にも言はぬ先から二人は歔欷をしてゐる。

（二）

雄々しいやうでも有繋に女性、我の現在を弔ふやうに、可憐らしい泣顔を見せつけられると、嘆くまいと引締めた玉の緒の、意氣地もなくぐら〳〵と弛んで來て、自然に胸が一杯。お白洲で宣告する如く佶となつて、男らしく言渡さうとした事も、涙ぐいふ弱虫に先立たれては依然常の梅吉、可哀想だとの同情ばかりが募つて來て、言ふことに何の權威も無くなつて了ふ。

『あのね、春ちやん、お前さんには誠に氣の毒だけども、據所ない譯があるのだから、今日限

り』と言澁んで『お別れにするからね、情願實家へ戻つてお呉れな、婆や、お前もね、今日がお名殘だよ、お二人から這入つてゐる證文は元の儘にお返しするから、よく判をあらためて請取つてお呉れ』と二通の年季證文をそれへ出して『お二人へお禮を申します』と手を突いた、『長い星霜の間、こんな行屆かぬ勝の主人を大事に、影日向なく動いて呉れたお蔭さまで、今日までも人から後指をさゝれた事がなく、まア什麼か恁か行り徹して來られたので、ついては切めて春ちやんの身が定つて、最う安心といふ所へ漕ぎつけてからお別れをしたいものだと、平生から爾う思つてゐたんだけども、儘にならないのは浮世、着の身衣の儘で出して遣るのも、究極の事があるからだと察して、必ず怨んでお呉れでない、婆やもね、聞けば隨分薄倖な身上で、孫夫婦が豆腐屋をして、かつ〳〵其日を暮してゐるといふ事だから、小金でも貯めさせてそれを土産に歸した上、樂に一生を送られるやうにしたいと心懸けてゐたんだが、夫も空頼みの、突然に暇を出されなけりやアならない羽目になつたのが、妾に取つて何くらゐ辛い事だか知れアしないよ、情願ね、薄い緣であつたと思つて諦めてお呉れ』。

斯く言ひ聞けてから、二つの紙包と一襲の小袖と帶とを前に置いて『是はね、誠に僅少で體裁が惡いけれども御餞別の印、春ちやんへは二十兩、婆やへは十兩、家へのお土産に持つてッ

とくれ、それから妾の筐分といふのも、御大層だが、柄を見立て、別に取つといた品だから、今日を命日……オホ、延喜でもないね、別れた今日の日をよく覚えといて、妾と遇つた心算でね、是を肌身に着けてお呉れ、可いかえ、さ、此方が春ちやん、是が婆やの分だよ』と頒けて遣つて『猶念の爲に言つとくがね、最う是できつぱりと士従の縁が切れつちまつたんだから、此末妾に何處で遇はうと、決して言葉をかけてお呉 でないよ、遇つたらアカの他人、外を見て通つとくれ、お頼みだよ』先の事までも言つて、くるりと横向きの鼻紙を顔に充てた切、呼吸一つせぬ様子。

『姐さん！餘りの御胴慾ですわッ』、先刻から疊に肱を落して泣伏してゐた小春が、堪りかねたといふ風で、突と顔を擡げた、『何故、いきなり那麼事を被仰るのです、出て行けなんて言はれたって、私ア出されるやうな覚がありません、可厭です、別れるのが可厭です』と駄々を言つて『夫程にお困んなさる譯があるなら、何故打明けて恁だと噺して呉れません、私ア那麼不實なことは嫌ひです、呑込ましてさへお呉んなはれば、外へ住替へても、假令吉原へ身を沈めても、御入用のお金だけは屹と拵へて、姐さんに貢いで上げますのに、洗ひ浚ひ世帶道具を……ア、情ない、姐さん、尊姐は何といふ慘めな所爲をなさるんです、外聞が悪いぢやありません

か』と瞼を拭き『こ、こ、這麼證文なんぞ要りません、未だ三年も稼がなけんば、お借り申したお金が消えないのですから、私アそれまで勤めます、お邪魔でも側へ置きなすつて下さいな』と云ふのも泣逆吃である。

『眞箇に困つちまひましたねえ』、婆やも涕を啜り上げた『用がないから出ろと被仰るなら、奉公人の事でございますから、直にも出て行かなけりやアなりませんけれども、餘り唐突なもんですから途方に昧れつちまひますわ、そりやア手前にいたしました所が、譯を噺して下さいますりやア、なアに尊姐、二年や三年、お給金なしに勤めましたッて、何でもございません、今まで御親切に御面倒を見てくださいました御恩を思へば、此方から持出しても御奉公をいたしたいくらゐですわ、それに甚麼してもアのお嬢さまが……私は尊姐よりもお嬢さまに別れるのが可厭でございます、婆や婆やッてねえ、片時もお側を離さぬまでに、彼麼に能く懐いてゐらッしやつたのに、那箇何でも、此儘跡に殘して行かれるもんですか、アレ、ちよいと……アレ、何にも御存知なくお午睡……まア、可愛のねえ』。

立揚つて寢てゐる花ちやんの側へ駈けて行かうとする、それを梅吉が急に押へた『婆や、止してお呉れ、最う花は主人ぢやアないよ、障つてお呉れでないッ』。睨みつける眼は濕然と露を

帶びてゐた。

（三）

突然に逐出された不平といふよりは、寧ろ主人に對する同情から、進退も苦樂も偕に爲ようと言張る、その美しい心を汲んで見ると、梅吉は泣かずには居られなかつた、小說本などに能く見る殉難の忠士が、卒や三途の川まで御伴せんと君に先立つて腹を切る、恰どそれに似寄つた健氣な精神だと思ふと、自分の不覺から落した城の炎の中へ、罪もない二人までも犧牲にして葬ることが、怎にも忍び得ないやうな氣がした。

それを自ら勵まして、人情といふ物を度外に何處までもきつくなつた。二人は遂に氣折がして涙ながらの暇乞、悄然と出て行く後姿を格子戸の隙から見送つた時は、胸も張裂ける樣な思がした。

夕景になると道具屋は、約束通りの金を揃へてやつて來た。賣渡證文の手續を濟まして、金目の物だけ小玉にして持つて返る。

其跡で花ちやんを隣家の踊の師匠へ預け、家の戸閉りをして俥を誂へ、眼立たぬ程の薄化粧に黑縮緬の羽織、がら〳〵と夜風を切つて、一文字に駈附けさせた所は、番町の江藤新平の屋敷。

柳橋の梅と申す者、御前に一寸お目通をと言入れて、玄關先に立つてゐると、暫くの間待たされた。待つてゐる中に女中らしい高島田が二度も出て來て、故意とらしく我前を往きつ復りつ流眄にぢろりと風采を見ながら奥へ引込む。

軈て此方へと書生に案內された、踉いて行くと幾間か懸放れた奥の四疊半茶室らしい小座敷であつた。

程なく椽に足音、小間使に雪洞を持たせて這入つて來たのが、主人の江藤『や、梅吉、不思議ぢやな、』例の鏽聲に鋭ひ響のある調子。身を辷らして隅の方へ寄らうとするのを『イヤ、其儘がよい』と止めて、小間使の敷直す緞子の裀にゆつたりと坐つた。

『珍らしいぢやないか、梅吉、何と思ふて尋ねて來た、こりや、闇夜に鴉が啼くかも知れんぞ、ハッハッハ』無言に手を突いて、嫻雅に畏まつてゐた梅吉を、底光のする眼下に俯瞰して、先づ呵々と笑つた。いかにも意外に感じたらしい面色である。

爾う思ふ理。手を變へ品を替へて口說き廻しても、いつかな靡かぬ手強き敵が、突然鐙を張つて乘出した一騎打側目もふらず蕩地に御大城の御座所を目蒐けて飛込んで來たのである。眞意測るべからず、油斷はならぬ物々しき振舞！

『嘸、訝しくお思ひなはることでせうね』と梅吉は嫣然とした顏を灯影に向けて『實は殿さま、一生涯お側に御奉公をいたしたい心算で、駈込んで參りました、情願お邪魔でも御屋敷にお置きなすつて下さいまし』と言ふ。

『えッ、な、な、何と申す、生涯俺の側に？梅、そ、そ、そりや、眞實か?!』、江藤は不意打の彈丸に心臟を貫かれたのやう、愕然として眼を睜つた。

（四）

梅吉はさも打萎れたといふ風情で『實は恁うして鐵面皮しくお目に懸られた義理ぢやアないんです、是まで種々と有難いお言葉があつたのを、上の空に聞流して、失禮づくめの我儘一點で透した妾が、今頃になつてから情願宜しく願ひますと押掛けて來るなんて、まア何といふ厚顏々々しい奴だらうとお蔑視になるかも知れませんが、殿さま、過つて改むるに憚ることなかれとやらいふ事がありますね、今まで重ねた罪を懺悔した上のお願ならば、別にお叱りを受ける廉はあるまいと思ひまして、押強く一人で上りました』、斷然と言ふ。

江藤は猶且半信半疑の樣子である、『では何か、俺に對して彼是申したことが、自分の過失であつた、惡かつた、相濟まなかつたと後悔したんぢやな』、『爾なんですよ、今日が日までもね皆さんから親切に言つて下さることが、甚麼ら腑に落ちませんでね、殿さまが御酒機嫌か何かで戲談に被仰つたのを胡麻摺根性に慾が手傳つて、餘計な世話を燒くのだと呑込違ひをしたもんですから、そりやア隨分な惡まれ口も聽きました、殿さまの御耳へ這入つたなら、又たお手討騷ぎになりさうな失禮も申し上げました、それは皆な妾の莫迦がさせた業で、考へて見ると穴へでも入りたいやうな氣がいたします』。

須永と佐賀屋から脅かされた事をそれに語り添へて、其時は怫然とした勢ひで、肚にも無いことを毒吐いて歸りましたが、さて熟々と考へますと、皆さまが是程までに一生懸命になつて、骨を折つてらつしやる所を見ると、殿さまの思召は眞箇か知ら、御戲談では無さゝうだ、眞面目のお話に違ひない、と氣が注いた時は、モシ、殿さま妾ア戰々するほど嬉しかつたんですよ』

と飽まで媚を湛へた黒眼を横に流して、恍然と江藤の顔を見た。哀哉！魔の手に揮ふ殺人剣、星の如く頭上に飛ぶ時、一代の英雄も風に吹かれた小蜘蛛である。

「む、む、左様か、左様か』、忙しく頷いて、須永から那麼噺は未だ聞かんが悦しからん事を爲たな、亂暴ぢや、そりや』と照隠しを言ふ。『いえ、その亂暴が妾の眼を開かせて呉れた神様であつたので、妾ア尊君の實意が解つて見ますと、全然夢が覺めたやう、自分の足らなさ加減に愛想が盡きつちまひました、そこで生中他人を入れたり何かしますと、妾の心意氣が達きませんから、卒そのこと直接にお目に懸つて此身を放出さうと思ひましてね、いきなり御屋敷へ上つたんで御座いますが、お詫を聞いてお呉んなはればよし、若しお取揚が出來なけりやア、妾ア最う家には歸りませんから、此處でスッパリと殺してお呉んなはい』と摺寄つた。

『アハヽヽ、とう〳〵角が折れたの』、江藤は大滿足である、南攻不落の敵塞が忽ちにして陷落白旗を振つてる降參は、痛快此上もないことである。『ソレ見たことかと言ひたくなるわ、ぢやから痩我慢も大抵にせいと申したんぢや、可し〳〵、汝の方から爾う折れて參れば何も申すことはない、が梅吉、此儘屋敷へ置くといふのも異なものぢや、菩薩したら可いものかの、汝の方の都合は？』、『ア、嬉しい、ぢやア願を叶へてお呉んなはるの』と梅吉は得堪へた歡喜を表情して『さ、その事でございますがね、些と我儘なお願ひですが、悉いふことにしてお呉んなはいな』、『む、如何する』。

（五）

梅吉の要求する所は自分は甚麼落籍樣をしても構はないが、引いたとなれば屹と御前の名が出る、其時に江藤とも言はれる大官員さまが彼麼慘めな引かせ樣をしたかと、世話の胡廬になつては御名譽にも關はるから、出來得るだけ華々しく、此の身から御光がさすくらゐに見得を飾つて、大威張に彼の土地を出たい。爾うするには先づ柳橋一等の割烹店で落籍祝の式を擧げ、出入先や仲間中へ、思ひ切つた配物を爲なければならず、迎へ轎の三荷三種、假令綿帽子を衣ぬまでも、婚禮の心にて其の席へ乘込みたいのが望。又た御屋敷へ參ることが協はぬなら、然るべき住居を御無心申したく、凡ての肝煎は親切にして氣の利いた佐賀屋の主人へ御任せならば、萬に一つも仕損じはあるまい——と云ふ事であつた。

江藤は一も二もなく其の請を容れた。根が大攫みの金などに頓着せぬ豪傑氣質、飽きでも打込んだ女の我から角を折つて靡いて來たのが何よりも嬉しく、今夜は屋敷に泊つて準備の相談をしろとまで促立つのを、家にも何かの手蹶があるからと逃げて、梅吉は其儘柳橋へ戻つた。

入れ替つて例の佐賀屋と須永——此の男は名を麟三といひ、江藤と同郷の後進で、兵部省の官吏に推擧された乾兒であつた——が伺候申し上げる。元來が脚色んだ狂言、梅吉が深川八幡へ日參してゐるといふ事を、幇間の延孝から聞き、その出先に網を張つて待つてゐたので、義理責と威嚇にかけて否應言はさず叩き落さうとしたのが、存外手強い敵に苦もなく内兜を見透かされ、美事失敗に歸した器量の悪さ。此上は貸附けた金を枷に手痛く責めつけて、恥面をかゝして遣るだけが切めてもの腹癒、御前の方は体好く言瞞めて先づ當分はそつとして置かうと申し合せ、進まぬ足を番町の屋敷へ向けたのである。

定めて苦い閻魔顔の、眼を剝出して叱り飛すことであらうと、脛疵のおつかなびつく、成るべく淨玻璃の鏡に此方の無間を映さぬやうにと体裁を飾つて、出鱈目の報告に及んだ。と江藤は案外の地藏面、例にない機嫌で、それは嘘だらう、實際は悉であつたではないかと素破抜く。一々的中、さながら傍で見てゐた樣に解つてゐるので、二人は顔を見合せて驚いた、現世から

なる地獄の詮議、面目なさの冷汗である。

さん〳〵膏を絞つてから江藤は笑ひ出した。俺が知つて居るのに不思議はない、實は個樣である、と梅吉が自身兜を脫いで詫に來た事を斷すと、あツと惘れて了つた、先づ以て吾が君萬歳女運長久と祝し奉る。

費用は何千兩出ようと、當人の望を滿たすやうにして遣れ、江藤の顔に關はる樣な粗匆がないやうにとの命令。佐賀屋は畏まつて直ちに落籍準備委員長の資格を帶びた。國許には妻も居ることなり、屋敷へ入れては世間の思慮も如何、といふ御意を承つて、拙者が然るべき御妾宅をと早速の奔走、所々を探しぬいた末に、駿河臺の舊旗本屋敷が寶物に出てゐたのを、千兩足らずで買入れる約束をした、その金は先づ御立換である。

翌日、柳橋の料理店川長へ申し附けて、今夜は二階を借切、土地の藝妓を總揚にしろといふ大袈裟の證文、引祝ひの配り物や何かは萬端幇間の延孝に任せた。爾して日暮方から須永と自分が宰領の役、長棒轎に幾何の釣銭、十何人の紺法被にそれを舁かせて、堂々と川長へ繰込んだ、その忙がしさは盆と師走が一緒に落合つたかの樣。

* * * * *

横山正太郎は梅吉の境遇に感る一大革命の湧いて出たことを知らぬ、急に噺したいことが出來たので、恰ど其夜の七時過に柳橋の住居を訪れた。

奇怪！窓に映す灯も見えず、表の戸は固く閉切つてある。宵の口は夜明にひとしい色街に、此の有樣は底事かと眉を顰めた。

扉を敲くと、蕭然として人氣の無さうな奥の方から、生綾い返辭が聞えて、誰やら出て來た樣子である。

『阿誰でげすえ』、『俺ぢや、横山ぢやが』、『あゝ、薩州の旦那でげすか、よくお出くださいやした、さアお這入りくだせえ』、掛金を外して戸をがら〳〵と啓けた。その男は箱丁の春吉であつた。

（六）

『春吉、主婦さんは居んさんか、留守かの』、座敷の中は暗黑、平常の陽氣な和炯がましい光が

ないのを怪しんで、横山は沓脫から奥を窺き込んでゐたが『や、こら、伽藍堂ぢや！』と叫んだ。

『まアお上りください、その伽藍堂になつた譯も、姐さんの留守になつた所以因縁も、私から能くお噺しいたしやすから』、春吉は先に立つて奥の間へ導くのであつた。

不審！襖も疊も殘らず取剝がして、肉を殺いだ肋骨の慘ましい空家になつてゐる。歩くたびに咿軋と鳴る根板の足下から氣と立つ塵埃、陰鬱な濁つた空氣が室一杯に漾つて、洞孔へでも這入るやうな可厭な感覺がした。

床の間のついてある奥の六疊に、只一枚の薄縁を敷いて、其處に春吉が陣取つてゐたらしく、弓張提灯を疊んだのに蠟燭を點してあつた。

『御覽のとほりの体裁で、アハヽヽ、飛んだ俊寛僧都が一人出來揚つちめえましたよ』と春吉は笑つて『お坐りになる所も有りやアしませんが、まア是へなと腰を掛けてお呉んなせえ』と隅に在つた踏臺の埃を手拭ではたいて、横山の前へ持つて來た、大方骨董屋のお忘れ物。

『何ちことか、こら、一体甚麼したちうのぢや？』、横山は只呆れの眼を圓くして、瞠乎と室内を回看してゐる。『イヤ、是には種々と深い事情がござアすんで、姐さんから旦那へ届けて呉れと

頼まれた手紙が一本、此處に預つてゐやすから、まア是から先に御覧なすつてくだせえ、其の跡で私からポツ〳〵お噺しすると爲やせう……アヽ忘れた。旦那、有りやすせ、エヽ何がツて、私のお連合さ、留守番を爲るのに一人ぼつ然と指を咥へてもゐられねえから、退窟凌ぎに嬶ア を引張込んで、宜しく飲つてゐやした、ソーラ、是だ』と空棚の下から取出したのは、貧乏徳利に茶椀、それに添へた御馳走が燒鰯。

『ハヽヽヽ、女房ぢやちうから女かと思ふたら酒か』、『ヘイ、如何でげす、お一つ』、『よか、お相を爲よう……春吉、その手紙を早う』、『オット爾だツけ』、懐中から梅吉の手紙を出して、蠟燭の心を剔つた。

怡樂のことづれ？涙の消息？いかに己れの運命を語るのであるか、薄墨の朧ろに泌んだ筆の痕が、小闇い灯光に照し出された時に、横山の顔の色は見る〳〵中に變つて、押へ難き心の波動を看て取られた。『む、むー』、無言に呻いて濶と天井を睨み上げる眼、その瞳の底に何物をか咀ふやうな殺氣か迸しると倶に、得知らぬ暗愁の光がゆらいでゐた。

• • • •

空家らしいので變に思つた、戸口を檢めると依然梅吉の住居だ。それにしては訝しいと提灯を持つたなりに、すいと中へ這入つたが、三分間と經たぬ間にキヤツと叫んで、僵るやうに戸外へ飛出して來て、突然門口へ尻を突く。

（七）

戸外には輿を舁いだ紺法被の人足が四人も待つてゐた。是から御部屋さまをお乘せ申して、川長へ繰込む段取だと、聽て有つく御祝儀の腹算用をして居る鼻の先へ、消魂しい叫聲もろとも磕然と顚がつて來たので、一度にうつと肝を潰した。

『やッ、師匠だ〳〵、櫻川猪口太夫只飲さまだ、大變〳〵、眼を暈しッちまつたせ』、『甚麼したッてんだらう、氣か利かねえ』、『オイ〳〵お前何だつて雪駄を頭上へなんぞ縛りつけるんだい、何、癲癇の禁厭だ、イヤそれに爲ちやアロから泡沫を吹いた樣子が無えせ』、『脊上を打やしつけろ』、『肋を蹴ろ』、『水を打沃けろ』、わや〳〵と噪ぎ立てた。

哀れむべし、曠の役目の歡迎委員、打たれたり蹴られたり、溝の水を浴びせられたりして、

稍との事に息を吹返した。氣が注くと共に勃然と起揚つて『コ、コ、コレ、皆の衆、お、お、大急ぎだ、は、は、早くやつて吳れ、早くやつて吳れ、早くッ』、突然轎の中へ顚がり込んで頻りと手を振る。

『ど、ど、甚麼なすつたんで、大急ぎで、ど、何方へ行くんで』、人夫までが釣込まれて狼て出した。『何でも可いから、こ、此の駕を早く……も、も、最う、こ、こ、這麼所に長居は御免だ、い、命のある中、は、早くして吳んな』、延孝は轎の中で戰々慄ひてゐる。『あア解つた、急病が起んなすつたもんだから、醫者へ運れてけと被仰るんだ、此邊では藥研堀の方かな』、『醫者ぢやアー無えよ、舊へ歸るんだ、舊へ……』、『え、お歸りになるんで……歸るといふのは御婚禮には忌辭ですせ』、『此方アそれ所ぢやねえ、な、な、南無阿彌陀南無阿彌陀』、『オヤ、念佛が始つたせ、薄ッ氣味が惡いなア』。

何が那やら解らぬが、煙に捲かれて言ひなり次第に轎を復した。還ると云つても眼と鼻の同じ土地、忽ちにして川長の玄關へ着くと、それ御部屋樣の御乘込だと、待受けた樓婢どもがばたばたと駈出して來て、お芽出たうと聲を揚げた氣の逸いウエルカムの下から颺忽と現れたのが梅吉ならぬ延孝、眞蒼な顏を圓々とした眼氣で、物をも言はず二階へ駈上つたので、いづれも呀と呆れる。

二階の大廣間には佐賀屋德右衛門と須永麟三とが控へて、前祝ひに一酌を催ほしてゐる所であつた。其の前に臨蹌と這入つて來た延孝が、杓折れるやうに帖然と坐り込んで、哼々と太息を吐きながら胸を撫でる。

『おゝ、延孝徒勞々々、花嫁御は一處に連れて來たらうね、如何した、樓下に居るのか、御前も程なくお見えになるだらうから、爾う嬌羞ますとも此處へ來れば可いになア、矢張恁なると甚麼苦勞人でも體裁が惡くなると見える、ハツハツハツハ』、佐賀屋が嘲しかけても延孝は只眼をばちくり、何物を怖るのか、漸々燭臺の方へ摺寄つて來る。

『や、延孝、汝の天窓は何ちや、そりや、梅吉が出世したちう酒落か』、須永は不思議さうに矚る。『え、拙の天窓が甚麼か爲やしたか』、延孝が手を上げて頭を撫廻すと、手拭で括しつけた雪駄がばたりと落ちた。二人は吻と笑ふ。

『イヤハヤ、と、と、飛んでもねえ所へお迎ひに行つたもんで、旦那、私は最う御祝儀も御褒美も何にも要りはしませんから、ご、情願、眞平御免を蒙つて、此の儘引下りてえもんで、命あつての物種、彼の姐さんに、と、と、怨着かれた日にやア、物の一七日と經たぬ中に、と、と、憑殺されて了ひます、ア、可厭なことだ〳〵』と身顫ひする。『訝しいなア、何を言ふのだ、お前……姐さんが憑殺すとは何の事だ、ハヽア、又た出過ぎた事を喋舌つて喧嘩をして來たな』『喧嘩どころの騷ぎぢやアげエせん、ゆ、ゆ、ゆ幽的なんで、ドロ〳〵の燒酎火ソレ、こ、こ、是なんで』と手を陰に下げて幽靈の身振、『延孝さアーん、う、怨めしい――』、假聲もろとも抽然と伸び揚つた。

（八）

眞面目の滑稽！蒼くなつて話すのであるが、話す男が男であるから、妻昧は妙に道化がいつて、幽靈も甚麼やら踊り出しさうな形である。二人は覺えず失笑した。

最初は戲話だらうと想つて聞いてゐたが、まんざら嘘では無ささうな。其噺に依ると、現在今朝までも梅吉の影が映してゐた住居が、急に空家に變つて人の香も嗅げない伽藍堂。是は面妖なと座敷へ上つたが眞闇である、と俄かにミシ〳〵と家鳴震動して、奥座敷から變な呻り聲が聞える、怖々ながら前進する出會頭、眞白な物がぬう〳〵と現れて、自分の頬を撫でた。うつと魂切つて逃出す途端、後方から皺枯れた聲で、延孝さん待て、私は梅吉の幽靈だお前に怨みも

つて憑殺す、待てーと呼びかける。きやッと叫んで戸外へ飛出したまでは覺えてゐたが、介抱されて息を吹返すまでは無我無中、悚毛をふるつて逃戻りましたと云ふ。

いかにも奇怪、妖しいのは幽靈が出たことよりも、寧ろ空家になつた事である、梅吉の影が消えた事である。現在前夜江藤の屋敷へ來て、固く誓つた言に虛僞があるとは覺ねられぬ。それが幽靈であつたなら兎に角、正しく脚が有る以上は、今宵の芽出たい門途を千年の春と壽ぎ、花を飾つて待つてゐなければならぬ理だ。然るにごろ〳〵の鳴物拔きで、突然姿を掻消すとは、氣の知れぬこと夥だしき花嫁御、その裏面には必ず深い事情が潛んでゐるであらう、と德右衛門は眉を顰めた。

須永は那麼事には無頓着である。それこそ面白い妖怪沙汰、いで引捉へて此の席へ曳摺出し、念佛がはりの酒責にして腰から下の無い花嫁を醉ばらはせ、十萬億土への里歸りを忘れさせるも一興であらうと、好奇の逸り雄、刀を把つて立揚つた。德右衛門も餘りに訝しいので、實地見屆の爲に同行する事になつた。

梅吉の住居に行つて見ると、果然人氣のない空家に變つてゐる。近所に就て聞き糺すと、梅吉さんは何でも或る大盡客に落籍されるといふので、今朝程暇乞に廻つて間もなく、世帶道具

を片附ける樣子、晝前は確かに家に居ましたと答へる。

德右衛門が探偵をしてゐる中に、氣逸の須永は突然表の格子戸を開けて中へ這入た。灯火も持たぬ鼻先の黑きこと漆のやう、床下から吹揚げる陰濕な空氣が、魔の手の冷たさを竇らして、髣髴るが如く顏を嘗める。

下駄穿きの儘座敷へ上つてがた〳〵床板を鳴しながら奥の六疊へ踏込んだ、忽ち何物かに跌いて蹌めく途端、ぐつと毛脛を摑んだ者がある。

素破こそ化ござんなれ！摑んだ者を摑み返すと、鬼の腕とも想はる、太く逞しき氣な一片の肉塊。捻上げて曳起すと、犢のやうな偉大な怪物が、下から勃然と飛上つた。おのれ！矢聲をかけて組着いたが、敵は頗るの強力、釣込んで浮落しに頽さうとする。物々しやと踏込んで背負投の手を吃はすのを、左の手にて後帶を引摑み、右脚を開いて防ぐ。斯して龍虎相搏つ、ど、ど、どッ！、氣立ましい足の響は四壁を撼かして、闇に磨合ふ刀の鞘から、切齒の音が立つ。

（九）

魔か、人か、侮り難い意外の勁敵。素手では埒が明かぬと氣を躁らして、體を捻りながら抜討に發矢と斫つくる劍、その電光の閃きを空に流させ、斗然と突入る柄砕きの容もない早業に、撲地ごーん！須永は白刃を揮つた儘仰向に捻伏せられて、片手絞に喉を壓迫され、うーと呻きながら苦しみ悶く。

『春吉！春吉は何處居るかッ、早う灯火を點けい』、須永の胸へ馬乗に跨がつて、蠻殻聲を揚げるのは例の横山正太郎であつた。『ヘイ〳〵、最う大丈夫でござすかね』、『む、よか〳〵』。

次の間に避けて闇の中から様子を窺つてゐた春吉は、急いで燧を摺つて提灯に火を點じた。

『あッ。殺しッちまつたんですか』、『む、死らせた、俺が愉快に寝よる所を足蹴にいたいて、突然組着いてまかつたから、無禮の懲戒に息の根を止めて遣した』、『驚きましたなア、こりや』須永は喉を絞られて氣絶、大の字に僵れてゐるのであつた。

『春吉、此の者は誰か、汝、見知り居るかの』、『イヤ存しませんが、大方江藤の家來か何かでせう』、『ちやか、一体汝が幽靈の眞似なんぞいたいたのが不可ん、ちやから箇様な男が飛込んでまかる』、『ハヽヽヽ、なに、ちよいとした出來心の悪戯で……』一体彼の延孝てえ野郎は、此邊でも評判の憶病者でげすから、姐さんを苦しめた敵打に、一つ驚かしてキヤッと言はせて遣らうと思つて、小春さんが忘れて行つた白地の大浴衣が戸棚の中にあつたもんでげすから、そいつを頭上から被つて、ばた〳〵と戸を揺つて、バアと出掛けた怪談の趣向が大當り、偃める様に逃げて行きやアがつたんで、お臍の宿換手を打つて笑つたのは可いが、又候こんな野郎が飛込んで來たから、是は空呆手出しはならねえと思つて、狐鼠狐鼠と次の戸棚に這ひ込んで様子を見て居やすと、恐ろしい取組合が始まつたから、ア、旦那にお怪我が無ければ可いがと惕慄してゐやしたよ、むん、此者ァ旦那、何でげすせ、延孝の話を聞いて、ちやア俺が見届けて遣らうとか何とか云つて、宮本武藏を極込んだんで……エヘヽ、醜狀ア無えな、だが困りましたなア、鳥でも絞めるやうに、悠うお手輕に殺られちやア……後で面倒でせうせ、旦那』、『イヤ、懸念いたすな、活かさうと思へば無造作に活きる』、『オヤ、又た活かすんで、宛然手品の様だなア』。

德右衛門は戸口の所に立つて、屋内の模様を窺つてゐると、一時格闘でも始まつたやうな物

音が聞えたので、傍は延孝の話に違はず、何物か潜んで居るのかと薄氣味惡く感じた。と間もなくそれが竭んで、嘶聲に交る笑聲が洩れて來る、最う捉つて吃れる心配もあるまいと、提灯を提げた儘おづ〳〵其處へ這入つて來た。

恰ど横山が須永を曳起して、誘ひの活を入れるところ。是はと愕れて見て居る中に、須永は呿と氣が注いて、稍く我に復つた眼の据らぬ瞳に、きよときよとと四邊を眄してゐる。『や、佐賀屋の御主人か』、『須永さん、甚麽しました、イヤ〳〵、何てえ事だ、こりや』宛ら狐に魅まれた樣に茫然する二人の顏色が、又となく滑稽に看て取られて春吉は笑はずには居られなかつた。

『佐賀屋の旦那、私を覺えてゐなさいやすかね』春吉は灯火に顏を突出して見せた、『おゝ、おゝ、前は確か先達て此の家で見懸けた箱丁さんだッたね』、『ヘイ、左樣で、彼の金貸の老爺を打ン擲つた疎暴漢の春吉でげす』、『ぢやア何ぞの樣子を知つてゐるだらう、春吉、一体全体こりや甚麽したといふんだ、此の家は……梅吉は何處へ行つたね』、『ヘイ姐さんの行先ですか』、『爾よ』、『外に行き所が有りやアしません』、『何處だ』、『些と遠うがすよ』、『江戸の内か』、『いゝえ』、『横濱邊か』、『いゝえ』、『東海道筋か』、『未だ〳〵』、『京阪ぢやアあるまい』、『ヘン、それぢやア何處だよ』、『喫驚しなさんな、梅吉姐さんは十萬億土へ立ッちまつたんだい』、『えゝッ、死んだ！』。

（十）

愕然と顏色を變へた佐賀屋を、春吉は冷笑する樣に尻目にかけて『何ね、お前さん、今日の晝過までは河岸に着いた海老のやうに潑溂してゐたんでございますが、夕方になつてから急にね甚麽も人間の命ツくらゐ、脆いものはございやせんねえ、明日ありと思ふ心の仇櫻、夕に白骨となつて、チリテントン南無三婆囉、沒駄喃、ヤットコセ、ヨイヤサ、これわいなと、御經の文句にもございやす通りな、實は遺言もありやしたから、尊君の所へ是非お知らせに出やして、まア香奠の百兩も頂戴するんでごせえやしたが、お芽出たく飲んでらッしやる所へ、這麽話を持つてくのも延喜ではなし、其中にはお向ふさまから御悔みに來てお呉んなさるだらうと思つて、先刻からお待ち申してゐた樣な譯で、ヘイ、貴君がお通夜をして下さりやア、佛も何のくらゐ悅ぶ事だか知れアしません、有難うございやす』。

『オイ〳〵春吉、自分ばかり呑込んで爾う喋々と饒舌つたつて、俺には何が那だが些とも解りやアしないよ』、『オヤ、左様でございやしたかな』、『一体梅吉は、甚麼して死んだ〳〵、死ぬといふのが訝しいぢやアないか』、佐賀屋は解せぬ貌である。

『ヘイ、餘程訝しうございやすよ』、『急病でか』、『病氣ぢやアございません、ヤッたんで、コレ、是でげすよ』と持つてゐた煙管で喉を突く眞似をする、『えゝッ、自害か?!』、佐賀屋は愕然とした。

『何だか知らねえが、美事にやッつけちめえやしたよ、血一滴瀝さず、女だけに嗜みのいゝもんで』、『何、血を瀝さない? 變だなア、だが春吉、死んだんなら其の死骸が無けりやアならねえ理だが、何處に在る?』、未だ疑惑が五分頃りに四邊を回看してゐる、瞿々した眼で。

『あ、爾う〳〵、肝腎の佛を御覽に入れない譯にもいくまい、ドレ、ちよつと此處へ持つて來ませう』春吉は立揚つて、次の空部屋の戸棚から一つの衣裳葛籠を引張出した、上には晒木綿をかけてある、それを重さうに抱へて來て須永と德右衛門の面前に置いた。

最早疑ふべき餘地が無い、梅吉は全く自殺したのである。發狂か、或ひは他に事情あつての煩悶から、乘りかけた玉の輿を早棺に換へねばならぬ事になつたのか、さりとは慘めな、脆い

命である——ご思ふ下から、延孝の幽靈譚や、自個の造つた罪などを憶ひ合されて、氷に脊筋を撫でられるかの樣、遽かに慄然と惡寒立つ。

『は、春吉、最う可い、彼方へ持つてつて呉れ、そ、その遺言狀とやらには、な、な、何れときましたから』、『ぢやア彼方へ移してから、その手紙たけを持つて來て見せて呉れ』、『イヤ爾いふ譯にはいきません、尊君へお目に懸らずに死ぬのが、何より殘念だと遺書にかいてあるくらゐでげすから、思が殘らない樣に一寸御覽なすつて下せえ』、『可厭だな、御免蒙る、俺ア死人と蘚薑は大嫌ひだ』、『だつて旦那、折格此處まで持つて來たんですもの、お眼に懸つてお呉んなせえな、ソラ、可うがすか、引繰返しやすよ』、『えッ、引繰返す?! 亂暴だなア』、『其方が手取早くッて世話が無え、ソラ、死骸がヒヨロ〳〵と這ひ出しやすぢ、一二の三!』。

喝聲もろとも蓋を刎ねて、斗然と葛籠を蹴仆した。橫さまに顚がる口から躍り出したのは、梅吉の骸と思ひの外、新らしい百兩束の紙幣が四つ!。

（十一）

愈々出でて彌々怪！延孝が見たといふ幽靈の正體も解らぬ中に、死ぬ理のない梅吉が死んで死んだといふ梅吉の亡骸が煙、その煙が凝固まつてお紙幣になつて、早棺かはりの古葛籠から化けて出た。當時評判の洋行歸り、柳川蝶十郎の手品でも恁は鮮かにゆくまいと、佐賀屋はぽかりと口を開いて惘れてゐる。

『やいッ！佐賀屋』、春吉は急に恐の聲を揚げた、『手前ア能くも梅吉姐さんを圖にして、江藤新平へ胡麻を摺りやアがつたな、金貸の鬼助に督られて、困つてる足許へ突込んで、親切ごかしに立替へた金を枷に、姐さんを新平の妾に世話をしようとした魂膽は、ちやアんと此方に解つてるんだ』、『ねゝッ、だ、誰か那麼事を……』、『言はなくッたッて、惡事は千里だ、それしきの事が解せねえやうな鈍馬ちや無え、姐さんは手前們の仕打が癪に障つてな、オイ、這麼恐ろせえ鬼の寄合つてる浮世に一日でも居るのが可厭だッてんで、ばた〳〵世帶を疊んだ上に、自分から奇麗さつぱりと足を洗つてよ、暮六つの鐘を相圖に其處の河岸からドブンと暇乞の、

ハイ左樣ならを極め込んちやつたんだ、だが流石は姐さんだ、手前のやうな劫突張だから、立替えた目腐金に未練を殘して、閻魔の廳まで催促に來めえもんでも無え、可哀想だから返して遣れッてんで、置土產に殘して行つたのが、ソラ、此の四百兩だ、さ、俺が代つて戻して遣る一枚でも取落が無えやうに、よッく數を算んで受取りやアがれ、えッ、矢、忌々せえ野郎だッ！』。

激した聲を絞つて肚一杯に罵り立てるより早く、顏へる手に四束の紙幣を摑んで、佐賀屋の顏へ發矢！。『うッ痛い、コレ、何を爲るッ』。

・・・・・・・・・・

生？死？、梅吉の行方は解らぬ。けれども彼が迫害された復讐として、うま〳〵江藤を欺き佐賀屋一派の胡麻摺黨に一杯吃はせた後で、突然姿を躱したものなることが、是で知り得られた。其の手段は無論公明ではない、併し彼れは毒に酬ゆるに毒を以てしたので、是くらゐに爲なければ陰險な敵に反省せしむるだけの効力がないと思つたのであらう。確かに手徹があつた佐賀屋が阿諛買込んだ駿河臺の屋敷は手金流れ、料理屋の拂ひから配り物の入費、其他の雜

用一切を合せて餘程の損害。その上に佐賀屋と須永は江藤に對して、面目玉を踏潰し、却すく
の失策を仕出來したことになる。

でも感心に偃するのは、世帶を疊んで椽の下の蜘の巢までも售り却し、血の出るやうな金を
拵へて、鏃一つ缺かさず、奇麗に佐賀屋へ返した事で、俠妓の本領は此處である。けれども彼
が斯くせねばならぬ樣になつた原因、恁く決心するまでの煩悶、決心を遂行した勇氣、それら
を斟酌して見ると、女の節義、藝妓の意氣張、美しい光輝を其處に認め得ると俱に、それに殉
して仆るゝに至つた悲慘の徑路が、珠の如き淚を以てプリントされてゐるのである。

橫山に宛てゝ遺した手紙には、甚麼事が書いてあつたのか、橫山は強い感動に打たれた。不
平骸髏の懷を遣る唯酒あるのみ。春吉と對座の茶碗を仰いで、鯨の如くに飮んだ、醉つて肱を
枕に轉寢の夢を蹴られ、起つて一場の格鬪に須永を捻り殺し、殺して息を吹返させて、春吉と
の押問答を、興がる笑に囑めながら、再び獨酌で飮んでゐた。轉て二人を追ひのけてから、水
入らずの春吉を相手に重なる數の杯、遂に一升餘りを雫も殘さず、痛飮淋漓、虹の如き煽を噴
いて、在りし阿嬌の面影を燈暗き空屋に偲ぶ。

夜闌けて興も盡きなんとする頃、春吉に奉書を沽ひ取らせて五六枚を米糊につながせそれを

表の扉にぴつたと貼つけさせて、隣家から借物の硯に禿筆を浸した、腕捲りの勢ひ込んで一氣
に奔らした龍蛇は、美事の墨痕！

その扉を表の門口に倚めさせて、ふらつく足に例の朱鞘をがたつかせ、小謠の上機嫌で何處
ともなく立去つた。

翌る日、妙な貼紙があるといふ噂が、ぱつと柳橋に立つた。途行く人も足を佇めて不審の眼
を瞬る。梅吉の古巢に時ならぬ花が咲いて、門前は黑山のやうな人群りであつた、その貼紙の
文字は

廟堂の俟伯沐猴にして冠す。若かず紅錯心血の丹きに。花落ちて江樓春寂寞。櫓を打つて空
しく看る暮潮の塞きを。（原漢文）

稼らはしき浮世、見るもいやに相成り、三筋の稼業さらりと止めて、梵天國へ旅立ち申し
候、

梅吉代

（十二）

梅吉の抱妓であつた小春は、四谷谷町から本村町一圓は其の巢窟であつた——に住まつてゐた同心赤堀德内といふ者の娘で前、谷町から本村町一圓は其の巢窟であつた——に住まつてゐた同心赤堀德内といふ者の娘で

あるが、德川の瓦解と共に扶持放れの木から墜ちた一家の究を救はうとして、仕込まれた遊藝を賣物に柳橋へ出てゐたのを、梅吉が再勤の折に、當人の身ぐるみ看板を估ひ取つて、血を分けた妹の樣に可愛がつてゐたのである。

お情に暇を出されて、是非なく家には戻つたものゝ、跡が甚麼なつたことかと思ふと、後髪を曳かれる樣で氣になつて堪らぬ。で二日程措いてから、母を誘ひ出して、お禮がてら姐さんの樣子をと、柳橋に行つて見ると驚いた戸外は人の黒山、何やら讀めさうもない難かしい貼札がしてあつて、差配が佛頂面をしながら、それを引剝がして町用取扱所——昔の自身番——へ持つて行かうとする所。近所に就て姐さんの行方はと訊ねたが、何處とも言はず暇乞に廻つた足で直ちに消えて失くなつたといふ。

失望して歸つた。情願して其の所在を知りたいと祈つても皆くれ手懸がなく、空しく半月餘りを過した。と或人の媒妁でお嫁の口が出來た。母も荐りに氣乘がしてゐる。此頃ぼつ〳〵流行つて來た寫眞を交換して、手數抜きの輕便な見合にしたらば甚麼かと、先方から申込んで來

た。生憎手許に撮つたのが無いからと、その寫眞屋を探したが何處に在るのか解らぬ。人頼みの夫から夫と探して貰つて、漸くの事に日本橋の本船町に一軒開業してゐるのを尋ね當てた。

寫眞屋といふものの門口を始めて潜つて見るのである、横濱では大分繁昌してゐる樣な噂を聞いてゐるが、未だ東京は流行の初期、自分の姿を鏡に撮られると壽命が縮まるの、背長が逆戻りに一寸法師になるの、と言ふ人があるのを半信半疑で聞いてゐるので、何だか薄氣味悪い樣な氣もした、甚麼して寫すのだらう、電氣とやらをかけて苦しい思をさせるのではあるまいか、などゝ危ぶみもしたが、好奇心の怖い物見たし、儘よと思ひ切つて、すつと中へ這入つた。

狹い沓脱の所から直ぐ梯子段で、若い男に導かれて二階へ通ると六疊の座敷に粗末な卓子と藤椅子を三四脚置いてある。次の間が光線取の天井を高く抜いてあるだけで、別に怖ろしいと想はれる器械も無かつた、只變に看られたのは、黒い風呂敷樣の物を冠せた三本足の化物？是に何かの機關があるんだなと眼を瞬つた。

と、階下から上つて來たのが、主人傭帶の抜手。背の低い瘠ら顔の四十年配、丁字髷に黒羅紗の古びた洋服を着て、外れた控鈕の胴衣の下から、紺絞の腰衿を食出させ、天竺木綿の兵兒

帶に素足へ上草履を突懸けてゐる。是でも當時は氣取つた灰殻先生の打扮であつた。

『寫眞を取つて貰ひたいといふのは、お前か』、横柄な挨拶だ。『ハイ、左樣でございふす』、小春は腰を屈めた、『左樣か、まアそれへ懸けさつしやい』、『ハイ、有難う存じます』、『何處だ、お前は』、『四谷の元組屋敷で』、『む、尾州侯の近所か、懐かしいなア、私の生れた所だ』、『オヤそれぢやア貴所も……』、『むん、以前は尾州屋敷に勤めてゐた、是でも鎗一筋の家柄だよ、ハツハツハ』。道理こそ士族の商法！素町人の分際として吾家のお客さまになるとは、不屆極の僭越者と睨まぬばかりの無愛想。是では願書を認めて差出せと言はれはせぬかと、小春は心に笑つた。

（十三）

寫眞屋の主人は横拘な体度を續けて『併も感心だな、若いのに……寫眞を撮らうといふ心懸は實に見揚げたもんだ、世間は追々開けてゆく樣でも、未だ頑固僻な没分暁漢が多い、寫眞は切支丹バテレンの法だとか、撮ると命が縮まるなんて、途法もない莫迦を云ふ者があるが、

那麼奴には馬糞を煎じて飲ませるが可い、寫眞は日本でこそ未だ流行の取着だが、西洋邊では最う黴の生えてる時分だ、一番早く行り出したのは、薩州侯の齋彬さまで、道樂にお撮りになつた景色物を將軍家へ献上した所が、薩州は魔法さでも使うかと被仰つて喫驚されたといふ話もある、何しろ一度撮つて置けば孫子の代までも殘るといふ調法な寶物だから、是から可厭でも流行らなければならない、其處を俺が見込んだから、下岡連杖に弟子入をして二年も修業したお蔭でもつて、兩刀を投出した今日でも、大先生でもつて威張つてゐられる、過日もな、東京府の大參事が下役二三人を引張つて、甚麼いふ事を爲るのか、實地を見せて呉れと來られたから、早速寫してお目に懸けた所が、やア此處に俺が居る、ム、私も居るぞ、ハイ今日は、貴君は私でございますか、是は是は始めてお眼に懸ります、手前は貴君のやうな醜男子では無かつた筈だが併しよく肖て居りますなア、と云つたやうな譯で大笑ひさ、ハツハツハ』。

言はいでも可き手前味噌を列べてから『エート、時にお前は甚麼風に寫す望があるだらう』、『甚麼風ッて、どんな風でございます』、『全身にするか』、『え？、電信とやらを架けなければなりませんか、矢張ア丿針金を引張るんで』、『何を申して居るんだ、身全体を寫すことさ』、『オヤ、那麼大きなもんですか、ちやア襖くらゐ有りませうね、不可ませんよ、そんなに大きくッ

ちやア、持運びに不便ですわ』、『アハヽ、飛んだ穿違ひだ、ナニ、ごんなに大きくとも二寸か三寸に詰るんだ、全身が可厭なら半身に爲ようか』、『爾ねえ、半紙ぐらゐが恰ど可いでせう』、『困るなア、こりや……話よりは實物が好いさア、此處に出來たばかりの寫眞が四五枚あるから、是で宜しい型を見立てなさい』。

傍の棚から箱を下して、中の寫眞をばくりと其處へ出した。小春は異らしさに急いで把上げながら、『まア、能く映つてゐますこと、全然活きてる樣ですねえ、あラ衣裳の縞柄までも分明解りますよ、こりやア妙だ』。始めて寫眞といふ物へ見參するのであるから、尠からぬ驚嘆に打たれて、一枚々々瞳を移して行く中に『おやッ！姐さんか……花ちやんだよ！』と叫んだ。

『阿誰か相識の人でも居るかな』、『相識ごころか、わ、わ、私の姐さん、姐さんですよ』小春は惶々と手を顫はせて、その寫眞を緊しく握りながら『モシ、此の人は何時來たんです、何時撮したんです』遽しく訊ねた。

其の寫眞には、跡を晦ました梅吉が愛兒の花子を抱き上げてゐる姿が、鮮かに映つてあるのだ。較や殺け氣味の窶れた頬に、重なる苦勞の痕を見せて無限の哀愁を語るが如き母の膝には豐腴とした玉の笑顏に愛らしい媚をたたへて、浮世を知らぬ天の使が、無邪氣に我を視詰めてゐる。

『むゝ、それか』と主人は頷いて『ナニ、つひ七日許跡に來た母子連れだがお前の姐さんといふのが訝しいね、顏立が些とも肖て居ないぢやないか』、『いえ眞個の姉さんではありません、妾が世話になつた舊の主人ですよ』、『むゝ、解つた、では藝者とか何とか、那麼稼業だな』、『爾です、居所が解らないので、頻りと探してゐる人なんですから、貴君、情願、何處に居るか、敎へてくださいな』、『イヤ、宿所は解らん、出來た頃に取りに來ると言つて歸つたが、此の二人に就ては實に哀れな噺があるよ、まア聞け悉いふ譯だ』。

（十四）

『哀れなお噺とは、一体甚麼いふ事なんでムいます』と小春は心配らしい顏で訊ねると、主人は梅吉の寫眞を取上げて、ちよいと眼を落してから、再び前に置いて、人差指の尖を其の姿の上に着けた、『是がな、實に氣の毒なんだ美人薄命とは能く言ふことだが、其の不幸は自分が造るのか、世間が爾うなる樣に慘く仕懸けるのか、俺には頓と解らんよ』。

又た餘計な冒頭を附けて、勿体振つた咳ばらひをしてから『此の婦人が俺の所へ來た時は、何となく鬱ぎ込んでゐたが、俺の顔を見るが早いか、貴君、寫眞といふ者は何年ぐらゐ保存もんでせう、と唐突に訊くから、左樣さ、大事に藏つて置いたなら、十年やそこいらは請合だらう、と正直に答へると、オヤそれつばかりと呆れた樣な顏をして、私そんなのなら撮りません、お金は幾個要つても構はないから、五十年以上百年まで屹と保たれるといふ請合をして、手固く拵へて下さいなと云ふ、無理な注文だと思つたが、出來ないと斷るのも劫腹だから、それでは種板ごと買ひ取つて置くが宜しい、玻璃に藥で燒附けるんだから、何年經つても色の褪める憂がないと言ふと、大層悅んでな、では爾ういふことに願ひますといふので、種板の外に一組三枚の約束で撮つたのだが、さア俺には其の譯が解らない』。

衣兜の中から鑢を取出して、鼻毛を抜き始めた、『普通寫眞を撮るといふ人は大抵が道樂、一時の娛樂に寫して見るだけの事だから、半年で色が剝げやうと、一年で紛失しようと、那麼事は無頓着の者が多い、然るに此の婦人だけは、家でも建てるやうに地震が搖つても火事を出しても、大丈夫請合にして呉れといふ、妙な注文ぢやないか、一体甚麼いふ事情かと尋ねて見ると、實は此の子へ筐に殘すんだといふ挨拶だ……ハックショ、あゝ痛い』、毛を抜く拍子に大きな嚔。

『えッ！筐？此の兒の、へえい』、小春は愕然として眼を瞬つた。『甚麼も訝しい、死にもせぬ中から筐……それも先の短かいお婆さんとでもいふのなら格別、今の若さで、と不審に思つたから、堀根葉堀聞いて見ると、妾、最う死しだも同然の身ですと、身上噺を仕出したが、何でもその良人といふのが寃の罪で、遠い島に流されてゐるとやらいふ事で、それが爲め漸々不仕合な境界になつて、今では家も無く纔成もなく、身一つを持餘してゐたが、情願して其の島へ渡つた上、良人の側で一生を暮したいのが望、爾うするには足手纏ひの此兒があつては邪魔だから、辛いことだが生木を割いて、身輕になつて島へ渡らうと思ふのだが、別れたが最期、又た遇はれるといふ的もなし、最ッ切にならうも知れぬから、切めては這麼母であつたと、大きくなつてから夫と知らせるやうに、寫眞を此の子の肌身に着けて身放して遣る心算だ、と涙ながらの噺ぢやないか、俺は實に泣かされて了つたよ、イヤ爾いふ譯なら代なごは要らん、只で寄進しよう、と云ふと、なか〳〵固い婦人で、無理に一兩の金を、爾も前拂に置いて行つたが……イヤ緣といふものは妙なもんだの、其の跡へお前が來るといふのは、全く神の引合せ、不思譯だなア』。

小春は之を聞く中に胸が一杯になつて、莽りと涕を啜つてゐたが、遂には堪へ切れず、袂を顔に卓子へ突俯して了つた。龍鍾とした梅吉の姿が、眼前咫尺の間に顯れて、漲る涙の下から切なき懐を啣ち立てるかのやうに感じられた。

と、階子段を跛々と音させて、誰やらが上つて來た。躡然と次の間に立つ人影、珍らしくも夫が支那人であつた。

（十五）

籃にと寫した俤影は、悲しむべき新消息を語るのである。梅吉は己れの境遇に打勝つべく、力の限をつくして奮闘した。が其の甲斐がなかつた。殘忍なる社會の迫害は、羽を殺ぎ肉を削り、寸膚を剩さぬ迄かりに窘り立てた。彼は是が爲に此世を棄つべく決心した、棄てゝ了はなければ得堪へぬ苦痛を遁るゝことが出來ぬと思つた。爾して殘る生涯の安慰を、戀しい男の身邊に求めて、俱に絶海の孤島に朽ち、潮青き磯馴松の下蔭に、その俠骨を埋めやうと發願したのである。

事情を知つてゐるだけに、小春は一汐強い感じがした。是だけでも氣の毒でならぬ、それに可愛い盛りの一人子をすら、涙を呑んで後に棄てねばならぬのかと、梅吉の心の底に立入つて想ひ遣つて見ると、他事ならず愁しくなつて、體裁悪いと知りながら、意氣地もなく涙が瀾れるのであつた。

『まア、何といふ情ない話でせうねえ』、稍と顔を擡げて、眞紅になつた瞼を拭きながら『此の姐さんには種々とね、悲しいことが其外にも有るんですから、東京に居ても詰らないと想つて、ツヒ那麼氣になつたんでせうよ、まア姐さんは兎に角、此の子が可愛想ですわ、お父さんの顔も碌々見覺がないところへ持つて來て、阿母さんにまで棄てられた日には、それこそ一生の因果といふものです、妾も足掛二年越し、抱いたり負ぶしたり、自分の子のやうに可愛がつた仲であつて見れば、假令姐さんが甚麼ならうと、此の兒だけは那麼慘めな思をさせる譯には參りませんから、ねえ、尊君、當人が寫眞を取りに來ました節に、悉いふ者が偶然やつて來て、悉々の話をして行つたが、是非一度お目に懸つて、種々御相談をしたいから、何時でも尋ねて來てお呉れ、若し來るのが可厭ならば、居所を言置いて貰ひたい、此方から上るやうに爲るからつて、ね、情願爾う被仰つて下さいましな』と囑んで、自分の名を告げた。

『用事未だ〳〵ありますか、還入る、宜ろしいか』、襖の外から舌だるい日本語、中を窺き込んで輾然笑ふのが例の支那人である。『あら、商京人！』と小春は驚いて椅子から離れた。氣味惡さうに其の姿を見ると、三十そこ〳〵の男で、龍紋を浮模樣にした牡丹色の緞子の袿子に青の褂を着けた打扮、餘り見かけぬ眼には異しくも想はれる。

『おゝ、盧安さんか』と主人は手招きして『宜しい、お這入りなさい、別段差閊のない客人だ』と椅子を與へて『お春さん……であつたな、お前の名は……』と小春に向つた、『今の話は承知した、當人が見えたなら能く傳へて置くよ』、『何卒』と輕く首を下げて『妾、寫眞が出來た時分に、又た上りますから』と立ちかゝる、『コレ〳〵、最う歸るのか、出來た時分にッて、未だ撮しやアしないぢやないか』、『あッ、爾でしたッけね、オホヽヽヽ』。

次の間に導いて、手輕に撮影した。何だ、こんな事か、と小春は餘りの呆氣なさに驚いて、甚麼苦しい目に遇はされるかと惱ついた愚かさを、自ら笑ふのであつた。匆々にお暇して門を出る時、眼に止めた標札には澤田守節。

跡には支那人と對座に、主人の澤田が打解けた談話を續けるのである、『盧安さん、何時出て來ましたな』、『私、昨日橫濱出ました、船靈岸島着く、築地居留地、友人泊る、直尊君尋ねました』、『あゝ、爾ですか、私を尋ねるからには、又た何ぞ巧い金儲の種を持つて來て呉れたんでせうなア』、『金儲、それ、その事〳〵、澤山有る、相談する宜しい』。手に銜めた玉の腕環をからからと鳴した。

（十六）

盧安といふ支那人は圓く脂切つた締りのない顏から、ニコチンに染まつた黑い反齒を剝出させて『澤田さん、今來た女、大さん別嬪さんある、彼女貴君是ありますか』と左右の手の人差指を輪違ひに叉んで振搖かして見せた。關係あるかといふ意味であらう。

『いえや、何でもない、今日始めて遇つたばかり……寫眞を撮しに來た客だ』、守節はちよいと首を掉つて『甚麼も貴公は女とさへ見ると、直に眼尻を下げて騷ぎ立てるから不可ん、別嬪なんて、此頃稍と流行出したばかりの言葉を最う覺えたのか、油斷がならんなア』と笑ふ。

『女、よいです、何時でも結構あります、併し私日本の娘嫌ひ、頭髮臭い、脇臭くさい』、『と限つた譯でもあるまい貴公の柄相應にそんな奴に打突かるんだ、アハヽヽ、女といへば此前異

人の洋妾に世話した口は、甚麼だね、皆な甘く納つてゐるかね』、『宜しい、異人さん、皆々大悦び、又た新口出來ました、二人三人お世話頼む、口錢大さん進上する』、『爾か、と云はれても右から左に發見るもんではない、まア氣長に探して見なくちやア、好さゝうな玉を掘出せまいが、盧安さん、今度は口錢が高いせ、一人天窓三十兩ぐらゐ奮んで貰はなけりやア、俺ア可厭だ』、『宜しいと』頷いて、衣兜から紙へ包んだ物を出した、それを卓子の上に振るとばら〳〵と轉がり出たのが幾粒ともない寶玉である。

『澤田さん、又た是れ賣ること賴みます、口錢、利益半分分ける事、此前約束違ひありません』

『味を占めやがつたな、大將、甚麼も險呑でならない仕事だけれども、まア可いや、賣れるだけ賣つて見やう』と粒を拾ひ上げて『こりやア能く出來てる、宛然眞物だ、此方の珊瑚なんぞは誰が見たツて、贋物とは氣が注くまい、可し〳〵、巧くばらして遣らう』。

手早く夫を掻き集めて『金儲ごいふのは是だけか、何ぞ外の變つた仕事がないかね、一攫みに大きくドンと來さうな』、『ソレ、其事、是から話す』、盧安は低聲になつて『澤田さん、奇麗な小兒一人、女の子、三つ宜しい、四つ、五つ、宜しい、それ買う人ある、貴君心當りありませんか、品宜しい、三百兩進上するありります』、『えッ！小兒？』守節は意外に驚いた。

『小兒を買ひたい？、不思議だなア、一体誰が買つて何に爲るんだ』、眼を睜つた、盧安は椅子ごと前に乘出して、長い頸を伸べながら『其人墨其斯あります、橫濱亞米利加船居る、一人二人欲しい、私莊文受けました、如何爲る仔細分りません』と薄氣味惡るくにやにやと笑つてゐる。

『では何だ、大方何處へ持つて行つて、叩き賣る心算なんだらう、野蠻の國には小兒を生膽にして神さまへ供げるとか、生肝を抉り取つて飮むと、病氣が癒るとか何とか、那麼恐ろしい風習があるさうだから、その材料に仕入れて行くのかな、と分つて見ると甚麼も難かしい註文だぞ、親を言瞞めて買ひ取るにしたところが、なか〳〵廉い金ちやア手放すものではなし、假令ば相談が出來たとした所で、地道で賣買を爲たんでは、此方の利益が食はれて了う、其上そんな事が公儀に聞えた日には、此の首も飛び兼ねはしないからまア命懸の仕事だ、危ない技藝だなアこいつは』澤田は腕又して考へてゐる。

『工夫ありませんか、工夫出來る、三百兩、四百兩、直ぐ儲かる、其邊子供拐う宜しいッ』、盧安は譯なさゝうに勸め立てる下から、前に取散らしてある爲眞の中の梅吉母子に弗と眼を注けた。『澤田さん、此の子！此の子！』、忙しく呼びかけて其の爲眞を取上げた、『是れ、誰ありますか』

か、奇魔な小兒、大さん宜しい、是れ奪る工夫ありませんか』。

『何、その子を？』、守節は凝然と花子の姿を睨みつめてゐたが、忽ち叉んだ腕を解いて、ぴたりと横手を拍つた、『うん、可しッ！引承けたッ』。

（十七）

梅吉は柳橋を立退く時に、平生家族のやうに眼を懸けて引立てゝ遣つた箱丁の春吉を呼んで、委細の事情を噺して、妾は當分所在を定めず、どんつく一枚の女浪人になつて、爲たい儘の惡巫山戯をする心算、就てはお前が此の跡に居殘つて、佐賀屋が見えたなら金を叩きつけて、思ふ存分耻面をかゝしてお呉れ、今夜は恁々の手牒になつて居るからと言含めて、四百兩の紙幣と横山に渡すべき手紙とを托し、近所の暇乞を濟まして、飄然と家を飛出したのであつた。

芝の實家といふのは疾に潰れて了つて、從弟に當る男は甲府邊に居るとのみ、生死さへも解らぬ、外に親類もなければ心懇い知己とてもない。假令有つたにしたところで、最早浮世の人情といふものに、能く〳〵愛想を盡かした身の、それを便らうといふ氣にもならぬ。

花子を連れて出掛けた、ところは淺草の門前町、俗に稻荷町又は溝店と稱する所の裏長家にゐる新内語の喜助。此の男は以前芝の實家の手代であつたが、放蕩に喰はれて身が持てず、とうとう下流の藝人とまで零落れて、今では吉原を花客場に毎夜二上りの粋な音締を流して歩く門附の境界。六十の皺になつても、喉だけは齡をとらせぬといふ暢氣な爺さんであつた。

三年以來消息を聞かぬので、什麼かと思つて訪ねて見ると、婆さんと二人切の詫住居、相變らずの元氣でゐる。おや〳〵と驚いた末がお互の身上話、吉原も此頃は不景氣でと喞すのを、實は其の不景氣を脊負ひ込んで、食客に轉がり込んだのだと喫驚させ、段々と自分の薄命を語つて、或る思惑を果すべき時の來るまで、一緒に稼がせて呉れる譯にはゆくまいか、最う二度と再び花を咲かせたいといふ野心はなし、慾じ可厭な娑婆に乘出して、有象无象の機嫌を買ひ、癪に障る思をするよりは、寧そ世の鈍底へ身を落して、氣兼のない、苦勞を知らぬ、馬鹿げて面白い、貧乏を娛める、希望のないかはりに又た不平もない、褒められぬかはりに又た貶されもせぬ、それが極樂の門附になりたいのが妾のお願ひだと言込んだ。

喜助夫婦は膽を潰した。その若さでその容色で、爾もその才力で、何を夢みてか、乞食に毛の生えた門附に成下りたいのか、さりとは醉狂な茶がゝつた人だ――とは思つたが、普通にあ

る藝妓とは、少し調子の變つてゐる拋者生中の異見を打つても効驗があるまいまア〳〵仰せ通り、海の底には波風もなく、薄つぺらな比目魚でさへ樂に泳いでゐられる道理だからと、遂に其の志願を採用し、一つ竈の九尺二間を二つに割つて、食客のやうな、娘のやうな、お客さまの樣な、變な共同生活をすることになつた。

程なく梅吉の哀れな姿を、廓の夕月堤の朝煙に見るやうになつた。稼からげの鳥追笠に花の素顏をかくして、忍び音に泣く胡弓の調べ、如何なる人の成果かと足を停めて回顧る者は、いづれも奥床しさに其の俤を偲ばぬはなかつた。

いぢらしいのは春に負はれた忘れ簟の花ちやんである、何事も知らぬ少さな眼に四邊に群る人を不思議さうに眴しては、しく〳〵と泣きながら『母ちやん、歸らうよ〳〵』と駄々を捏ねることも度々。それも慣れて來ると人怖がせず、格子先から呼び寄せて、可愛い〳〵兒だと菓子を恤む花魁の顏を見覺え、『母ちやん、又た紅いお衣の叔母ちやん所へ行かうよ』と頑是のないことを言ふ樣になつた。あゝ何といふことぞ、乞丐になれよと產みはせぬものをと梅吉は其度ごとに心を刺さるゝ樣な懷がした。

（十八）

梅吉はいはゆる悟を開いたのだ。上へ騰らう、下へ降りたくはない、人に好く評判されたい、貶されたり笑はれたりするのは可厭だ、巾を利かしたい肩身狹く抑へつけられるのは眞平だ、金も欲しい、美しい物も食べたい、芝居も見たい、綺羅も張りたい、頭髮を光らしたい、朝寢がしたい、と方圖もない慾に搦まれて、風に逆らふ鳶の身程知らず、無理に羽を擴して空へ昇らうとする、喧嘩も苦情も、心配も、煩悶も、質屋の通ひも、頭痛膏も、青い息も、紅い血も、剃刀騷ぎも、阿彌陀佛も、根を洗へば皆それから出る。多寡の知れた人間の掃溜、オツチヨコチヨイの寄集つた此の娑婆で、大きい面の己惚を看板に、莫の煙のやうな名譽と豚の糞も宜しくの金錢とを、後生大事にひけらかし、五六十年も經てば消えて無くなるものと定つてゐる泥細工の身體に、眞服屋の肥料になつた赤い物や紫のべら〳〵とした布を矢鱈に捲きつけて、さア偉からう、見た呉れと獨り嬉り、異う澄ましてござるとは、何たる狂人ぞ。そんな阿房の眞似をして、大切な心の油を耗らし、あたら命の灯心を縮めるよりか、是が極樂の貧乏に甘んじ

て、願はす望ます、慾を棄て色氣を離れ、食つて寢て、來る日來る日を送つてさへゆけば、それでお米の虫の役目が濟む、中ぶらりんに浮いて迷つてゐはよりは、是から下に沈みさうもないといふ底の底まで身を落して、其處に眞の安心と和平を獲る、此の方が世話がなくつて、手取早くつて暢氣で面白い——と這麼風に悟つたので、思ひ切つた商賣替、門附といふ妙な物に早替りしたのであつた。人の知らぬ幸福は下層の社會に在ると觀じたので。

けれども彼に諦められぬものが一つあつた、それは八丈島に流された阿郎の事である。最う駄目だ、歸られる見込がない、再會の時節はあるまい、と何邊か思ひ切らうとしたのであるが、爾う思ふ下から未練が突揚つて、倘しや其內には赦免になりはせまいか、なりさうであると、那麼氣がせられて、打消す力も無いのであつた。

で、確かな所を突止めて見ようと思ひ、片桐義卿が在官中、親密の交際をしてゐた蒲生重章——裟亭、當時太政官の少史を奉職し、金井之恭などと同僚であつた——を訪ねて、官邊の模樣をそれとなく聞いて貰うと、四五年も經つた先なら知らぬこと、今の所赦免などは想ひも寄らぬ話で、或ひは一生島に置かれるかも分らぬと、取つてもつけぬ返辭に、空頼めの望も絶えて一時に落膽した了つた。

此上は島へ渡つて、と大膽なることを思ひ立つた。で遺兒の花子を處分する手始めに、通りすがりに見知つて置いた澤田守節を尋ね、母子連れの寫眞を映したのであるが、七日許經つてから取りに行くと、美事に出來揚つてゐた。

それを受取つて、日本橋から丸の內へ向つた、九段を上つて招魂社の造營場に這入ると、日はずんぶりと昏れて、田安屋敷の堤の松に薄青い夕靄、その梢からあか〳〵と月が出る。

此處は幕府の兵隊屯所であつたのを、此の年招魂社を建てる爲めに取拂ひ、作事場の竹矢來が所々に立廻してあるばかり。大工は暮六つの鐘を相圖に歸路に就て、早や人影も絶えてゐる。

中頃の空地に彫刻中の石塔籠がごろごろと轉がつてある。それに腰を掛けて人待貌に淋しく月を矚めてゐると、突然作事場の蔭から躍り出した男、鼻先冠りの手拭に八反の三尺帶、いきなり背後から手を伸ばして、梅吉を突飛しざま、驚く花子を引抱へてばた〳〵と駈出した。わッといふ泣聲が後に曳く。

『あれッー、ひ、ひ、人拐ひッ！』梅吉は叫びながら追蒐けた。墓地に九段の方へ奔り行く其の挾さ、危く影を見失はうとした。

（十九）

此の襲撃は頗る突然であつた。追蒐けて取押へるにも女の足弱、見る〳〵裡に懸放れて姿が消えさうになるので氣もそゞろに絶叫しつゝ、人の援助を呼ぶのであつた。

と、九段坂へ出ようとする工作場の入口の所で、嶽忽と現れた人影がある脱兎の如くに駈けて行く兇漢の行手に大手を擴げて如鬼と突立つた、驚いて摺抜けようとする兇漢の衿首へ、ぐつと肱をかけたが早いか、筋斗打たせて撲然！地響もろとも空さまに足が立た。

引捉へてゐた花子は振落されて、泥塵の中へ顚がつたのを、急いで擁き上げる隙に、兇漢は勃然と起きて、腰を摩りながら逃げ出した。『待て！』、喝聲を浴せられて、べたりと尻を撞いたが又た立揚つて逃げる。その疾さは鼬のやう、忽にして夜霧の中へ沒れて了ふ。

『や、こら花子ぢやッ！』、月光にその顔を窺いて驚いてゐる、と後方から半狂亂の姿で追蒐けて來た梅吉が『あら、其處に居るのか』と駈寄つて『あゝ有難うございます、お蔭さまで救かりました、わ、妾は、そ、其の子の母でございます、あ、有難う存じます』と息を喘らしながら

禮を言ふ、

『おゝ、おはん梅吉ごのぢやおぢやらんか』、『おや、貴君はッ』、同じ樣に眼を睜つた、例も變らぬ朱鞘の大小、肩を聳かして直立してゐるのが、横山正太郎であつた。

『こら、どたい甚麼いたいたちう理窟ぢや』と未だ戰慄の停らぬ花子を母へ渡して『今朝おはんからの手紙で、六つ半頃に此處來て呉れちう事ぢやッたから、早う夕餐を濟まして出掛けてまかつたが、突然人攫ひぢや、捉まへ呉れちう聲が聞えたで、立停つちよる鼻の先へ、ばたばたと飛んで來よつた怪しい奴、何やら小兒を引抱へよるぢやで、おのれッと取つて押へたやうな譯、惜いことには逃げられて了うたわい』と語る。

『眞箇に好いところに來てお呉んなはいました、尊君が捉まへて下さらなからうもんなら、此の兒を鬼の餌食にされるところ、お蔭さまで子兒一人の命拾ひをいたしました』と花子を抱き上げる、しく〳〵と泣いてゐる背を摩りながら『何ですか、餘り唐突で妾にも解りませんが、此頃は方々で小兒を攫うのが流行ると申しますから、大方その惡仲間でございませうよ』、『ぢやか、物騒千萬な、先以で芽出たい事でおぢやつた』。

と横山は梅吉の打扮を嚙めて『やア、おはん不思議の服裝をしよるが、什麼したちうぢや、

シて柳橋を立退いて以來、今まで那處に何を爲よつたのか俺、彼の遺書を見ての、すんばい驚いたぞ、凡ておはんの爲る事は神出鬼沒、俺ぢんには一向に解らんがなア、ハッハッハ』と笑ふ。

『爾でございませうよ、その御不審は道理です、實はね、橫山さん、いろ〳〵と貴君に御相談申したいことやら、お願ひしたい筋があるので、態々こんな所へお呼立申したのです、兎にあれ、彼の小屋の方へ參りませう』と先に立つて、今の大村銅像の在る邊へ誘ひ、切立てたばかりの石燈籠の上へ腰を懸けさせた。

（二十）

『貴君、彼の手紙を御覽なさいましたか、春吉に渡して置いた……』、梅吉は話の緒を切つた。

『見た、見て驚き申したぢや、世の中の人情ちうものに愛想が盡きたで、その浮世を背後に貧乏神の女房になつて一生莫迦になつて暮す所存、最う是切お眼には懸るまい、只今までのお馴染も夢ぢや、御機嫌ようと書いてあるげん、おはんの心中推察ないたいて、覺えず涙にくれ申

した、イヤ、彼の江藤新平と申す奴、奇怪千萬な男ぢやの』、橫山は當夜の出來事を噺して聞かせ、『春吉の武者振、敵の敗亡、やア、面白いことぢやつた』、と呵々大笑する。

『それに書いてございました通り、最う二度と再びお眼には懸るまい、懸かれる時節が來はしまいと、覺悟をして居たのでございますが、什麼のつても最う一遍、是非ともお眼に懸らなければならない樣な羽目になつて、御迷惑と知りつゝ、此處までお呼立申したのでございます、本來ならば御宿所へお尋ねいたす筈なのでムいますが、以前と違つて、這麼汚ない服裝の乞食同然の境界ですのに、押强く上りこした日には、御自分の御屋敷なら兎に角、お友人や御家來衆の手前に對して、恥をお搔かせ申すやうなものだと、爾う思ひましてね、故意と手紙を差上げたやうな譯なんで、だが能くお出くださいましたのねえ』、梅吉は花子を引寄せたなりに其前に蹲踞んだ。

『何のそげん、斟酌要るものか、上は王侯將相、下は非人乞食、一切平等の橫山ぢや』と月光に哀れな母子の姿を瞶めて『彼時から如何いたいた、今は何の渡世か』と不審らしく訊く。

『何ど御覽になります』、淋しい笑を憔れた顏に見せて『柳橋に居た時分ごは違つて、只今でに最う可厭な苦勞なんぞ爲たくとも出來ない、暢氣な世渡をして居ります、全然極樂に生れ替つ

たやうで、氣も霧々といたしました、ホッホッホ』、自ら嘲るやうに聞かれた。『極樂！何ちう稼業か』、『是でございますよ』と背後に置いてある皷弓と三味線とを把つて、きうと彈くと、悲しい音色の月に叫ぶ雁。『ヤッ、袖乞かッ！』、横山は愕然とした、瞬つた眼が見る〳〵中に曇つて來て『悲慘ぢやの』太息と倶に涕を啜る。

梅吉は俯いたなりに凝然と地を視詰めてゐる、堪へ得ざる憶を忍ぶのか、亂れた髪の毛のふる〳〵と顫へるのが見えた。

『それに就きまして』。良あつて顏を擡げた『横山さん、妾が一生のお願がございます、萬望此の子を』と力を籠めた詞で、尊君の御手許にお引取りくだすつた上に、一生御世話をなすつて下さる譯には參りますまいか、此の梅が尊君を見込んでお賴み申します、モシ、情願お慈悲にッ』、潤み聲の下に膝を折つて片手を突いた、燃ゆる心は涙を帶びた瞳の底に輝いてゐる。

『えッ、此の花子を俺の手許に？』と驚いて『引取つて養育し呉れいといふのか』、『はい、御承知くださることが出來ませんか』、『可かッ！』横山は例の鐵扇で左の掌をぴつたと拍つた。『俺ぢん兄弟に取つての大恩人！、其許の依賴を斷つて可いものか、確かにお引承けいたす、及ばずながら横山安武、身に換へても屹と養育の上、成長の曉、立派な婦人といたいてお返し申すでおぢやる』。梅吉は嬉しさに言も出ぬ、手を支いた儘我を忘れて泣くのであつた。

『シテ、おはんは此先什麼しやる心算か、いかに此世が可厭になり申したからとて、生涯門附でも居られまい、失禮ぢやが俺も横山ぢや、おはん一人の扶持ぐらゐは如何樣にもいたいて調進するぢやげん、何とか振方を變へて見ては、どぢやろかの』、『はい、有難う存じまするが、私のことは情願御心配くださいますな、此の兒の始末がついて、手を放れたが最期、妾といふ者は最う此の世から無くなつて了うのでございます』、『えッ、何ち？』、横山は乘出した。

（二十一）

訝かる横山の顏を梅吉は月に仰視げて『此の世から無くなると申した譯は只今までの梅が今日限り死絕えて、新らしい梅が生れ更るのでございます、花子の母の梅吉は最う墓の土になつたもの、此の兒は双親に死別れて、一人ぼつち取殘された孤兒だ、可哀想だから一生面倒を見て遣らうと、爾う思し召して、情願お手許に御養育くださいますやうに』と哀れなことを言ふ。

『そら可いが、新らしう生れ更るとは？』、未だ合點のゆかぬ面色である。

『はい、私は』と涙を呑んで『明日の中に此の東京を立退いて、八丈島へ渡る心算でございます』、『何、八丈島へ　では片桐どのゝ居らるゝ島へ……』、『横山さん、お察しくださいまし』、堪らず堰上げて咽び返つた。

太い眉を搖がして瞬きしながら、横山はむーと唸つた。唸るのは此人の癖で、強い感動を表す唯一の方式であつた。

『イヤお察し申す、濁れる世の小人等から窘り立てられても屈する色なく、榮花を望まず權勢に媚びず、飽まで節義を守るおはんの精神、感服ちやッ！』ぱんと膝を打つて『良人にひとしい片桐どのへ操を立貫く爲め、愛しい子供に別れ、命を的にその島へ渡つた上、生涯苦樂を供に仕へやうといふ覺悟は、こら容易な婦人では出來んこッちや、可か、おちやれッ、屹と一念を貫いて、末代の貞女鏡にのゝ、あゝ、名は朽ちんぞ、む！』

『就きましては横山さん、私の遺物がはりに此の子に附けて、尊君へ差上げる品がございます』と腰にさしてゐた金襴の袋を取つて、是が片桐が家に傳はつた寶ださうで、私共には鑑識が出來ませんが、何でも正宗に違ひないとか申すことでした、片桐の筐でございますから、家

を疊む時も好い價がついたのを、是ばかりはと思つて取つて置いた品なんで、最う二人とも島で果てる身であつて見れば、持參しましたところで寶の持腐れ、誰の手に渡るか知れませんから、情願尊君のお手にお引取りくださいまし』、『や、それは……折角の贈り物を辭退いたすも不本意ぢや、然らば筐として頂戴の上、此の花子がお二方の昔を偲ぶ便ともいたさう、辱けなうおぢやる』受取つて押戴いた。

『コレ、花ちやんや』、梅吉は花子を犇と抱緊めて、その顏を稠々と瞻つた『お前さんはね、今日から此の叔父さんの所へ上つて、叔父さんの子になるのだからね、最う此の阿母ちやんの事を、すつぱりと忘れて了はなければなりませんぞ』と曇つた聲で言ふ下から熱い涙が泫然と少さい頰へ墮ちる、花子はそれを悋しむものゝ如く、珠細工のやうな愛らしい眼を睜つた『今までのやうに駝々を捏ねてお泣きでないよ溫順にして、よく叔父さんの被仰ることを聞いて、皆さんに可愛がられてお貰ひ、いゝかえ、花ちやん、餘り食過ぎて、又たい〳〵が惡くならない樣にね、壯健に育つて、お、お、大きくおなりよ、解つたかえ』。

心の弱い柔棘者奴と笑はれまいと、自ら努めて言ふのであるが、張裂くる胸の底から突揚げる悲哀の、抑へても堰止めても瞼を切つて流れる雫、腑甲斐なき我よと齒を咬しめて聲を呑ん

だ。

『阿母ちやん、何處へ行くの』花子は不審らしく訊ねるのである。『阿母ちやんはね、遠い〳〵田舍へ行くのだが、その代りに、コレ』と花子の懷中に入れてある寫眞の帛紗包を取出して『此の中に阿母ちやんが居るからね、遇ひたくなつたら何時でも叔父さんに出して戴いて、阿母ちやんと呼んで御覽、阿母ちやんの身は離れても、こ、こ、此の、た、た、魂は、お、お、お前の影身に附添つて、お、お守をして上げます、おう可哀想な目に遇はせました、情願因果と諦めて、此の母を怨んでお呉れでない、ア、濟まないねえ』、帖然とその額へ頰を押つけて、身を戰かすと頑是のない幼心にもそれに釣られて物愁しくなつたのか、遂にしく〳〵と啼出した。

此の悲劇を眼前に瞰めてゐる辛さ、城を擂く丈夫も淋漓にくだる血淚を拭ふ遑なく、鐵扇を半開いて面に翳し、天を仰いで長哭した。

月は朧ろに高く上つた、田安御門の堤につゞく墨繪の松を洩れて、竹橋の歩兵屯所から慌だしい喇叭の音が聞えて來る。

其頃神田の筋違御門から須田町に這入つた所へ、呑澤樓といふ牛肉屋が出來た、流行の魁に珍らし好の客を呼び、大分繁昌を極めたものであるが、恰かも此の晩の五つ少し廻つた頃、二人連で上つた男がある、その一人は間の抜けた灰殻打扮の寫眞師澤田守節であつた。

(二十二)

『コウ姐さん、俺ッ們アな、秩父の山の山奥の灰燒小屋から出て來たばかりのもゝんぢいだが花の都の眞中に同類の香がするから、變だと思つてノコノコ這入つて來たんだ、共食をするのも仲間への義理だ、一つソノ猪の丸煮ッてえ奴を食ばして呉んな、何、猪ぢやねえ、牛だッてハヽア、吉原から材料を仕入れて來るのか、人間を賣物に出すやうぢやア、北廓も餘程不景氣だと見えるなア、何を、平生食りつけてらつしやるでせう、その證據には天窓が文明開化だッて？戲談ぢやねえ、縮れッ毛のマドロスドロンケンと五一三六にされちやア困る、嬶アの角は始終食べつけてるから珍らしかアねえが、牛を食ふのは臍の尾切つて破天荒よ、むゝ、甘さうな句が爲やアがらア、モウ〳〵堪らねえ、早く持つて來な』。

威勢好く女中に挑弄つて、二階の隅に陣取つた漢子は、天窓がほつ〳〵流行つて來た毬栗の眼の烱乎とした、額の狹い、鳶つ鼻の淺黑い顏。絞の浴衣を下に双子の袷、變八端の三尺といふ俠せな打扮であつた、半紙を二つに折つて、手拭の間へちよつと挾んであるのを、投出すやうに側に置いて、ばつと裾を鏃つて胡座をかいてから、癖の樣に袖を肩へたくると、二の腕一杯に櫻の刺青が露れて見えた。

『金公、骨折饗宴としてはお安い御馳走だが、まんまと失策つた尻拭ひだからまア、是で不承をして、十分飲んで呉れ、變つた所だけが値打だ』。その向ひに坐つた寫眞師の澤田が言ふと、天窓を搔いて『イヤ面目次第もごアせん、いきなり彼の野郎が飛出して來やアがつて、スッテンコロリと……』と噺しかけた所へ女中がお誂へを持つて來たので頓かに口を緘んだ。

箱火鉢に早鍋の簡單な道具立、粗末な會席膳へ銚子やら肉皿やら箸立を切べたゞけで、席も割込の、低い衝立で仕切つてあるばかり、極めて平民式に出來てゐる、それが當時の牛肉屋であつた。

『ソラ來た、先づ熱い所へ駈附けろ、俺は煮方へ廻らう』澤田は肉を煮ながら『併し金公、東京も開けたもんだなア、つひ此頃までは長崎製方朝鮮牛肉丸などと云つて病人の補血藥に三粒

か五粒飲ませては、驗くの驗かないのと云つてゐたやつだ、それが恁して飯のお菜に喰ふやうになつたんだから、不思議ぢやないか、是に就て面白い話があるぜ、ソラ、井伊大老が櫻田で水戸の浪士に殺られた一件だ、彼の大騷動の起因をお前は知つてゐるか』、『え、掃頭さまが……大變でしたッけな、彼時は……俺らなんぞも二十代の彌次りざかりであつたもんだから跣足で駈出して見に行つて、御小人目附にイヤッてえ程引ばたかれやしたぜ、それが甚麼したッてんで？』。

『起因のそも〳〵は此の牛肉だ』、『へえ！』、『一体牛の肉は江州の名産で、毎年將軍家へ彦根から献上したものだ、その序に水戸へも贈つて遣るのが家例になつてゐた、すると或る年それを遣るのを忘れた、烈公は平生此の肉がお好であつたもんだから、什麼したのか知らんと思つてゐられると、恰ど殿中で主掃頭に遇はれた、イヤ彦根、今年は好物の牛肉が參らなんだが、如何いたしたのと訊かれた、失念仕つてござるとお答をすれば、何の事も無かつたのだが、旋毛の曲つた大老だから皮肉に出て、御藩では此頃大分攘夷論を唱へる族がござるとやら、牛肉は毛唐人の食する物、左樣な汚らはしい品を、よもや召上りはせまいと心得、却つて御迷惑と存じて差控へましてござる、と一本鎗込めたからグッと來た、おのれ不屆な雜言、覺え居

れッ……是が喧嘩の種になつて、どう〳〵彼麼大事が持上つたんだ』、澤田は得意になつて嘯す。

『こいつア珍らしいや』と金公は猪口を被りながら『私もその傳で、飛んだ櫻田の二の舞、まア首だけは助かつて一生懸命逃げた時の口惜しさてえものア無かつたが、併し尊君と盧安さんは能く彼處に頑張つてゐなさいやしたね、度胸が太えや』。急に微聲になつた。客の混合ふのも一時、五つ頃からは索然と閑になる。

『イヤ、太いのぢやない、出られなかつたんだ、出られないのが勿化の幸ひ、甚麼するかと思つて、木小屋の中から窺いてゐると、飛んでもない慈嘆場が始まつて、どう〳〵母子の生別れ彼の小兒は侍の手へお引渡しよ』、『えッ、ぢやア彼の兩刀が……へえー』と金は眼を瞬つて『ぢやア脈は上つちめえやしたな』、『なか〳〵以て、それが此方に取つて却つて仕合、巧い二番目の狂言が書けるんだ、金公、耳を貸せ、恁いふ魂膽だ』。

耳打の窃々噺が切れぬ中に、とんとんと階梯を上る跫音が聞えた。婢の案内につれて這入つて來たのが、若い娘と其の伴らしい婆さんである。異らしさうに座敷を回看してゐる娘の視線が、澤田の洋服姿に閃くと同時に『おやッ！』と喫驚したやうな聲を揚げた。

（二十三）

『まア、お珍らしい所でお遇ひ申すぢやアございませんか、這麼所まで召上りに入らつしやいますの、餘程お好と見えますねえ』。『なに、好だと云ふ譯でもないが、一寸用達に出掛けて來た序に、恰ど飯時でもあるし、甚麼な樣子かと思つて寄つて見たのさ、流行を逐ふのが俺の道樂だ、ハヽヽヽ』。

這入つて來た女連の客は日外寫眞を撮りに見えたお春であつた、守節は意外に駭いてはつと思つた、金公に眼配せして何か微聲に囁くと、金は妙な顏をして其姿を矚てゐるであつた。

二人は恰ど隣に席を取つた。牛肉屋は矢張破天荒だと見えて、女中に勝手を聞いては笑ひ出し、御飯に香の物を添へてと通す樣子が、衝立一重を隔てたばかりであるから能く解つた。

『左樣でゐらつしやいますか。私共もね、神田に恁いふ家が出來たツてえ噂は聞いてゐましたけども、寄つて見るのは今日が始まりなんですよ、大層美味しいツてえますが、爾うなんでせうか』、お春に衝立越しに話し懸ける。『そりやア評判に僞なしさ、旨いばかりぢやない、第一

滋養になる、是を食べないのはうそだ、寫眞と同じ事で、頑固舊弊な木人參は悪く言ふが、文明開化の世に牛肉を食べない様な奴は嘶せないね』、『爾ですかね、ではアノ是を戴くと、天窓に角のやうな瘤が出るの、夜半に油を嘗めるのといふのは、憎まれ口なんでせうかねえ』、『爾だとも、西洋の言では此肉をベラボーニース、ウメイと謂つて、赤ん坊が生れ落ると、乳の代りに食べさせてるくらゐなもんだ、ハッハッハッハ』、『いかなこつても、眞逆、オホホ、、』。

『お春さん、今日は何方だな』。『はい、アノ些と買物に……』と口籠つて『實はね、先生、明日邊お宅さまへ上らうかと思つて居りましたんですが、此處でお遇ひ申したのを幸ひにお尋ね申します、アノ姐さんの一件は甚麼なりましてせう、參りましたか知ら……』と豫て傳言を頼んで置いた梅吉の事を訊ねた。

そら來た、と澤田は愕然としたが、故意と平氣を粧つて『あ、爾う〳〵、話すのを忘れてゐた、彼の婦人は今日になつて稍く寫眞を取りに來たがな』、『あら、今日!、何と申しました?』お春は促込んだ調子で、衝立の蔭から身を横に此方を向いた。

『お前が見えた時の事を話して、恁々だと傳言したところが、尋ねて來られては迷惑だから、此方から四谷の宅へ尋ねて行くと恁ういふ挨拶だ』、『おや左樣でございましたか、お蔭さまで

念が届きました』とお春は悦んで『そしてアノ、小兒の事に就て、何ぞ話がありませんでしたかえ、與れるとか預けるとか』、『む、、あつた』。

澤田はちよいと金の膝を突つきながら『彼の小兒は何ださうだよ、薩州の武家上りでてんつるてんの、ソレ、朱鞘の大小を挿して、肩を搖りながら歩いてる……とか云ふとだつたが……エート、確た横山といふ名だ……お前知つてゐるか、その宿所を?』、『存じて居りますとも、横山さんなら番町の鮫島さんと彼仰る官員さまの御屋敷に居らつしやるお方です』、『番町の鮫島さん……む、爾だ、その屋敷に居る横山さんへ預けて行くが、當分の所容易に懐さはしまいから、嘸御當人もお困りであらう、就ては今までの好誼甲斐にちよい〳〵尋ねて行つて、其子を遊ばして與れたなら、どんなに悦ぶか知れやしない、幸ひ明日の晩五つ半頃までに、暇乞かた〳〵四谷の方へ尋ねて行くが、最う一遍顔を見て名殘を惜みたいから、情願その兒を連れて來て呉れ、一泊させて翌朝還しても、先さまは悪い顔は爲さらなからうと、恁いふ事を言置いて戻つた』、『あゝ、それで漸と氣が沈着きました』、『ハイ、是は始めまして』と連の婆さんは、席を辷つて、衝立の蔭から乘出して來た。『私は此のお春さんの隣に住んで居る者でございます、實はね、貴君、今度此のお春さんを淺草のさる

商人へお嫁に……』、『あらお嬢さん、那麼事を喋舌出さなくつたつて可いぢやありませんか』、『いえ、なに、爾でないよ、私がね、貴君、お世話をいたしたんで厶いますよ、そこでお見合は……オホヽ、貴君の所へ上つて映した御寫眞、氣が利いてゐますぢやありませんか、有難うございました、お蔭さまでね、すつかり先さまの氣に入つて、昨日芽出たく話が纏まつたんで厶います』、『お止しよ、お嬢さん』、『まア厭つておゐで、所がお前さん、急に御祝言といふ事になつて、オホヽ、足下から鳥の立つ樣に、嫁入支度さ、それで今日その品物を買入に出掛けての戻りなんで、そのお子さんの事も此の娘から聞いてゐるものですから、不問語に先方の耳へ入れました所が、爾いふ可哀想な子供なら、序に妹分として貰つても可いといふ話なんでせう、お春さんは悦んだの悦ばないのつて、來る途々も其の話ばかりさ、是もそれも皆な旦那の餘德、ハイ、有難くお禮を申し上げます』、牛鍋が炒りつくのも知らずに、一人で喋々、澤田を煙に捲いて了つた。『やア、こいつは芽出たい、お祝ひだ、婆さん、一献さそうか。』

（二十四）

横山正太郎は相變らず鮫島尙信方の厄介になつてゐた。鮫島は薩藩の秀才で、慶應元年同藩が寺島宗則や五代友厚の建議を入れ、開成所で養成した俊秀の少年を拔擢し、海外に留學せしめた際、やはり鮫島も森有禮と同くその撰に當つて英國へ赴き、一年の後、米國に轉じて海軍の技を學び、傍ら瑞典ホルジアン宗の傳道者であつたドクトル、ハリスの敎を受け、非常の苦學をかさねた末、慶應四年の夏森と共に歸朝してから間もなく、明治政府に登庸された新人物外務省の少辨務使といふ職に居たが、其頃の外務卿に澤從三位で、寺島が次官の大輔、柳原前光が大丞、楠本正隆が權大丞、花房義質が小丞、故人の文學博士外山正一などは鈍尻の一小書記官で飜譯か何かをして窘めつけられてゐた。

弟の森とは最も親しかつた苦學生仲間であるので、一番居心が好いと始終その屋敷——一番町の舊旗本跡——に轉がつて、食客ともつかず客ともつかぬ取扱ひを承けてゐたのだ、家族と云つても國から來た英學研究の書生が四五人、他に山出しの女中が二人、朝から晩まで怪しい氣な蠻音を闘はせるといふ氣兼のない家なので、橫山は主人公をそつちのけに、大に朱鞘の威光を發展させてゐた。

過ぎ去つた六郷川の一夜！忘れることの出來ぬ怨である、長州の浪士伊丹精介なる者を使嗾

して、弟の歸藩する途に待受け、卑怯にも飛道具を以て暗殺しようとした其の本尊は、そもそも何人であるか、是は單に弟一人に對する私怨ばかりでは無く、薩州一藩の人材を事に托して片っ端から取殺了け、宛かも蠶が桑を食むやうな工合に、漸漸その勢力範圍を押縮めて、自藩の手で政治上の權力を抑へ、我物顏に天下を弄ばうといふ大野心家が、黨を結んでその背後に潛んでゐるのではあるまいか。弟は第一番にその鎗玉に上げられようとしたので、畢竟敵は廢刀論の非難の聲が喧ましいのに突込み、恰かも其の意趣から出たやうに想はせる魂膽であつた に違ひない。して見ると弟一人の敵ではなくして、一藩の敵である。國家の敵である、斯る陰險な族を政府部內の重要な地位に立たせ置くといふことは、頗る寒心すべき事である。豺狼途に橫たはると同樣、不測の災が起つて來る。國の爲に民の爲に此の如き姦賊を芟除かねばならぬ、驅逐せねばならぬ、と慨う思つた。

で、伊丹精介の懷中から現れた證據の手紙を手掛りに、內々探偵もして見たが、一向に解らぬ、失望してゐる矢先に例の龜山玄吾が訊ねて來た。その次第を話して、何とか詮議の方法がないかと相談すると、私の方に心當りもあるから、暫くお待ちなさい、必ず確かな所を突止めてお知らせ申すと、引承けて、その手紙を借りて別れたが、什麼したのか、それつきり音沙汰がなかつた。

此の間にも橫山の癪に障ることが追々と出來た、それは當時の要路に立つ役人們の仕打が氣に喰はぬことで、大にしては外交內政、小にしては一身の行狀、見るもの聞くもの一つとして感服せぬ、嗚呼こんな事では日本の前途も知れたものだと、或時は涙を流して歎息し、或時は拳を握つて痛罵する有樣、他目には疑んど狂人のやうに見えた。

梅吉とは此の矢先に遇たのである、哀れな成行に濁れる世の無情を憤り、男泣の赤き心を最後の言葉に見せて、紀念の劍と共に孤兒の花子を受取り、朧月夜の影もなき九段の上から、盡きぬ名殘を右と左に裂いて分れた。是ぞ母子に取て現世の緣の切目であつた。

屋敷に連れて戻ると家中大騷ぎ、珍らしいので引張合の下へも措かず玩弄にされ、神の如き花ちやんは母のことも忘れたと見え、機嫌好く遊び勞れて、その夜は怖い叔父さんに抱かれて寢た。夜中に癖が出たのであらう、可愛らしい手を伸して乳房を探り、手心が違ふので不審に思つたか、睡い眼をぱつちりと開いて、橫山の顏を見るや否、喫驚してわツと啼出した。此時は流石の快男子も大狼狽、必死となつて賺し立てる中にも、憐れな者よと涙を呑んで、世に棄てられて兒を棄てた母の心を偲ぶのであつた。

(二十五)

お春は神田の呑澤樓で食事を濟まして、匆々に歸宅の途に就いたが、寫眞師の澤田守節は、其時までも未だ居殘つて、盛んに他の一人と飮んでゐた。

父の赤堀德內は最う德川が瓦解するといふ間際に歿つて、今は母のお仲が、弟の定男といふのに養はれてゐるだけで、外に家族は無いのである、淺草駒形の樂器屋で林屋庄平といふのが鳴物の心得ある女を嫁に欲しいと探して居るのを、隣のお菊婆さんがお見立で、お春を持込んだのであるが、甚麼ハイカラの差金か、流行の寫眞で見合をしたところが、孰方も氣に入つて譯なく緣談が成立した、其下から追蒐けるやうに殺急な婚禮支度、月末のお輿入に間に合ふやうにと婆さんが促立てゝ、廣小路の松阪屋へお春を引張出した歸路がけに、想ひがけなく澤田に出會したのであつた。

家に歸つてからは荐と花子の話が繰回された、姐さんが横山さんに預けたのは、義理堅く親切な醫學士に惚込んだ爲であらうとか、横山さんは武骨一遍の怖い面搆へ、小兒なぞは見たばかりで怯えるといふ柄であるから、嘸今頃は泣れて困つてゐるだらうとか。那麼お侍さまに育て揚られるよりは、馴れたお春さんの手に懸つて、可愛がられた方が甚麼に幸福だか知れやしない、林屋は小兒のない家であるから、定めし大騷ぎをして撫廻すことだらうとか。夫から夫と噂に花が咲いた。

翌る日になつた。今夜は必ず梅吉が暇乞に來ることゝ信じた。來たならば聞入れぬまでも異見をして、危險な八丈島行を思ひ止らせ、東京で身代を盛返させることに懲めて見たいものだ。花ちやんを連れて嫁入すると聞いたならば、悅んで承諾も爲ようし、祝つても呉れるであらう、或ひは子の愛に曳かされて此の土地に居着く樣になるかも知れない。兎にあれ今夜の勝負だ、とお春は考へて、仕事も手につかず、そわ〳〵と一日を暮した。

五つ半までに來るといふ澤田の傳言であつて見れば、恰ど今頃が好い刻限だと、日暮方から家を出て、一番町へ赴いた、鮫島さまの御屋敷はど訪ねて見ると、想つたよりも宏壯な搆へである。お春は甚麼やら身が引けるやうな感がした。

『御免ください、御免ください』、中玄關の方へ廻つて案內をすると、中からばた〳〵と出て來たのが、小肥りの膏切つた、鼻の仰向いた、頰の紅い山出し女である。

『何でごちやいます』、突立つて恠訝さうに瞬める。『私はアノ、四谷の谷羽阪上に居ります赤堀はると申す者でございますが』、『ホウ、谷羽を堀の中へ……誰が落したんでがんせう、家の物ではがしねえが……』、『いえ、赤堀といふのは私の苗字で、『はゝア、爾けえ、俺又た其處のお濠で谷羽を拾つて、届けに來てくれさつしやつたとばかり思つてゐた〻、大けえ聲で言つしやいよ、私、些と耳が遠上せてゐるだから』、『オホゝ、アノ當家さまに横山さまと祓仰る旦那がゐらつしやいませうねえ』、『赤鞘の大將け、居なさるだが今はお留守だ』、『オヤ、何方へ？』、お春は望を失つた。

『何ね、先刻の事だが、他から手紙が來るちうと、急に様子が變つて、ばたつごたん、大けえ音をさせて、風雨みたやうな怖ねえ見脈で飛出して行つただが、何處だか解りましねえ、威勢のいゝ人だから、喧嘩でも爲に出掛けたンだべえ』、『あら、爾ですか、困りましたねえ』、頓に俯垂れて哼と息を吐いた。

『一体何の用があるだね』、『え、實はね、昨日でしたか、旦那の所へ子供を一人お預け申した人がありましたでせう』、『あ、花子さアけえ、赤鞘の大將さア、何處から拾つて來たゝか知んえが、いかくハア、可愛氣な子でな、家中引くる返るやうにドンガラまつて、遊ばしてゐるだ

ホゝゝ、昨夕なんぞは大將、啼かれて困つての、抱いたり負つたり、薩摩の唄を臆辛聲で歌つたり、摺古木を臺所から持出して、假面を冠つて踊つたり、ヤレハア、大變な騒ぎだつた、見せたかつたなア、彼の様子を、オッホッホ』、『寶はその子の事で、態々上つたのでございますが、横山さまがお留守では仕方がございませんねえ、又た出直して上るといたしませうか知ら……』。

是非なく思ひ切つて、歸りかける途端、ぱた〳〵と小さな足音がして、玄關先へひよつくり と現れたのが花子であつた。『お姨ちやん！』眼敏くお春の姿を見て、ちよこ〳〵と駈出して來たのを『あれ、花ちやん！』、お春は堪らず飛着いて、犇とばかりに抱緊めたが、覺えず其の頬へほろりと一雫。

（二十六）

『お姨ちやん、何處行つたの、せんべんちきに？お衣買ひ？婆やも歸つて來るの、お土産呉れるかえ』、花子は愛らしい眼をくる〳〵させながら、抱かれたなりに片舌で訊く。身にふりかゝ

る涙の雨の、悲慘な運命に囚はれてあることも知らず、己れの境遇が今いかになりつゝあるかさへ辨えずして、お春の顔を見ると直ぐ凡ての事を忘れ果てて柳橋に居た時の心地になつて、お座敷か又は用達先から戻つて來たものゝ如くに思ひ取り、婆やも後から見えるであらうと、お土産の先請求をする頑是なさ。

『オホヽヽ、何といふ情ないことを聞かせるんでせう』、お春は涙の下から淋しく笑つて『花ちやん、此處は家ぢやアないぢやありませんか、叔父さんの家でせう』と言ふと、始めて氣が注いたらしく、不審さうに四邊を眴してゐたが、急に機嫌が變つて、『お姨ちやん、家へ歸らうよ、母ちやん許へ行かうよ』、泣聲になつた。

犇と取着いて離れさうもないので、お春は一汐いぢらしくも憫然に思はれた。怎にしても此儘見殘して歸る譯にはゆかぬ、無理にも借りて行かうと意を決して『アノ、御女中さん、尊姐へのお願ひでございますがね、私は此頃まで此子の里に居りました者ですが、恰ど今晩阿母さんが訪ねて來る約束になつて居りますんで』と梅吉から傳言のあつた事を斷して『折角爾う言つて寄越したんですから、今晩だけ此子をお借り申して、遇して遣りたいと思ひますの、就きましては情願横山の旦那がお歸館になりましたら、お春といふ者が恁々言つて來たから、據所

なく借して遣つたと、宜しく被仰つてくださいましな、明日の朝までには屹と連れて戻つて、私から能くお詫をいたします、ね、情願、宜しいでせう』と說きつけた。

『爾けえ』と女中は頷いて『そげねに引着いてるのを押放すのも慘い譯だの、そんだらチヨツクラ待たつしやい、朋輩と相談打つて來べねから』、『宜しくお願ひいたします』。奥へ引返して行つた。

程なく他行の支度をして、片手にぶら提灯を下げながら出て來た。『可かッぺえちうこんだ、連れて行かつせえ』、『有難う存じます、まア甚麼に二人が悅ぶことでせう』、『だけんと不見不知のお前さまに、猫ン兒でも借して遣るやうに、大事な子供を只手放しては遣らねえだからな私も一緒に送つて往くべえよ』、『御道理さまで……だが恐れ入りますねえ』、二人は門を出た。『滅多に外へは出られねえ身だから、こげなえ時でも無えければハア、東京の風には當れねえだ』、『左樣でございますか、御苦勞さまですねえ』、『四谷ちう所は何處だッべ、觀音さまの方け』、『オホヽ、御戯談を……それは淺草でせう』、『むゝ、ほれぢやア四十七士の墓がある、彼所邊け、吉原は近えだンベエ、序に見物して來べエな』、『オホヽヽ』。

花ちやんはお春に負はれながら、背の上で『嬉ちい〳〵』と跳返るやうにして悅んでゐる。

山出しは提灯を手にお春と噺をしながら、象のやうな足を曳摺るのであつた。

一番町の御廐谷へ出て、今度新たに出來た招魂社敷地——舊馬場と旗本屋敷の一部——へ突當つて、三番町通に來ると、兩側の屋敷は瓦解後幾んど空家だらけ、所々に店を出した商人もあるが、夜分はぴつたり、戸を閉めてゐるので、灯火の影もさゝぬ薄淋しい巷の、人通りさへ稀であつた。

纔て市ケ谷御門の見附内へ來た、舊幕時代までは一萬石以下三千石までの諸侯が三年の勤番で、番侍三人、徒士二人、足輕十五人、中間十二人の晝夜交代、鐵砲弓長柄などの嚴めしい道具立で警固をしてゐたのであるが、此頃は極端な開放主義で番兵も置かない樣になつたので、這麼闇の夜は一際物凄い空氣につゝまれてゐる。

左右から壓つけるやうに突立つた梯形の石垣、その上から臂を伸して頭を摑むかのやう、眞黒な松が星影を陰して茂つてゐるのを、能く首縊りがあるなどゝ聞いた噺を憶ひ出して、成るべく見まいと下を向きながら、足早にお春は行過ぐるのであつた。

『あれッ！』、突然連の婢が叫んだ、その足下にばたりと提灯が落ちた、お春は悸然として立停ると、不意に横合から躍り出した人影、いきなり背上へ手を懸けて、負つた花子を引奪つた。

あッと驚いて飛び着く弱腰をどッと蹴られ、ひよろ〳〵と蹌めいて石垣の根に帖然と跪いた。

『ど、ど、泥坊！』起揚つて追ひ縋らうとしたが、最う影は見えぬ、五六間先で婢が『こ、この野郎、惡戲を爲くさつて、承知がなんねえ、奴、食殺すから覺悟打てッ』と爭ふ聲がする。闇に蠢く二つの影、何やら長い物を曳張つてゐる。『う、う、私知らない、通り蒐りの者あ

（二十七）

提灯は打落された機會に消えた。頭上に押冠さつた松影の星明りを呑んで四邊に漆の色を刷いてゐる、その闇から『花ちやん！花ちやん！』とお春は悲しさうな聲を絞つた。

應はない。氣はそゞろ。跳の儘で倒ける樣に駈出すと、後方からいきなり袖を捉まへた者がある、『コーレ、此の野郎、人を蹴仆して何處へ行くだッ』、女中の聲だ。『おッ、お前はッ！』、『お春さァけ』、『姐さん、は、早く、探してくださいッ、は、は、花ちやんが見えません』、『えッ、花ちやんが!?、そりや大事だッ』。

二人は瞿々するばかり、狂氣の如く駈廻つて見附の内外を探したが、花子は影だに止めぬのである。喪然して舊の所へ復つて來た。

『甚麼したんでせう』、『何としたことだんべえ』、同じやうに太息を投げかけた。『こりや攫はれたのでは無かッぺえか』、『えッ、那麼筈が……』、『イヤ、無えことは無えだよ、赤鞘の旦那が爾う言ふてゐたせ、此頃人攫へちうことが流行るさうで』此子も昨夕阿母に負さつて、招魂社まで來た所を、大げえ野郎が飛出して、いきなり背上から引奪つて逃げる所を、好い鹽梅に俺がふン捉めえて取返したゞ、そげえな事があるから手前們も氣を注けろッてな、爾う言はれてるだ、だから彼の子は前から狙はれてゐたに違えなかッぺえ、と私ア思ふだがな』、『えゝッ』、お春は愕乎とした。

急遽の際であるから、花子を振落したのか、又は引奪られたのか、それさへ明かに覺えてはゐぬ、多分は此邊の若僧などが醉つた紛れの惡戲、女連れと侮つて嚇かしたものであらうと手輕に想つてゐたのである。で、花子の居ないのを不審して、居ぬ理はないと今の今まで爾う信じたのであるが、此の話に據つて恐るべき惡魔の餌食になつたことを、始めて夫と悟つたお春は餘りの驚愕に渾身の血が一時に、赫と逆上して、ふら〳〵と眩暈を感じた、其儘卒倒しさうな心地になつたのを、葬と石垣に取着いて、乾いた唇を咬しめて、苦しさうに息を喘らしてゐる。

『何しろ大變なことになつたなア』と女中は切れた下駄の鼻緒を手探りに繕ひながら、『眞闇で解んなかつたゞが、野郎は二人の樣だッたせ、最初灯火をはたき落して、私をドンと突いたから前の方へ僵張つたが、起きて見ると、春の高い野郎がゐるだ、腹ア立つてなんねえから、ヲン捉めえようとするちうと逃げやがる、逃がしてなるもんかと思つて、手へ引蒐つた物を力任せにウンと曳張つたゞ、爾すると野郎奴、ア、痛い〳〵、私ア通り懸りの者だ、勘辨しろ〳〵と哦鳴るから、放して遣つたらバタ〳〵と逃げくさつたゞが、何だか彼奴も迂散臭えなア、引張つた物は何だッけか、恐ろしく軟けえ犬の尻尾のやうだッた、大方絹の褌かも知んねえよ』。

と語るのもお春の耳へは遣入らなかつた『櫻はれたものなら仕方が無えだから、私ア是から大急ぎで屋敷へ歸つて、横山の旦那に話打つて、威勢の好い若え衆もゐるだから、引張つて來て探して貰うべえ、お前さア、什麼する、此處エ待つてゐるけ』、問ひかけても返辭をせぬ。重さうな首をがつくりと垂れた儘、呼吸も停つたかのやう、只茫として考へてゐる。

『那爾考えたつてハア今さら取返しがつくめえが……私、行つて來るだ、可いか』、女中はお春

を跡に殘して、ちよこ〳〵と駈出して了つた。

（三十八）

お春は歩くともなく無意識に足を動かして、市ケ谷の濠端を牛込見附の方へ、ふら〳〵と辿つて行く。

『あゝ、甚麼しよう、飛んだことになつたね』、枠に埋めた香臙の下から、哼と重苦しい息を吐いて『這麼事になると知つたら、彼の兒を連出しやアしないものを、餘り可哀想でならないのと姐さんに遇はせて悦ばして遣りたい一心から、無理に連れて來たのが私の過失だつた、横山さんが留守であつたのは、爾いふ災難があるから此の子を置いて行けといふ神さまの御方便であつたのだ、それとも氣が注かずに、這麼失策を仕出來した私は、腑抜とも痴ともいひやうがない、あゝ我身ながら熟々愛想が盡きて了つた』。

間斷もなく衝上げて來る悔恨の情は空虚になつた頭腦を尖々しく痺り立てろやうに、堪へられぬ疼痛を底に感じさせる。渾身は病餘のやうに喪然と力が脫けて、夢の中に宙にさまよつてゐる如く、それと知りながらも蒼蠅く顏にかゝるほつれ毛を、掻上げる元氣さへなかつた。

『あゝ面目がない、申譯がない、姐さんに取つて大事な一粒種だ、それを人に攫はれましたと何顏下げて言はれよう、姐さんは是までの馴染に免じて虫を殺して呉れたとしても、横山さんが何で承知しよう、預り物の人間一疋それを留守中に來て勝手に連出した上攫はれて了ひましたでは濟むまい、勘辨はならぬ、其處へ居直れッ……屹と爾だ、どんなに御立腹なさるか知れたものではない』。

と想ふと、怨めしさうに我を睨みつくる梅吉の凄い顏が、歷々と眼に泛んで來る。噛み着くやうに叱り飛す横山の銳い聲音や、魘える花子の啼聲などか、耳の底にひり〳〵と聞える樣な氣もせられるので、急に慄然として顏を擡げた。

晝さへ淋しい濠畔、殘れる秋の盛を其儘、ちらほらと遠くに提打の影が見えるばかり、行過ふ人もなかつた、水を隔てゝ城のやうに横たはつた一帶の堤へ、何の間にか月が上つて、薄絹を景かした夜霧に朧ろ描の松影、浮れ鴉の聲がその梢から聞えて來る。

『可厭だ〳〵、お二人さんに遇ふのはどんなことッても我慢が出來ない、最う遲かれ早かれ死ぬ命、死んで申譯をしたと聞いたなら、堪忍もして下さるだらうし、可哀想だと思つても下さる

に違ひない、寧その事に死なう！」。

ふつと、其の氣になつた、覺悟が定ると遽かに重荷が下りたかのやう、今までの悶も迷もちり〳〵と消えて行く。淋しい顏に婿然と笑つた。眥とした眼で四邊を眴すと、濠の水際に痩せた姿を立てた一株柳が、死神の手のやうな黑髮を振つて、颯零と招いてゐる。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

合羽坂上の住居には、その夜來る筈の梅吉が來なかつた。花子を連れて直にも戻るべき筈のお春も、夜の更けるまで戻つて來ぬ。

老母のお仲は少からず氣を揉んだ。就方も何方、盲合せでもして置いたやうに何の事だと呟いたが、生憎隣の婆さんは寸白の氣味で寢てゐるといふ、悴の定雄はさる屋敷へ奉公中で家に居ないのである。迎へに遣る者がないので、愚圖々々と待ち草臥れ、臥床に這入つて寢て了つた。

九の過ぐる時分でもあらう、表の戸をとん〳〵と敲く者がある。偖は娘かと飛起きて、戸を開けて見ると、それが意外にも風采の立派な武家であつた伴は小厮一人、馬上提灯を下てゐる。

「エ、お春さんといふ、確か柳橋で藝者をしてゐなすつた姐さんのお住居は當家で？」、小厮は尋ねる。「ハイ、左樣でございます、尊君は何方から？」、お仲は怪訝さう。

「此方は一番町の鮫島から參りやしたんで」、「おや左樣でゐらつしやいますか」、倘しやと胸騷ぎがする、「アノ、御屋敷へ娘が上りました筈で……」、「さア、それに就て此のお旦那が態々お出になつたんだ……モシ橫山の旦那、お春さんの老母ださうでムいますよ」、と小厮は提灯を翳した。

「お、ぢやか」と杳脫に這入つて「許せッ、乃公は鮫島方にまかる橫山正太郎ぢうもんぢや」、「おやッ、尊公さまが……まア」と首を下げて、「汚褻しい小屋で恐れ入りますが、情願お上り遊ばして」と古疊の塵を拂つた。

（二十九）

（86）

「や、深夜にまかり出て、飛んだ失敬でおぢやつた、乃公は其許の御息女お春ごのとは、柳橋に居らるゝ頃度々面會もいたいたで、能う御承知ぢやが、其許とは始めてぢや」と橫山は朧揚

に會釋してから『有樣はの、至急御息女へ内談いたしたい儀がおぢやつて、それが爲に夜中態々御邪魔にまかつたが御在宅かな』と例の鐵扇を膝に突立てた。

『まア、能うこそお訪ねくださいました』とお仲は恭々しく其前に畏まつて『えゝ、最う尊君さまの事は、始終娘とお噂をいたして居りまして、いづれ機會がございましたなら、手前も是非一度はお眼に懸つて置きたいもんだなんてね、爾う申して居りましたんですけども、何分以前とは違ひまして、這麼に零落れはてた身でございますもんですから、つひお耻かしさが先に立つて未だお伺ひも致さずに居りました、ハイ、娘は宵の口に御屋敷へ上ると申して出掛けましたが、今だに戻つて參りませんので、什麼したのかと心配してゐました所で……アノ、御屋敷へは伺ひませんでしたか知ら』、不安の顏色である。

『ぢや、今以て歸宅せんとか……ふむー』、横山は怪訝さうに首を拈つて『と其許は何事も御承知がおぢやらんのか、實は今夜、不慮の椿事出來いたいたのぢや』、『えッ、何か御座いましてすか、アノ娘の身に何ぞ變つた事でも?』、前へ乘出して横山の面を凝視めた。

横山は答もなく腕叉をして眼を瞑つた。何か考に沈んでゐる。その樣子を見ては增々變でなちぬ、『什麼も今夜は餘程訝しな晩でございますよ、アノ梅吉さんも今度八丈島へ立つとやらで

暇乞かたく手前們へ見える筈でしたが、それも音沙汰なし、尊君さまから花子をお借り申して吳れといふ傳言があつたもんでございますから、後生大事に御屋敷へ伺ひました娘は戻つて來ず、何が那やら私は狐にでも魅まれた樣な氣がいたします』。

『む』、横山は瀑と眼を開いて『梅吉は參らなんだか』、『はい』、『面妖なことぢや、シテ其の梅吉の傳言を齎らした者は誰か』、『アノ、日本橋最寄の寫眞師で澤田とか申す男ださうでございます』、『何ち?、寫眞師!?、ふむ』、又た考へてゐる。

『氣になりますねえ、娘に何ぞ間違でもございましたんでせうか』、『……』倘しも那麼事が御座いました日には、家が那麼に困るか知れません、彼の娘も實はね、旦那さま、柳橋から戻りますと間もなく、結構な緣談の口が出來て最う結納の取換せも濟みまして、此の月末に芽出たくお嫁入を爲ようといふ矢先なんで厶いますよ、それに倘然した間違でも御座いますと、一家は飛んだ嘆きを見なければなりませんが、一体如何したと申すので御座います』、早や眼を濕ませた。

『イヤ、御心配なさる程の事でもおぢやらん、よか、左樣な儀ならば一札相認めて差置くことに致さう、御老母、筆墨用紙を拜借いたしたい。』遂に何事も言はなかつた。お仲の差出す硯に

半紙二枚程の奔り書、米糊でぴったと封をして、追つけ今にも戻らるゝでおぢやらうげん、横山がお尋ねいたいたと左樣申し傳へてたもれ、委細は此の手紙に認め置いた、萬一御歸宅がなければ、其許及び親戚一同お立會の上に開封くださるやうに、可か』とそれをお仲へ渡した。

『有樣の儀は、御老母』と膝を進めて『乃公も永々都に逗留いたいたが、最早可厭になり申したぢやで、明日の早天歸藩いたす所存、梅吉どのにもお春どのにも永の御訣別でおぢやる、よかお傳へたもれ』、愴然とした語氣である、『えッ、最う鹿兒島へ……アノ明日？』、『出立いたすぢやで、其の暇乞を兼ね、相談にまかつたが、居んさんぢや據所もおぢやらん』と太息を吐いて『御老母、壯健でお暮しなされい、萬一今後梅吉どの存命お出會の節には、橫山詫にまかつたと今夜の事をお噺したもれ』、『はい、畏まりました』と一向に譯が解らぬながら、お仲は他人では無さゝうな氣がして、何となく名殘を惜まれるのであつた。『でございますが餘り殺急でございますねえ、娘が幸ひも戻つて參りますれば、切めてお屋敷までもお見送りに……』、

『イヤ〳〵、見送られては迷惑な旅立ぢや』、『えッ』、『何、是でお別れの儀式を濟ますと致さう、こら久平、灯火を點けい』、小厮を呼んで立揚つた。『御老母、其許も以前は武士でおぢやつたさうな、御同然、士は辛いのう』、袴の塵をはたきながら、ばち〳〵と瞬きした。

お春は申譯に命を棄てる氣になつた。田町側の豪畔で小石を双つの袂一杯に拾ひ入れて、ふら〳〵と土手へ揚つた。濠に張切つた水は、暈をぼやした月の光をうけて、蛇の鱗の蒼白い、漣を夜風に搖がし立てゝゐる。

人に見られぬ中と合掌して最期の念佛を唱へながら土手を駈下りやうとする後方から突然抱き緊めた者がある。はッと驚いて脫兎けやうと蹶いた。『待てッ、コレ、姐さん、ま、ま、待てと言つて待たッせえ、と、と、飛んだ事を爲るでは無えか、コーレ、駄目だちうことよ、うらが捉めえたからにやア、雷さまが落こッたッてハア、放すことでは無えだぞ』、それは田舍訛の男であつた。

（三十）

『情願放してください！、わ、私、ど、什麼しても、し、死なゝきヤならない譯が……で、後

生でございますから、死なしてくださいッ、モシ、放してくださいよ』。お春は抱窘められた手を振解かうと、死物狂ひに藻掻立てた。此の場合、救ほうとする人の情は、殺さうとする鬼の刃のそれの如く、邪慳にも惨酷にも想はれて、同じ水ながらも、飛込んで死なうと躁る矢先に遮られたのは、溺れて舷に取着いた手を上から突落されたよりも、猶一倍腹が立つて、且つ怨めしいのである。

『放すくれえなら最初から止めはしねえだ、止めるからにやア此方だッて了簡があるだから、コレ、短氣な事を爲ねえで、チヨツクラ、待てッあッ、こりや恐ろせえ力だな、ドツコイ、奴そんな事で負けるもんか、是でも村角力では西の大關まで取つた男だよ、ソーレ、見ろ、駄目だんべえ』。ずる〳〵と五六間曳摺つて、往來の眞中に押窘めた。

『お上人さま、稍どべえ、抑へて來たゞ、見さつせえ、未だ若え娘ッ子の樣だが、何たら事でこげえな短氣を爲くさるだか、いづれ情事か何かのハア紛紜から出たことに違えめえ、一つお前さまから其の譯を聞いて見て呉らつせえ、イヤいかいこと骨を折らせくさつたが』、息を喘ませて提灯の火を直してゐる。

『御苦勞であつたの、お前のお蔭で好い功德をしました、モシ御女中』と優しい聲じ呼びかけ

られて、口惜しいやら體裁が悪いやらで、顏を袂へ當たなりに潛々と泣いてゐたお春は、ふつと首を擡げて涙の間から其の姿を仰看げると、鼠の納衣に珠數を持つた五十年配の上品らしい老尼であつた。自分を抱止めたのは其の寺男らしく、茶縞らしい古袷へ小倉の帶、淺黄の半股引を尻掲げの下に見せて、絞の手拭を腰に下げたのは、お定りの圖である。

『一体什麼いふ入譯から、そんな無分別をなされます、そりやア大事な命を棄てるくらゐだから、窮極切端詰つた心配事があらつしやるに違ひないが、喩にもいふ一寸伸びれば尺、世の中の事は工夫のつけ樣で、四角な物も圓くなるし、苦痛も娯樂と變る事があれば又た災が幸に轉じることも御座るぞ自分の了簡で持餘した難儀苦勞でも他人へ相談をすれば好い智慧が出まいとも限らない、まア〳〵如何いふ譯合か私に話さつしやい』と懇ろに諭したが、『と申したところで往來中で長話も異なものぢやの、私は直其處の市ケ谷で左内坂を上つたところの宗泰院にゐる尼ぢや、決して氣づかひさつしやる程の者でないから、兎にあれ、寺まで同道さつしやるがよい』、嬉しい言葉である。『ハイ、御親切さまに有難う存ます』お春は瞼を拭いて『お察しの通り、弗としたことから飛んだ羽目に陷りまして、此の五體一つを持餘すやうな事になりましたので厶いますが、お救け下さいましたところで、此先立瀬のない身上なので厶いますから

情願お慈悲に見放してくださいまし、其方が却つてお情で』、『いや〳〵、爾う言つしやるのが迷ぐいふものぢや、能く言ふことだが、人を助けるのが出家の役、假令甚麼事であらうと此儘見殺しに爲るやうな事はしませぬから、まアその命を此の尼に預けて、暫時の所死ぬのを思ひ止らッしやい、尼の手に餘つた難儀ならば、何時でも死して進せる、商賣柄での、印導はお手の物ぢや、ホッホッホ』と笑ふ。

お春は考へて見ると、其の言に道理と肯かれる節もある、死なうと覺悟をしたことが、或ひは逸まつた、間違つた、愚かな分別ではあるまいか、外に自分の罪を詫びる、潔白を證すことの出來る工夫が有りはせぬか、とも疑ふ心が泛んだ。その疑が取も直さぬ光明である、希望である、縱令爾でなくとも、此人の情誼を仇に振棄てるのが道でない、振棄てようとしても今の塲合協はぬことである、兎にあれ其の納衣の袖に一時を托して、運命の行先を自然に任せることに爲ようと思つた。

『それ程までに被仰つて下さいますなら、お言葉に甘へるやうで何で厶いますけぞも、兎に角お噺を申し上げることに……』、『あ、爾うさつしやれ』、尼は悅んで『政吉や、急いで參りませう』と促し立てる顏に、滿足の笑が搖いてゐた。愚くしてお春は死神の手から放れた。

『まア、お前、什麼したといふのだえ、人の氣も知らずにさ、夜鷹や惣嫁ではあるまいし、宵に家を出て、夜明に戻つて來る若い娘が何處にありますす、柳橋にゐた時分とは違つて、最う堅氣に戻つた今の身上、爾も近々にお嫁入をするといふ大事な體ではありませんか、那麼不品行があつては、此の母が先さまに對して濟みません、一体今まで何處に甚麼して居りました』。

お春はその夜明頃に戻つて來た。最も宗泰院の寺男政吉に送られたのである。

と見ると、まじ〳〵と一夜を過した母のお仲が、一時に赫として、寢床から飛出しての叱言の雨。それを防ぐ笠もなく、お春は龍鍾と俯垂れて泣いてゐる。

（三十一）

お春は佐内坂の宗泰院に行つてから尼に事情を話すと、懇々ご說諭されて始めて自分の短慮であつたことを悟つた。此の比丘尼は靑山善光寺の住持で光德といふ法性堅固の善智識であつ

た。宗泰院とは法縁續きの間で、始終往來してゐたのである。

で出掛けた戻り途、一泊する事になつてゐたが、恰かも同夜その檀徒に招かれ、神田ま

兎にあれ、一旦歸宅の上に母や弟、又は近所の五人組に打明けて相談をして見るが可い。其上で自分の顏を出し難いとならば、人賴みをして横山と梅吉の方へ詫を入れるのが道だ。過失とはいへ不慮の災難、お前の罪といふよりは其兒に定まつた劫であるから、先方も諒めて苦い顏は爲まい。萬一圓く納まらなければ私の所へ其荷を持込んでお出で、屹と埒を明けて、お前の肩の疑を癒して進せる、死ぬ程の勇氣があるならば、何故その賊を搜して小兒を取戻し、立派に言譯をせぬのだ——とは尼の異見であつた。

聞いて見るといかにも道理である、お春は悔い且つ慚ぢた。急に夢の覺めたやうな心地になつて、凡てお指揮通りに計ひませうと答へ、下男に送られて我家に戻つて來たのであつた。

『阿母さん、勘忍してください、這麼に遲くなつたのも據所ない事情があつたからの事なんで……決して那麼浮いた話ではないのです』と聲を塞らせて涕を啜るお春の顏を、母は殘燈の光に窺いて『ぢやァ一休如何したといふのだえ、泣いてばッかり居たつて、譯が解らないぢやないか……お前、横山さまの所へ上つて、何ぞ爲やアしないかい、間違があつたんだらう、ね

爾だらう』、『あら、よく知つてらつしやるのね』と泣顏を擡げて『お屋敷から何とか言つて來ましたの？』、『何とかぢやないよ、横山さまが……』と驚く下から、『阿母さん勘忍してください』と疊へ突俯して了つた。

横山さんが……』

双方とも暗の中で搜り合を爲るやうな事を言つてゐたが、段々解けかゝる緒に曳かれて、それから夫と事情が解つて來ると、母は唯膽を潰して當惑するばかり。又たお春は横山の思慮を測りかねて、恐ろしい獸に睨まれてゐるやうな氣がした。苦しい息を吐いてはお互ひに顏を見合つてゐる。

『兎に角、横山さまのお手紙を見ると爲ようぢやないか』、母は急に心注いて『そしたら大概先さまのお心持も解るだらうから、其上で何とか工夫をつける事に爲ようよ、愈々面倒になつたらその尼さまの御言葉に縋つて、明日にも私がお寺へ上つて相談をして見るわ』と横山の置手紙を布團の下から出した。

それを看るのはお春に取つて苦痛である。甚麼酷しいことを書いてあるか解らぬ。或ひは申譯の爲に自害をしろとか、打首にして持參しろとか、身顏の出さうな文句を擲りつけてあるのではあるまいか、横山が平生の氣性では言ひさうな事である。來た時に可厭な顏一つ見せず、

柔順しく沈着いてゐたといふのが、什麼も訝しい。爪を隠す虎の故意と爾う繕つて、油斷をさせる下心ではなかつたか、など疑つて見ると、薄氣味惡さが先に立つて、其の手紙を把上げることさへ躊躇つた。

えッ儘よ！死ぬ覺悟さへした身の何が怖からうと氣を勵まして封を切つた。二枚の半紙へさら〳〵と奔らした假名交りの筆蹟を、行燈の火影に翳して、拾ひ讀をして行く中に、お春は見る〳〵顏の色が變つた。

『お、阿母さん、た、大變ですッ！』、『えッ』、喫驚して摺寄る母の眼先へそれを突つけて『こ、此の通りですわ、私、ど、甚麼したら可いでせう』と渾身を顫かした。

横山は麼も何事を書いて遺したのか忙しく眼鏡を懸けて讀下した母の面上にも、驚怖の色が溢れて看えた。戶外は微白と夜が明けてゐる。

＊　＊　＊

横山が鮫島の宅敷に戻つたのは、九つ過の深更であつた。主人の鮫島は外務省の用で横濱へ出張、二三日逗留の都合で不在。書生や女中は旣に高鼾だ。

自分の部屋と極つてゐる奥の六疊へ這入つた。格別の裝飾とてもない座敷の索然として物淋しく、唯床の間にかけた文天祥正氣の歌、鐵石の落款ある一軸のみが、下に置いた古蒔繪の、何かの由緒ありげな馬鞍と映り合つて、此の室の主人を說明してゐる。

力なさゝうに朱鞘の大小を取つて、動乎と敷皮へ胡座をかいた。先づ哼と息を吐いて、腕を叉みながら瞑目默想する。

きり〳〵と眉は揚る、肩はめき〳〵と波打つ、活と開く瞳の炎に四壁を睨み廻した。がそれは刹那、再び首を傾げて、深い〳〵考に沈むのであつた。

『うむー』、例の呻吟、ばらりと叉んだ手を解いて、徐かに硯を引寄せた。小机の上に在合せた奉書紙、それへ發矢と筆を落した。趨る命毛の一齣一章、書いては唸り、唸つては又た書く。

書き畢つて一讀する下から莞爾と笑つた。立揚つて床の間から持出したのは、梅吉から贈られた名劍である。古金襴の袋をずいと扱いで、すつと扱く九寸餘の白刀、灯火を剔つて差翳せば凝る霜の切尖から白光陸離として閃めき立つ。

（三十二）

横山は薩派排斥の張本人――弟有禮を暗殺しようとした仇敵の何人であるかを探るべく、内々の苦心を重ねたのである、けれども根が竹を割つたやうな眞率磊落な男。裏へ廻つて他の秘密を摑むなどの詭略は、一向に不得手の方であるから、大抵こんな所かと朧ろ氣に想像されるだけで、確かな眞相を捉へることが出來なかつた。

で、頻りに燥れ込んでゐる矢先、當時の官僚が爲ること成すこと一として不平の種ならぬはないので、薪に油を注けたやうに一際膓が煮え返つた、それは政府が『萬機公論』に決すといふ聖勅を戴きながら、又『公議輿論』といふ名目の下に其基礎を固めながら、漸々權力がついて來ると、其公論を無視して我儘勝手の專制政治を布き、最う俺們の足場さへ出來揚つたら那麼物には用がないと蹴飛して、一意中央集權にのみ息勢張り、唯一の公議機關であつた集議院さへ太政官の御用取次御布告や規則の草案を可否するだけの顧問府に過ぎぬといふ有樣、一方には外交甚だ振はず、只いたづらに外人の鼻息のみを窺つて、靴の泥をも嘗めかねまじき卑屈三昧。たま〳〵之を直言する者、片桐義卿の如き硬骨の士があると、頭から壓へつけてびし〳〵と刑に處するといふ酷な行方をする。爾も政令は瑣末の枝葉にのみ流れて、肝腎の精神がなく虚飾を專らとするので、更に實功が擧らぬ、それが爲に天下の民は歸するところを失つて、藩閥政府に信賴する心がなく、所々に苦情を唱へて反抗の氣勢を示す者が出來る又た舊藩主を知事に戴いた各藩は、機會だにあらば一方に割據して、再び德川時代の封建制に綴を戻さうと鼠を睨む猫の眼光鋭く、爪を磨いでゐる。恁る危險を前に控へながら、世に時めく大官等は只自分の位階を高め、自派の權力を張ることにのみ熱中して、一藩相結び一黨相依り、奥女中のいさかひ同樣、嫉妬擠排、見苦しい繩張爭ひをしてゐる。爾して俄かに成上つた榮華の夢に浮れ、大厦高樓に大名を凌ぐばかりの贅をつくし、妾を蓄へ酒に浸り、色里に踏込んでは競爭の陀々羅遊びに、出所の知れぬ金を撒くといふ狂ひ方。こんな事では什麼して大政の補佐が出來よう、畏れ多くも我が大君に對し奉つて、誠に御申譯のない儀である――と横山は個樣に思つて、憤慨したのであつた。

勿論、彼が考へ間違つた點もある。今から見ると勢ひ止むを得ぬ成行であつたかも知れぬ。鮫島などは反對の意見を有つて、屢々彼と激論もした。和めたことも慰めたこともあつた。け

れども熱狂な、燃えるやうな氣燄を吐く彼の前には、宛かも火に翳した紙の如く、ちり〳〵と焚かれて了うだけで、何の緩和劑にもならなかつた。

梅吉と別れた翌日の暮方である。豫て探偵を頼んで置いた龜山玄吾から手紙が來た。それを見ると彼は狂氣のやうになつて、龜山の住宅へ飛んで去つた。

其の手紙には森暗殺の黑幕が解つたとしてあつた。龜山は今までの疑問一時に解けた、全く薩摩一藩の勢力が伸びてゆ立つてゐる大人物である。横山は一時に赫とし くのを妬み、夫を抑へて土俵の外へ投出し、天下の大角觝を獨で取らうといふ陰險な下心から將來の勁敵になりさうな森に對して、法度の逆手をかけたものと解つた。横山は一時に赫とし て押取刀で駈出さうとしたのを、龜山が葬と抑へ止めた。怒に任せて飛んだ間違を仕出來した日には、それこそ非常の影響を生ずる。薩州出身の先輩は勿論、藩公及び岩倉公にも迷惑の懸る事だから、先づ〳〵虫を殺してと、泣かぬばかりに和め立てると、横山も始めて己れの短慮に氣がつき、涙を呑んで其の言を聞いたが、無念は腹も蟄くやうであつた。

此の大人物とは何者？龜山も口外しなかつた。森も生涯語る所が無かつた。横山は血を流して默した。永久の秘！、遂に其名は其人と共に暗中に葬られて了つた。

横山が深更燈を挑げて認めた一篇の文字は、彼が肺を吐き血を塗つた政府への建白書である。彼は此外に鮫島と弟の森、鄕里の妻と母とに宛てた遺書を殘して曉露冷かに月沈む頃、颯然として屋敷を去つた。

行先きは神田橋内の集議院——維新前までは酒井雅樂頭の屋敷、目下は內務省と鹽務局——の門前である。未だ門の開かぬのを幸ひ、竹の先に建白書を挾んで扉に立てかけ、其前に一枚の荒薦を敷いて、胡座を叉みながら腹一文字に掻切つて死んだ。右手に殘るのは擬ひもなき岡崎五郎入道正宗の名刀、散りて猶薫しき梅吉の篦である。

（三十三）

横山がお春に遺した手紙の大意は——花子が何者かに奪ひ取られたといふ事と、家人共が一應捜して見たけれども手懸なく、止むなく町役人と府兵屯所へ届けて出た事を、歸宅してから聞いて驚いた。で當時の模樣を尋ねたく、旁々推參したのであるが、お戻りがないと云ふ事ゆゑ、殘念ながら立歸る。委細を母上へお噺し申したなら、却つて老体の

苦勞、それが御氣の毒であるから何事をも申さぬ、就ては必死の詮議探索を遂け、一日も早く花子を取戻したいのであるが、實は拙者事心外無念に堪へざる次第あつて、明朝六ツ時、神田橋御門內の集議院へ參り、割腹して相果てる覺悟である。心懸りではあるが花子の難儀を跡に見棄てるから、亡き後は拙者に代つて其の行方を突止め、薩府の舍弟森方へ何分の通知を賴み入る。不審なのは寫眞師の何某とやら、此方へ手を入れて一應探索するが宜しからう、猶又た梅吉ごのへ再會の砌は、花子を失つたお詫を兼ねて、横山生害仕つたと、斯く御傳へくださるやうに——とあつた。

了得は武士、一言も怯なびれたことは云はぬ、立腹の樣子も無い。寧ろ老母に同情してゐる天空海濶、洗つたやうな肚の裡。

兎はいへ、驚かざるを得ぬのは、明朝を期して割腹すると云ふ一事である。素より事情は解らぬ、解らぬが其儘に看過す譯にはゆかぬ。假令局外者の婦人の身であらうとも、一應は什細を糺して、止められるものなら止めても見たい、止めることが出來ないならば、切めて花子に對する自分の過失だけなりとも、心から詫をして、捜索取戻しの責任を確かに引承け、安心させて快く死なしたい。是が差向き横山に對する義務であつて、且つ其の好意に酬いる道だ、と

母も思つた、お春も爾く信じた。

で、昨夜から一睡もせぬので疲れ切つた體ながらも、大急ぎで家を飛出した。何の間にか夜が明放れてゐるので時間が遲くはなりはせまいか、と唯それば かりが氣に懸る。褄を取つて駈出したが、惶々と躁るだけ女の足の思ふやうに捗取らず、意氣地もなく汗流れ息促つて脾腹が疼むのを、兩手に抑へて恢へながら、九段下から濠畔を廻つて、神田橋內へ這入つた。

どか〳〵と集議院の方へ駈けて行く人數、それが先づお春の胸を躍らした。急に足が顫えて來る、動悸がする。

門前には五六人の府兵が突立つて、何處からともなく集つて來る彌次馬を制してゐた。『コレ何故爾う寄つて來るんぢや、寄つては不可んちうに解らんか、退けッ、退かんと此の槍で突殺すぞッ』。喝する聲の下から、黒山が颯と頽れる。尋常ならぬ光景、氣の故か血腥い香が朝風にほめき立つやうにも想はれた。

『モシ、お願ひでございます』、お春は人垣を押分けて門前へ駈込んだ。『アノ、アノ、當院に、若しや、よ、よ、横山さまと被仰るお方が、お、お、お見えになりやアしませんでせうか』、矍々と息を喘らして、府兵の側に小腰を屈めた。

『何だ、汝は？』、韮山笠に黒羅紗の制服、帶革に刀を落し差にして、短穗の鎗を提げた府兵が日に灼たけ黧い顏から烟乎と眼を光かす。『ハイ、私はアノ、その橫山さまへお眼に懸りたくつて、態々參りました者で、市ケ谷の春と申しますが……』、『ふむ、橫山は何ちう人か』、『薩州のお方で正太郎さまと被仰います』、『ちやア、それだツ、それ、其處にある死骸』、『えゝッ？』と叫んで眼を瞬る。

偉男兒一片の毅魄は早や天に歸してゐる。體は門內に移されて荒菰一枚を冠せた儘の慘憺たる姿。それを看るとお春はわッと泣出した。

（三十四）

お春の擧動が尋常でないのを、監視の府兵が怪しんで『こら、お前は此の橫山と什麼いふ關り合があるんぢや、親族か？』と尋ねる。

『いえ、親族の者ではございませんが』と泣顏を擡げて『平生懇意にして頂いたゞけで厶いますけれども、二人の間に種々混入つた事情があるので、それで今朝程當院に出ました事も、置手紙を見まして存じてゐるので厶いますが、萬望その死骸に、ひ、ひ、一目遇はして遣つてくんで來ますと、此の通り……わ、姜ア、くゝ、口惜しうございます』と早合點してゐる。

『アノ、お役人さま、お願ひで厶いますが、自害をすると書いてありましたので、喫驚して飛だございまし、切めて死顏なりとも見て行きたう厶いますから』、『む、戀しい色男か大事な旦那とあれば、夫も無理はない、可し、見て行け』、『有難う存じます』。

お春はひよろ〳〵と駈寄つた。顏れるやうに膝を地に落して、顏へる手に窓と掩を捲ると、俯けになつた橫山の半面が見えた。灰色に乾いた頰へ、下から傳はつて來た血汐が紫に粘然と滲んで、白い齒を剝き出した凄い形相。お春は瞥乎と窺いたばかりで、急に眼を瞑つて、ぶる〳〵と身を戰かした。

『モシ、橫山さん、と、と、飛んだことをなさいましたなア』、掩の上に肱を懸けて『ど、情願許してください、全く妾の麁匆から出たことで、申譯も御座いません、そのお詫にはき、きつと花ちやんを探し出して、た、假令、骨が砂利になつても、此方の手へ必ず取戻して、尊君のお墓へ連れて參りますから、か、勘忍なすつて下さい、又た私は、尊君と姐さんへ申譯の爲に

あ、あ、尼になつて、尊君の菩提を弔ひます、情願、その心に免じてお許しください、モシ、横山さん』と涙の下から喞ち立てる狀が、いかにも物哀れに見えた。

此の朝自殺者のあつたのを發見したのは宿直の使丁で、門を開ける途端にそれと心注き、院内に駈込んで怒鳴立てた所から、忽ち大騒ぎになつた。府兵屯所へ急訴した府兵の出張檢死を乞ふた時は、既に門前一杯の人群りであつた。

建白書があつたので、其の身許も原因も直ちに判然した。建白書は院の主典から判官、判官から長官秋月種樹――日向高鍋藩主へ――傳遞され、遂に太政官の手に渡つた。横山の死体は一時拭ざらしになつたけれども、秋月長官の命で手厚く取扱ひ、薩州屋敷へ引渡したが、鮫島家で之を引取つて火葬に附した。

横山が憤死のことは忽ち東京市中に擴まつて、聞く者いづれも其の忠烈硬直の氣節に感動したといふ。建白書の内容に前に記したやうな政治上の缺點と、官僚の腐敗とを一々指摘し、且つ當時征韓論を唱へる者あり、武官の中に大分その説にかぶれた者が出來たのを慨き『今日の急務は先づ綱紀を建て、信を天下に示し、蕭牆意外の變を慮かるべし、豈朝鮮の罪を問ふに暇あらんや』と痛言するなど、慷慨淋漓、筆泣き、墨哭するといふ悲壯の文字であつた。太政官は深く其死を惜み、祭粢料を下賜して、此の偉男兒の靈を慰める程に動かされた。

（三十五）

お春は集議院を出てから、其足で直ぐ麻布に廻つた。尼寺の善光寺を訪ねて、お住持さまへと取次を頼むと、小濶洒とした方丈へ通された。此處には光德尼が坐つてゐる。

『おゝ、お春どのか、能う參られたの』、血色の美しい、皺も餘り目立たぬ圓滿な顏に笑を含んだのが、圓窓から射込む日影の麗かな光を承けて、怎にも活々と平和らしく見えた。『早速ぢやが、甚麼でしたの、先方は何樣なことを申しましたえ』、納衣の袖から手を振出して、白檀の念珠をさら〳〵と膝に鳴す。

『ハイ、有難う存じます』、お春は手を支いて俯いた儘で『お蔭さまで大事な命を拾ひましてございます』と叩頭をしたが、言難さうに悶へて、睜つた眼を疊へ落して悄然して『お上人さまへ折入つてのお願がございますが』と稍ご尼の顏を仰看けた。

『ホウ、願？甚麼事ぢやの』、『アノ私をお弟子にして戴く譯には參りませんでせうか』と思ひ

切つて言放つと『え！弟子に……』と尼は意外に打たれた貌。

『そりやア、次第に依つては弟子にして進せまいものでもないが、爾うまで覺悟をなされた譯は一体甚麽いふのか、先づ夫を聞いた上でなければ、否やのお答が出來ませんの』、『御道理でございます、實はお上人さま、御心配を懸けました一件は、飛んだ事になりまして』と歸宅後の事から横山の自殺した始終を語つて『彼の慘たらしい樣子を見ましては、妾甚麽しても此儘家へ歸る譯には參りません、自害をなすつた深い仔細は存じませんが、お遺書の中に、花子を失くしてのけた譯を兼ねて死ぬのだといふ樣な事が書いてありましたからには、私が横山さんを殺したと同樣でございます、夫程の恐ろしい罪を迄りながら、安閑として暮しましては、彼のお方に對して濟みませんから、お詫の爲に髮を剃して、亡後の問弔ひをいたしたいと恁う思ふので厶います、そしたら一つは梅吉妲さんへの詫にもなりますし、又た貫尼のお允可が出ました節には、花ちやんの行方を探す爲に、雲水行脚どやらを致さうかとも思ひます、モシ、お上人さま此のお願だけは是非お聞入くださいまし』と泪の下から思ひ込んでの望、優しい瞳に一念不動の炎が燃てゐる。」

尼は端然として坐つたなりに、瞑目して靜かに聽いてゐたが『あゝ爾いふ事情か』と頷いて

『藝者稼業をされたとやら、昨夕の話に聞きましたが、浮いた世過をされた方にも似合ない、大層お堅いお志しで、私も感心いたしましたが、併し其事は親御が御承知なされたかの』と訊く。お春は答に詰つて『いゝえ、未だ相談を……』、『なさらんのか、そしてお前さまは近々何方へか御嫁入を爲さるさうな』、『ハイ』と言ふのへ冠せて『そりや不不ません、宜しくない發心だ』と眞向から斬下した。

『那麽事を爲なされた所で、横山さまは草葉の蔭でお悦びにはなりますまい悦ぶどころか、却つて御迷惑、又た梅吉どのも夫を聞かれたなら、怨みこそすれ、能く尼になつたと褒めはさつしやるまい、間違つたお考だ、それ程濟まないと思はつしやるなら、早くお嫁入をして、親御に安心をさせた上で、お連合ひの御亭主と共々に、花子の行衛をお探しなされた方が、甚麽にお二人が悦つしやるか知れない、第一佛の御心にも愜ふ道理ぢやがの』。

諄々と義理を碎いて諭す言に、人情の粹が籠つてゐた。お春はそれを說き破る力もなく、只と方向に迷つた。迷つた心は兩頭の蛇、一つは眼に殘る拭の下の血汐へ、一つは老い牖ばえた母の姿へ、ふら〳〵と蠢いてゐる。

（三十六）

築地の外國人居留地、新榮町の角に少さな洋風建の二階家がある。主人は趙馬鳳といふ呉服行商、外に番頭が一人と從僕らしい男とがある。

此の居留地は慶應三年の十一月に諸外國と協定し、明治元年十一月十九日を以て開市したのであるが、當時は各所に木戸の設があつて、府兵が警邏の任に當り、兩刀を帶びた者は鑑札を持たなければ出入することが出來なかつた。未だ攘夷熱の收り切らぬ時分なので、萬一の危險を恐れたのである。

叱え立てる犬の聲を後背にして、どんどんと表の戸を敲く者がある。四つ頃の闌けたといふ時分でもないのに、巷は蕭條として、向ふ側の會堂らしい家根の横から、上つたばかりの月の光が迂つて來て、戸口に立つた二人の影を細長く大地に描いてゐる。

『誰だ？』入口の側面についた窓の戸をぎうと開けて、中から顔を出したのが例の寫眞師澤田守節であつた。『おや、盧安さんに金公か、待てく、今啓けて遣る』、窓が閉つた間もなく、玄關口の戸が開いた。二人は急いで中へ飛込む。

先づ顔を見合せて莞爾と笑つた。守節は片手に蠟燭を摑んだ儘で『巧くいつたか？』と微聲で言ふと『いかなくつてさ、見なせえ、此の通りだ』と金公は肯負つてゐた茶箱の横腹へ手を廻して、とんと得意の皷。

三人は無言で階子を昇つた。二階は二室、裏に向つた一間に這入ると、板壁の粗末な洋風造りで、竹細工の椅子やら、ツーピシュー、牀皮箱やらを不規則に置いてある。壁の釘には長袴などを引かけて朱唐紙にかいた柱聯のやうなのも眼に注いた。

『分外に臭えなア、南京くせえや、ふん、ふん』、金公は鼻を鳴らして中へ這入つた。『何だか悉やつてゐる圖は、間の抜けた石川五右衛門も宜しくだ、ドレ、奪ひ取つたる千鳥の香爐、啼かして御覽に入れやうか』、足を投出して、どつこいしよと茶箱を床に下した。

『澤田さん、此處の家皆留守ありますか』盧安は椅子に靠つて、熱さうに團扇を取つて煽ぎ始めた。『む、今夜はな、近所の同國人の家に、關羽祭とか何とか有るといふので、一家其處へ出掛けて了つたんだ、私は好い所へ來たといふのでお、留守居役を吩附つたが、此方が都合が好いから、どろ〳〵寢轉んで待つてゐたけれども、さア氣になつて堪らない、巧く大願が成就し

て吳れれば好いが、萬一仕損じた時は事だと思つて、煙草の煙う碌々鼻へ透らずよ、だが能く強奪て來たなア、イヤ盧安先生大手柄、金公大明神、おい、此の通り拜んで遣るぞ、ハツハツハ』、澤田は膝を抱いて牀に腰をかけながら、さも愉快らしく哄笑をする。

『そりやア私の事たもの、睨んだ鳥を取り逃すやうな無聞なことは爲ねえやな、だが大丈夫かな』と下した茶箱を搖るやうに動かして見て『息が窒つて死去るやうな事が無ければ可いが……何しろ少ばけな幼兒だから、何かに世話が燒けて堪らねえ』と氣遣はしさうに、蓋を取つて覗くが早いか、『ヤツ、死んでる！』と叫んだ。

盧安も澤田も喫驚して立揚つた。急いで箱の中へ差込んだ盧安の手から、一つの少さな體が曳かれて出た。無慘！それが花子であつた。

いた〳〵しげな兩手を前で縛つて、口に猿轡さへ嚙ましてある。珠のやうな愛らしい顏は眞蒼、黒目の瞳も重い瞼にかくれて、幽かに開いてゐるばかりだ。早や絶息の有樣で、振動かしても彈力がない。

『失策つたなア、こりや、氣が急いだんで、手荒にやツつけたのが惡かつた、盧安さん、什麼しやう』、金公は腕叉して突立つた。澤田は失望の太息。

（三十七）

盧安は無言に花子の顏を瞶めてゐたが、突と抱へ上げて牀の上へ寢かした。爾して廊下の隅に在つた水甕を部屋の戸口まで持つて來て、手巾に水を浸して、花子の胸をぱた〳〵と打ち、一方にはその面部に霧を噴つかけ、頻りと渾身を摩つて、人工呼吸術を施すと、窒息してから間もなかつたと見え、花子は息を吹返して、わつと泣聲を揚た。

『占めた！』と澤田は叫んだ。『やア、盧安の大將、鉄腸者は跳だ、えれえ、えれえ』、金公は後背から煽ぎ立て『お蔭で五十兩が活きやした、いや有難え有難え』と悦んでゐる。

『アハヽヽ、壞れた道具の繕ひでも利いたやうに思つてやがる、這麼幼兒でも人間だぞ、おい金』と澤田は笑つて『おゝ好い兒だ〳〵、泣くな〳〵、それ、美味しい餡菓を遣らう』と膝に抱いた花子を賺しながら、衣兜に持つてゐた菓子を與へると、花子は泣き歇んだが、少さい眼をばちくりさせて、訝かしさうに室と三人の顏とを回看した。未だ氣が注いたばかりの矢先、恍惚としてゐる樣子。

『餘り動かす、宜しくない、靜かに寢せる宜しい』盧安は注意して、樓下へ行つたが、何やら粉藥のやうなのを持つて來て、砂糖に混ぜながら花子に飲ませた。斯くして牀に寢かして、毛巾を掛けて、澤田が上から摩つて遣ると何の間にかすや〳〵と寢入る。

『アハヽ、罪がないなア、どう〳〵ねんねをして了つた』と金はその寢顏を窺き込んで『這麼事たア知らずに、彼の阿魔ッちよや、横山とかいふ薩摩ッぽうが、今頃アきやッ〳〵云つて騒いでるだらうぜ、一昨日の晩、いきなり投げられた仇討、アハヽヽ、醜体ア見やがれ』、黒い唇を反らして冷笑つた。

『併し盧安大人、御註文通り、お望の品を仕立揚げたからには、成るべく早く金にしたいものだが、その三百金には何日有附けるだらうかな』、澤田は掌で自分の頬をぴた〳〵と叩く。『それ待つ宜しい、明日此の品、先の買客渡すことある、取引濟む、直渡す』、盧安が答へると、『おい大將、明日なんて云つたつて、此方們ア其日暮しの貧乏人だ、爾う暢氣に待つちやア居られねえやな、甚麼でげすえ、お前さんから一つ立替えてお呉んなすつちやア、澤田さんが百五十兩でよ、私が五十兩、只たそれつぱかりの金なら、甚麼でもなりませうが……』と金は催促しかけるその尾について澤田も『むん、それが可い、貴公は金持だ、一時立替へて置いても、明日になれば先方から取れるんだから、差支もなからう、爾して呉んな、如何だ』、『いや〳〵、不可ません、明日の夜進上する、待つ宜しい』、盧安は首を掉つた。

『可厭なら止せッ！此の獸奴』、金はぐつと怒れた、『一つ間違えや首の飛ぶ危ねえ仕事をして、えつちらおつちら此處まで持つて來たのに、玉を受取りながら代は跡ッてえ法があるけえ、コウ、餘り人を嘗めやがるとな、その豚の尻尾を曳摺つて、蹴鞠へ綱をつけたやうに、ぐる〳〵と打廻して、石橋の所作を演らせて遣らア、誰だと思うんだ、篦棒めえ、俺ア大和魂の金看板を叩き割つて、中から飛出した日本人だア、蹴殺して遣らうか、此の唐變木！』手拭を絞つて捻鉢巻をした。『唐變木宜しい、金上げる宜しくない、貴君いふと些とも解らん、ペケッ』、『えッ、癪に障る野郎だッ』。勢ひ込んで飛び蒐るのを『コレ、止せ〳〵、仲間揉がしては面白くない、先づ〳〵私に任せろ』と澤田が水を入れて引分けた。

仲裁した結果が、明日同道して横濱へ花子を連れて行き、立會の上に金の取引をするといふ事になつて、其夜は二人ともチヤン臭い部屋に泊つた。

翌る日、越中島から出る蒸汽船に乘つて横濱に赴いて、花子には衣裳を取換へさせ、一寸見ても分らぬやうにして、阿母さんへ遇はせて遣るから、大人しくしろと賺し含めた。乘客も多

くあつたが事情を知る者は無い。

横濱へ着いてから、西波戸場の河岸に在合せた蜉舟を一艘盜み出して、夜に紛れて沖合へ漕出した。其處には米國汽船が一隻碇泊してゐる。

（三十八）

此の汽船は米國桑港邊の會社所有で、シテーフと號する船であつたさうな。噸數其他詳しいことは解らぬが何でも米國線を定期航行して、吾邦との交通に便宜を與へてゐたらしく想はれる。

上海から下關、神戸を經て横濱に着してから、今日で十日許碇泊してゐる。愈々三日の後に錨を抜いて出帆する都合とやらで、盛んに石炭や貨物を積込んでゐる。

戸部山の杜にちらつく灯影を殘して港は全く夜の幕に鎖された。月の上るには未だ間のある夕闇を孕んで、膨れ立つ鉛色の波が、黒い鯨が浮揚つたやうな長い波戸場へ押寄せて、海魔の唸を揚げてゐるのを右に聽めながら、金公は必死となつて櫓を切つた。盧安は花子を抱いて胴

の間に蹲んでゐる。

飛ぶやうな舟脚、逸くもシテーフ號の舷梯下へ着くと、盧安は伸上つて『ウエッチさん〳〵』と喚んだ。その聲を聞附けて顔を出したのが若い水夫である。二人は何か大聲で二言三語いつてゐたが、引返して行くと、間もなく脊の高い漢子が出て來て、盧安を手招ぎした。花子を連れて上る、金も續いて其跡から上つた。

連込まれたところは狹い客室で、天井の洋燈から微い光が落してゐた。分外に陰氣な、頭が支へさうな艙房だと金は思つた。案内した脊の高い異人さんを熟視ると。鷲ッ鼻の眼の鋭い、頬にばり〳〵と虎鬚の生えた肩の張つた腹の膨れた偉大な漢子、綾の薄羅紗の脊廣に棒縞の窄袴を着けてゐた。出した手の甲に眞黒な毛が生えてあるのが、眼について、金は猿のやうだと驚いた。

是が墨其西哥人のテストラといふ人買だと傳へられてゐる。盧安とテストラとの間に談話が始まつたが、盧安は英語を知らず、テストラは支那語を知らぬ。中に水夫のウエッチが介在つて通辯した。ウエッチは上海に暫くごろついてゐたマドロスだ。その通辯も金公には解る理がない、妙な顔をして、ぼんやりと口を開いて、鳥が囀るかのやうに聞いてゐるだけだ。

躺て盧安は寢臺の上に腰を掛けさせた花子を抱下して、テストラの前に引据ゑた。花子は母ちやんに遇はせると言はれた事を覺えてゐて、其の母ちやんにあらぬを恠しむもの〻如く、〻そをかいて怖々テストラの姿を仰看げてゐる。

テストラは桃尻になつて花子を抱き寄せた。爾してその顏を眤と看て、何か喋々言ふ下から例の毛もくちやらの手を伸べて、花ちやんの天窓から羽二重の樣な豐腴とした少さな頰を撫でると、喫驚して泣出した。振切つて逃げては見たが、敦も馴染のない怖い叔さんばかり、取着く袖がないので、詮事なさ〻うに入口の扉に縋つて、しくしくと歔欷げる。一同は哄と笑つた。

『おい、安盧の大將』、金公は生欠伸を呑殺して、『金は未だかい？話は好い加減にして早く取る物を取つちめえねえな、澤田さんはお前の家で、首を長くしながら待つてるんだが』、頻りに催促をするのであつた。

『宜しい、今貰うことある』盧安は頷いて、テストラに其事を告げると、笑ひながら金公の顏を瞻つた。網棚の上から鞄を下して錠を開け、中から一つの皮袋を出して、寢臺の上へ倒さに揮ふと、ちやら〳〵と爽かな音を落して小盛高の金貨の光が颯と眼を射る。『ヤツ、偉えなア』

金公は急に艙房が明るくなつたやうな氣がした。

（三十九）

花の精が凝つたやうな可憐の兒——星の國の美の神が、意匠の限りを盡して造り上げた活ける雛は、米貨三百五十弗で買取られた。當時の弗相場が十弗で吾が十圓三厘であつたから、花ちやんの體量を假に三貫目だとすると、一匁が八十五錢餘につく。是が寶玉よりも貴い肉の價だ。

骨董品でさへ實價以上の値打をつけて賣買するのに、是は細工を見ずに只目方で買潰したのだ。墨其斯哥人のテストラは屑屋式の商法をやつたのである。それも何處へか持込んで奴隸にでも叩き賣るといふのならば、未だしも賣らる甲斐があるが、ステトラの捌先は那麼生優いしことではない。身毛の竪つ恐ろしい鬼の間屋に卸すのだ。

彼の身許商賣や、東洋に來た目的などは盧安にも詳しいことは解らなかつた。只水夫のウエツチが上海にごろついて居た時分の見知合で、偶然横濱で邂逅つたのがテストラと懇意になる

媒妁、盧安は南京町に支那風の喫茶店を出して、内實は船乗の賭博宿、如何はしい寫眞や畵などを集めては外國人へ賣つけたり、又た珠の贋物を仕入れては、日本の育に陷込むやら、洋妾の周旋を爲るやら、有らゆる惡劫を重ねてゐた矢先であるから、ウエッチは好ひ遊び場所だといふので、テストラを連れて來た。立派な紳士だと云つて紹介した。爾して日本の女兒を欲しいから世話をして呉れろと賴んだのであつた、で、花子を什麽いふ事に用立てるかに就ては、餘り深く注意もせず、訊ねても見なかつた。唯金にさへなれば可いと思つたまでのこと。

二人が金を受取つて歸り去つた跡で、テストラは花子を種々と賺し立てた。一生懸命に機嫌を取るのであるが、何分にも言葉が通せず、日本の家庭といふ點に就ては何の智識も有たぬ外人の事であるから、什麽して好いか解らぬ。折格の笑顔も却つて怯えさせる種、喃いては拗ね、拗ねては啼く。遂には焦つたくなる、腹が立つ。『えッ、面倒くさい餓鬼だ、勝手に爲やがれッ？』と英語で叫ぶ下から、拳固を堅めて、いきなり少さな脊中を擲しつけると、花子は寢臺の上へ顚がつて、絕入るやうな聲で泣くのであつた。

それを後に扉をばたりと閉めて、靴音荒く飛出した。酒場から甲板と浮れ歩いて、二三時間も經つてから艙房に戻つて見ると、花子は泣寢入に顚がつた儘で眠つてゐた。

其晩はそれで過したが、翌る日の朝になると、又た同じことを繰回す。持餘すと怒鳴つけ、叩き仆して室を出る。斯くすること再三。花子は飮まず食はずの泣續け！

此の船へ副食物の蔬菜と水菓子などを賣込に來る八百屋の辰之助といふのがあつた。橫濱の福富町に二三年前店を出したばかりだが、非常の勤勉家で且つ機敏である所から、夫から夫と販路を擴め、碇泊の外國船や商館を重なる花客に、手弘く賣込んでゐた。最う五十に手の達いた齡ではあるが、荷送りも註文も取引も傭人任せでなく、自身が草鞋掛で方々を廻つては、怪し氣に雙語交りの手眞似でもつて噺しかける。それが呼物になつて外人から贔負にされてゐた。

（四十）

此の日も炊事方の註文で荷足に一杯靑物を持つて來た。傭人と一緒に孜々と指定の室に運んでゐる中、只ある艙室の前を通ると、『母ちやん！母ちやん！』と泣き叫ぶ小兒の聲が洩れて聞える。辰は呀と驚いて扉の外に立停つた。

『はてな、甚麼も訝しいぞ、母ちやん？日本人の小兒に違ひがない。日本の子だ、爾だ。爾だ』。扉の外で耳を澄ましてゐた辰之助は、意外に驚いて眼を瞬つた。『蒸汽船の中に日本人が居るのは、別に珍らしいことでもないが、小兒一人を抛り放しにして置くといふのは、什麼いふ譯か知らん、阿父さんとか阿母さんとか、連れて來てゐるといふのなら格別、此の樣子では誰も居ない樣だ……變だなア』。

鍵穴から窺いて見ると、愛らしい少女が片隅に足を投出して、おい〳〵と泣いてゐる。辰之助に彌々悋しんだ。

と、後方から一人の火夫が來た。辰は急いで呼止めた『モシ……、貴君、此の部屋、ジヤパニユース チヤイルド居る、是れ何ですか』、開噛りの英語を挿んで、覺束なげに尋ねると『イエス』と頷いた。『誰か來て居るんですか、ファザー、マザー來て居ますか』、『否』、『居ませんやうですな、一体甚麼したんでせう誰が甚麼ところへ連込だんでせう』と執濃く聞くと『アイドントノー』と首を掉つて、迅々と五六歩行かけたが、回顧つて『それは何でもないことだ』とにや〳〵笑ひながら去つて了つた。

辰は氣になつて堪らぬといふよりは、可哀想で、此儘見棄て行くのが罪であるやうな感覺が

した。何とかして事情を知りたいものだと、戸口へ手を懸けて、兎多々々と搖ぶると、素より鍵を懸けてなかつたのか、ぎうと開いた。

悦んで室内へ這入つた。忙しく戸を閉めて側へ寄りながら、花子の肩へ手を載せて『什麼したなア、え、如何して那麼に泣いてゐるんだ、まア、可哀想に一人ぼつち……酷い奴もあるもんだなア』と劬はり立てゝ、手拭で泣顔を拭いて遣ると、花子は肝然とした眼で其の顔を仰看げたが、優しさうな叔父さんと思つたか、懐かし氣に膝へ抱着いて、シク〳〵と啜り上げる。見ると其の頬に強く抓り上げられたやうな痣の痕！

『お前、一体誰と此の船へ來たんだ？』、『私』、『私』、知らない人、怖い叔父さん』、雙語で答へる。『えツ、知らない人で怖い叔父さん？、何時連れられて來たのだ』、『昨日なの、闇いとこ連れて來られたの』、『ホウ、昨夕か……昨夕ツから此室に入れて置かれたのか』、『爾なの、阿母さん居ないの、怖い叔父さん打つの』、『何、打つた！、お前をか、怪しからねえ野郎だなア』、『私お飯食べないの』、『えツ、物を食はせない、可哀想なことを爲るぢやないかお前は何處だい？』、『彼方』と隅を指さして『遠い〳〵とこ、お舟で來たの』、『何、舟で來た、ハテ何處だうなア』『母ちやんが居ない！』、又も悲し氣に啼出した。

辰之助は首を傾げて考へた。智能の鈍い小兒の舌であるから、漠然して事情が解らぬけれども、尋常一樣のいきさつではあるまい。明日にも出帆するといふ此の船に囚へて、食事もさせず打擲する程の虐待。其處に何等かの秘密がなければならぬ。咸ひは何處からか攫つて來たのでるはあまいか、と氣が注くと、渾身の血が赫と鳴つた。

神奈川府裁判所へ屆け出でゝ、役人の手で調べさせる法もあるが、それでは手緩い。躊躇してゐる中に出帆されたら事畢矣だ。又た夫までに甚麼無法な取扱ひをされるかも知れぬ。第一慘めだ、可哀想だ。日本人として此儘後に憂して行かれやうか、いかにしても救ひ出さずばならぬ、と慥く決心した。

で、今に連出して遣るから待つてゐろと言含めて、窃々と艙を出た。艀舟に戻つて持出したのは、青物を入れた御膳籠である。それを炊事室へ搬んで中の蔬菜を出してから、その戻りに再び以前の艙へ這入つた。

空籠の中へ花子を隱して、天窓の上へふはりと印半纏を掛け、肩に引かけて忍んで出た。爾して何氣なく舷の方へ來て、是から自分の艀へ移らうとする際ごい刹那、『待てッ！』と鋭い叫ばた〳〵と駈けて來た水夫の一團に押取捲かれた。はッと驚く間に唐突輒で蹴られて、僵るやうに前へ倒れた。

（四十一）

蹴仆されてから數分間の辰之助は、幾んど餓狼の群に圍まれた小羊、亂擊の下に身を委ねた。誰が打つたのか、誰が蹴つたのか、それさへ見定がつかなかつた。氣も絕々に恍惶となつて起揚つた時は、渾身の其處這所がひりひりと疼む。己れの周圍には水夫やら火夫やらが、鬼のやうな眼を輝かして突立つてゐた。

斯ても猶花子の事を氣にしてゐた。什麼なつたかと籃の方を視ると、何の間にか遠くに抛り出され、花子は大きな外人の手に抱上げられてゐる。その漢子がテストラである。

「泥坊！泥坊！」とテストラは聲高に罵り立てゝ、火夫の一人と何やら早言に噺してゐた。その火夫が最前自分が問ひかけた男である。偖は此奴が夫と氣取つて密告したのであつたか、さりとは憎いマドロス奴と辰之助は睨みつけた。

テストラは何やら叫んだ。同時に左右から飛蒐つた二人の水夫が、ぐつと兩腕を執へて、引

立てた、後から一人が腰を押す。忽ちにして甲板の上へ拉し去られた。

面前に現れたのがテストラである。次でウエッチといふ水夫も來た。他の者は四方に直立して眼を瞬る。恁くしてウエッチを通譯に問答が始まつた。

『汝、實に悪い〳〵奴ある、大切な品、私子供盜む、汝、泥坊ある』。『ふむ、泥坊だと……可し、泥坊なら泥坊にして置いて、噺を爲よう」、辰之助は度胸を据えた、甲板の上に勤乎と胡座を叉んで、手を膝に屹とテストラの面を視上げた。

『一体手前們は彼の小兒を何處から引張つて來た？』、『買ひ取つたことある、三百弗、金拂つた、大事の品ある、それ盜まれて堪るかッ』、『買つた？誰から買つた？』、『支那の人ある』『はァ、南京からか、何といふ奴だ』、『盧安、横濱居る』、『盧安だと、確かに爾だな、可し、それならば私と一緒に其奴の家まで行つて、眞實か嘘かを突止めた上の噺に爲よう、さァ行け、一緒に船を出ろッ』。

『痴ッ！』とウエッチは怒鳴つけた、『買取つた品、此方の勝手ある、汝差圖要らん、賣人吟味する、それ役人爲ること、汝關り合ない、痴ッ』、『痴とは手前們のこッた、假令關り合がないにしても、同じ日本人だ、豊葦原の神州に生れた兒なら、一つの種から芽を出した親類つゞきいはゞ我子も同然だ、それが鬼より邪慳な手前們の手に懸つて、可哀想に薄ッ暗い艙に叩き込まれてよ、食べる物も食べさせずに、蹴つたり抓つたり、酷たらしい折檻をされる所を見ちやア、義理と人情の爲なら命も棄てるといふ日本人が、默つて見ておられるか、それも地道の手筋を踏んで、連込んで來たのなら兎に角、攫はれたんぢやァないか、南京人から買つたなんと言ふけれども、根を洗つたら手前們も一つ穴、南京人とぐるになつて攫つて來やがつたんだらう、攫つて來たんなら人間の泥坊だ、泥坊！泥坊とは手前們の事だ、盜られた品を日本人同士が取返すのが、何が不思議だ、此の毛唐のへちむくれ奴！』と我が同胞の爲に大氣焰を吐いたテストラは赫となつた。毛蟲のやうな太い眉を蠢かして意味の解らぬ英語で二言ばかり叫ぶ下から、ぐつと衣兜へ突入れた右の手に、閃然ときらめく拳銃を固く握つて、突然辰の鼻先へ差つけた。

『おや、そんな飛道具で俺を殺す心算だな』、辰は冷かにそれを看流して『面白い、殺せ、殺されて遣らう、さァ殺せ』と膝行寄つた、『だが只は殺されやしないぞ、ドッと來たが最期、奴の喉ッ首へ食ひついて、呪り殺すから覺悟しやアがれ！』、殺氣立つ眼の裂けるばかり、瞳に無念の炎が渦いてゐた。

（四十二）

梅吉はあらゆる荷厄介を肩から卸して、生れた儘のお梅さんに復つて了つた。

流れ河で足を濯つたやうに、綺麗爽淨とした心地。唯花子の事だけが柱に殘つた古釘の、較もすれば頭を擡げて未練の思を引懸け、後へ戻して泣かさうとする。それも我慢といふ槌で叩きつけ、最初から無いものであつたと諦めれば、左程の煩悶も爲ずに濟む。

新内語の夫婦には事情を告げて、今までの恩誼を謝した上に、一通りの旅裝束を調へ、貰ひ貯の僅少の金を旅費にして、淺草の住居を出發したのは、花子を横山に托した翌日の暮方であつた。

生來二十六年、濁つた空氣ながらも其の中で手足を伸して來た東京の天地。是が最後の告別!?と思ふと、言知らぬ闇愁に捉へられて、切に名殘が惜まれる、平生は何とも思はずに素通りする廣小路や、細長い横丁が、今日だけは何處までも〳〵涯なく續いてくれればよい、などと歩きながら念じるのであつた。足の倦くなるのも忘れて。

越中島から汽船が出る。大阪間の往復であるが、途中伊豆の下田港へも一寸寄つて行くとのこと。何よりの便利だと思つて之へ乘つた。長門丸とかいふ官船。

大分乘客がある。下等室はぎつしりと詰るくらゐであつた。熱海の邊で夜が明けて、晝少し過に下田へ着いた。

迎ひの艀に移つて上陸した。一緒に降りた者が四五人許ある。お梅は長い干潟を下田の町へと辿つた。

ざわ〳〵とした喞音の、蒸しつけられるやうな人のいきれに、八方から取圍まれて、狂人になれ愚になれと攻つけ煽り立てらるゝ都の眞中、爾も地の底の窖のやうな狹苦しい長屋生活から脫け出して、只一夜の中に活ける晝の縹渺とした別天地に身を落したお梅は急に眼が醒めたやうな感覺がした、葡萄色の奥も知れず麗々とかすみわたる大海原。波の音の絶間に磯馴松の涼しい碧をそよがして、昔ながらの調を合せる。蜑舍の片端から打開いた田畑、青い煙を根にして相山や大安寺山の、澄切つた空を我物貌に翼を張る。船も人も馬も鳥も、只睡るやうな長閑な景象の中に動いてゐるのだ。

『いやア、好いなア、俺ア氣が爽快した。』突唐に後で聲がした。振回つて見ると、我と同じ船

から上つた男、絹の入つた茶縞の袷に千草の股引盲の脚絆輕さうな單合羽の裾から道中差の鞘が見えた。色の淺黑い、鼻の隆い、苦味走つた四十前後の年頃である。手拭を吉原冠りにした下から、未だ斷つたばかりらしい散髪が眼につく。

『姐さん、如何でげすえ、好い景色ちやアごアせんか、宛然恁う廣重の畫でも見るやうですせ……エー、お一人で、何方へ？』、馴々しく噺しかける。『はい、あの、私は、下田へ參ります』お梅は好い加減にあしらつて歩く。

『はゝア、下田へ……私も矢張此の町へ用があつて、江戸から來た者でげすが、尊姐は何だか越中島でお見懸け申したやうな氣がしやすよ、大方一緒にお乘りでしたらう』、『おや、爾うでしたかね、些とも氣が注きませんでした』。

（四十三）

其の男は東京者らしく、なか〳〵お喋舌上手な、氣の輕い、面白さうな肌合であつた。ぶら〳〵歩きながらの不問語を聞くと、神田本銀町の商人で伊豆屋の茂兵衛と云ひ、毎年此の下田へ來ては伊豆七島へ渡つた上、島の產物を仕入れて關東地方へ捌く、隨分好い儲になるといふ事。

と解つて見ると、お梅は鼻先であしらう譯にもいかなくつて來た、自分が八丈島に渡るといふことは容易ならぬ大事業である。それを果すには甚麼しても案內を心得た人の力を藉らねばならぬ。如何にせばやと思ひ煩つてゐる矢先、恁いふ人に出會つたのは氏神さまのお引合せ、便つて一念を貫けといふ御託ではあるまいか、と急に嬉しくも賴母しくも感じた。

今までは詮事なさゝうな生返辭をしてゐたのが、がらりと變つて愛嬌澤山の、此方から話を仕懸けるやうになつた。此の土地は始めてだ、馴染の宿屋もないと云ふのを、そんなら私の定宿へお泊りなさいと慫められたのが、望むところと言葉に縋つて、遂に下田の井筒屋といふのに同宿する事になつた。

他目からは夫婦づれとも見えたであらう。二階の眺望の好い一間に旅裝を脫いで、誂へも凡て鷲鷹の對の膳、風呂から上つて一猪口となる。

『さア、貴君一つ召上れ』とお梅はお世辭酌をして、『お蔭さまで結構な晩がめつかりました、甚麼もねえ、知らない土地へ參りますと、全然田舍者……おほゝゝ』と笑つて『アノ何でござ

いますか、先刻伺ひましたところでは今度も島の方へお出掛けなさるやうなお噺でしたが、何日頃お立ちになりますんですえ』。

茂平は浴衣がけの海から吹いて來る風を背に、橡先の柱に寄懸つて、猪口を傾けてゐる。『左樣さ、彼島へ行くには月に二度か三度、韮山越の御用船が出る、それに賴んで乘つけて貰うんですが、這回は些と急ぎやすから、自分で一艘船を仕立てゝ行かうと思ひやす、まア船の準備や何かもあるこッたから早くッて明後日の朝になりやせうかなア』。

『左樣でございますか』とお梅は俯いて考へに沈んでゐたが『アノ尊君に伺ひますが、女でも彼島に渡られますでせうか』、『えッ、女でも？』と茂兵衛は笑つて『そりやア、女だッて同じ人間だもの、渡られないといふ理窟はないさ、けれども其の用向に依りけりだ、一体彼地は遠島になつた科人を流す所だから、その出入が滅法嚴ましくつて、此方から出る船は一應韮山縣の役人が檢める、又た乘る者も夫々行先や用向の次第、歸航の日取までも訊かれるつてえやうな譯だから、隨分面倒でげす、シテ女といふのは……何ですか、お前さんのお知已でも渡りたいといふ人があるんで？』、と顏を瞶つた。

『えゝ、實は』とお梅は言難さうに忸怩してゐたが、思ひ切つて『アノ私でございます』と言ふ。『えッ、お前さんが……』と茂兵衛は驚いた樣子。『そりやア什麼いふ事情で？、何しに八丈島なんぞへ？、變つた話だなア、そいつは』と首を伸してお梅の橫顏を窺く。

（四十四）

『變つた話だとお思ひになるのも御無理はありません、元來此の私からして餘程變つてる貨物なんですもの』とお梅は笑つて『まア、驚かずにお聞きなはいよ、最う恁うしてお心懇くなつて見れば、初心らしく隱し立をするのも野暮ですから、遽黃の頭巾を脫いで正體を現すと爲ませうよ、オホヽヽ』と冒頭を置いて、己れの身上を明した後、片桐義卿に遇ひたい一心から、島へ渡らうといふ計畫を立てゝ、此處まで來たことを噺した。

『ね、爾いふ事情なんでございますから、是非一つ尊君にお繋り申して、その船へ乘せて戴かうといふのが私のお願ひ、と云つて無理に御法度を破つて尊君に御迷惑を懸けても構はないといふやうな、那麼橫着な考は些とも有つちやア居りませんから、可哀想だから助けて遣らうといふお思召があれば格別、でなけりやア眞平だとお斷りくだすつたつて、決してお怨みには思ふ。『えッ、お前さんが……』と茂兵衛は驚いた樣子。『そりやア什麼いふ事情で？、何しに八丈島なんぞへ？、變つた話だなア、そいつは』と首を伸してお梅の橫顏を窺く。

ません、如何です、伊豆屋さん、引受けてお呉んなさいますか』赤裸々の眞情を彼の足下に投げつけて、取揚げるか蹴潰すかと答の降るのを待つてゐる。その瞳には決心の炎。

『ふむ、成程』、茂兵衛は感心したやうな顔で謹聽するのであつたが、急に莞爾として『引受けるも受けないもありやアしないぢやないか、アハヽヽヽ』と白い齒を見せた。『と被仰いますと』、お梅は不得要領。『えゝさ、見込まれたもんなら仕方が無え、男になつて遣らざアなるめえだらうぢやないか』と故意とらしく迂曲諄いことを言つて『心配しなはんな、伊豆屋は江戸ッ兒だ』と猪口に冷えた酒を、ぐつと一息に呷る。

『ぢやア、私の願を肯いてくださいますの』、お梅は悦の飜れる眼で、斜めに睨と仰看げると『當然よ、お前さんの爲なら命までも投出して見せらア、何なら手附にちよいと眼を暈さうか、ハツハツハ』と言つたが、氣が注いて『といつた時節もあつたらうに、さりとはお氣の毒な話だ、だが夫程までに慕はれたら男の冥加、その片桐さんとやらは餘程好い日の下でお生れなすつたんだ、俺も些と肖かつて置きたいもんだなア、ハヽヽヽ』と言直した。『あら、何を被仰つてつしやるのですよ、那麼浮いた噺ぢやアありません』、お梅は爾いふ下から早や浮いてゐる。

茂兵衛は男らしく引承けた。が其の引承樣を第三者の眼から見たならば、何となく不自然に思はれたのである。併しお梅にはそれが知れなかつた。只最う親切な、同情の厚い、分曉の早いお方だとばかり信じられて、肌ざはりの嫩かな眞綿の底に、針があるか芥があるか、但しは毒虫が潜んでゐるかなどゝ疑つて見る餘地がなかつた。

夕飯が濟むと、茂兵衛は船の都合を聞いて來るとお梅に言置いて、飄然と井筒屋を出た。行先は西濱の漁師村。喜六といふ船頭の家を訪ねて、一寸内々に相談したい事があるからと、戸外へ呼出して、直ぐ傍の干潟へ連れて行つた。

喜六といふのは最う五十を通り越した頑丈づくりの老船頭で、磯に龜の子泳ぎをする、白癡時代から、波と風とに揉み拔かれて來た經驗を有つてゐるが、村では餘り評判が好くない、什麼いふ意味か、船虫の喜六、又は河豚老爺と渾名を呼んで、交際するにも眼物扱ひといふ風であつた。

此の樣な船頭と知己であるのさへ、既に快い心地がせぬのに、秘密の相談だと云つて、人氣の無い場所へ誘き出して、物の一時間餘も窃々と囁き合つた茂兵衛こそ、頗る恠しいものである恠しい消息がその間に伏在してゐはせぬか、とお梅の爲に氣遣はれる。

（四十五）

『やァれー、歌の初はなァ』。

鐔を帯びた鼻聲の、悠揚とした長い音節で、席の隅から謡ひ出した者がある。

『大島原で、アーハ、利嶋つまんで、新嶋よー、エンヘ、オーホ、それに式根に、とまり島、アーハ、親はなけれど神津島、エンヘ、三本嶽にあふぎばこ、オンホ、御藏島をば、上に着て、八丈丹後をつみに來る、アーハ、目出たくおさまる三宅島、エンヘ、オンホ』。『やァ旨え〳〵、久々で喜六の十八番が出たね、何だか懐う、ざぶり〳〵と浪の當る音と、ぎゝぎいッと梶の廻る音を聞きながら、ソレ、青疊のやうな海の眞向ふに、ぼーッと揚る大島の煙よ、最う新島の羽伏が間近くなつたやなう氣がするせ、ハヽヽヽ、ヘッヘッヘ』。

上席の茂兵衛等は頻りと喝采した。

愈々明日の卯刻に、五百石積の隼丸といふ和船が解纜して、八丈島へ直航することになつたのである、茂兵衛は船頭一同を喜六の家に招いで、其の出立祝ひの酒讌を開いた。

茂兵衛とお梅とが上手に坐つて、船長の喜六を首に、海坊主の孫平、茹章魚の才之助、疣鯊の彌五郎、外五六人の赤い顔や黒い面、一粒えりの荒武者が車座に居流れて、茶碗酒のぐい飲に魚は骨まで吮る。

『たァいも無え、そげえな古くせえ唄を歌つて、威張りくさつてる奴があるけえ、俺が代になつちやァ、最う廢れたゞよなァ、才公、汝、上手だンべえ一つ老爺に負けねえで唄へ、唄へ、やい、唄つて旦那に聞かせろよ』、彌五郎は躍起となつて嗾しかけた。『ソレ、よかんべえ、才、奴、唄へよ、老爺を負かして遣れよ』、四方から聲が懸る。

『ぢや、歌うべえか』、座中第一の歌曲家たる才公は、とう〳〵煽に乘つた。

『エー、東北風吹けとは船頭衆のことよ、ガッシャガシャ、西風の十日も吹けばよい、コラ、ガッシャガシャッタラ、ガッシャガシャ、エー、明日はお立ちか、此の浦御繁昌、ガッシャガシャ、永くお世話になりました、コラガッシャガシャッタラ、ガッシャガシャ』。

此の唄につれて、席の眞中へひよこひよこと踊り出した者がある。赤褌一つの素裸、腰を振りながら滑稽な手振一度に皿小鉢を叩いて囃し立てる。茂兵衛もお梅も腹を抱へて笑つた。

『お江戸の姐さァ』、喜六はお梅を呼びかけた、『お前さァも何か一つ聞かして呉らつせえな、明日の上日和に船が出るちう芽出てえ酒宴だ、祝ひに演つて呉れさつせ、の、旦那』。

『む、爾だ〳〵、お梅さん、彼の通りの御所望だ、こりや一つ美せえ喉を轉がして、奴等にァッと喫驚させて遣らなけりやァなるめえての』、茂兵衛も傍から雷同する、誰が何處から借りて來たか、怪し氣な古三絃まで前に突つけての强硬談判。

『まァ、妾に……恐れ入りましたねえ是は……そんな柄ぢやァないんですよ困りましたねえ、』と當惑はしたものゝ、絶体絶命、餘儀なくその三絃を把上げた。心に莫迦々々しいとも、又た愁じ思ひの種とも、自らをさげすまれ、現在を儚なまれもしたが、無事に戀しい良人に遇はれる辻占ともなれかしと、窃かに念じて、ぎり〳〵と捲く天神の仇な爪彈に常磐津の船頭ー

『茲も名高き淀川の、流れを渡る氣散じは、氣も巾廣な緋縮緬、締めて結んだ鉢巻も、其處が根生の水の恩、三筋の糸をかりぶしに、淀の川瀬のなァ、景氣をこゝに、曳いて上るヤレ三十石船に、清き流れを汲む水車、廻る間毎は皆水馴棹、さいた盃押へてすけりや、醉ふて伏見へ管巻く繩よ、斯うしたところは千兩松、ヨイ〳〵〳〵宵の雨』。

唄ふ人は柳橋一代の名妓、行く雲を遏めもすべき美音の、玲瓏として珠を轉ずを下から、一座はメスメリズムをかけられたかのやう、急に聞然と沈まりかへつた。咳一つする者もない。小松の生えた砂地の庭へは、村の蜑どもが五六人も來て窺いてゐた。

（四十六）

翌る朝の卯の刻、お梅は茂兵衛と一緒に隼丸に乘込んだ。

梅雨には未だ間がある、麗かな初夏の艶拭巾をかけたやうな青空に、のろりと上つた旭の顏も、今日の船出を祝するかの如く、例にない平和な光を惜氣もなく散らすのを、鰹色の浪が反映して、鮮かな雲母をさゝらぎ立てる。それが笑つてゐるやうにも想はれる。岩燕の唄。松風の調べ、一体に望の色と音にみたされた朝凪の心地よい門途であつた。

五百石積の大きな體体が辷るやうに海の上へ乘出すと、さァ是からが俺の役目だといはぬばかり、船首の飾を振立てゝ勇ましく舷に跳る波を睨む。船長の喜六は先づ船玉さまへ神酒を供へ、磁石を按じて、折柄の西風に帆を十分に揚げさせた。

茂兵衛とお梅は胴の間に席を取つた此處は船長室ともいふべき場所で、疊を六帖敷いてある

兩側に明り窓がついて油障子を嵌め、其の障子の上へ『隼丸』と筆太に記してあつた。波の荒い時は障子を閉切つて、飛沫のかゝらぬやうに爲る。此の窓を櫂の口と稱へて船員の出入口に充てゝゐるのだ。

約二時間許は、茂兵衛と喜六とを相手に、物珍らしい海上生活の實驗談やら、七島の風俗や物產など、自分の參考となるやうな話を聞いてゐたが、それも漸々種が切れて來ると、退窟の生欠伸、遂には堪へ切れずして席を立つた。

次の荷積場へ出て、帆柱の下へ行くと、陸には痕もない凉しい風が颯と吹いて來る。積上げた擔包の荷を廻つて舳の二番（横木）近くに立ちながら、海の風色を矚めた。

下田を離れる時は、さながら龍卷の形をなして噴き上る煙の下に、青嶂を疊んだやうな大島の影が、直と眼の前に見ねて、只歷に我が胸を躍らしたのであるが、彌々近くなければならない理の位置にまで、隼丸が進んでゐるのに、その島影が何の間にか眼界から消えて了つた。お梅は變だと思つた。倘しや靄にかくれたのか、日光の加減でか、と小手を翳して眼を瞬つた。見えぬ、依然として見えぬ。海には靄といふ程の靄もないのである。

不思議は是ばかりではない、大島の姿が隱れた替りに、富士が遠くに見えて來た。南から西へかけて淡く一帶の影を洩いた青螺は、確かに遠州駿河。それを踏まへて屹然と突立つた八朶の高嶺、白い袈衣が日に映つてきら〳〵と輝くのさへ手に取るやう。

『あら！』、お梅は覺えず叫んだ。『モシ、伊豆屋さん、ちよいと伊豆屋さん來てくださいよ、早くゝる』。

氣立ましい聲であつたので、積荷場に圍爐して、一六勝負の博奕に夢中になつてゐた水夫們は、一齊に此方を回顧づた。

『何だ〳〵、仰山らしい聲をして……何か押始まつたのか？』、茂兵衛は胴の間から出て來た。

（四十七）

『伊豆山さん、一体什麼したんです、此の船は？』、お梅は茂兵衛の顏を見ると、突然疑問を投げつけた。怪しむその言葉に多少の瞋と不平とが含まれてゐる。

『何？、船が如何したッてえんだ』、茂兵衛は解せぬ樣子で問返した、八丈島方へ行くのでせう、此の船は』、『爾さ』、『その島は何方にあるんです？』、『づつと東の方さ』、『東の方なら貴

君、彼方ぢやありませんか』、『む、爾うよ』、『それに南の方へ此の船が行くといふのが訝しいぢやありませんか』、『む、訝しいなア』。

お梅の躁込むだけそれだけ茂兵衛は沈着はらつてゐる。『訝しいなアぢやありませんよ』、地烈たさうに舌打ちして『早く船頭を呼びつけて、叱つて遣つてお呉んなはいな、餘程什麼かしてるんだよ、彼の爺さん』、『耄碌してるかどこの騒ぎぢやない、此儘打棄つときなはつたら、駿州邊へ船が着いて了ひますよ』、お梅ははらはらと氣を揉むのであつた。

『まア、投ッとくさ、幾個船頭が骨を折つても、風と汐の工合に依つちやア、飛んだ方へ流れて行く塲合もある、間違つたら仕方がない、自然に任せて置いても、着く所には着くだらうから、何も騒ぎ立てるにも當らねえや』、茂兵衛は薄氣味惡くにや〳〵と笑ひながら、喞へ煙管の澁ました顏で、横目にお梅を見流した。

『ぢやア貴君は承知の上で、此の船を南へ向けさせたんですね』、偕はと心注いて、頓かに佶となつた、『おう、承知だとしたなら何と爲る、承知でないとしても、海へ一足乘出したが最期、身体も命も、凡て船頭任せだ、大金を出して抱へた船でも、素人の手ぢやア甚麼する事も出來アしないのさ』、茂兵衛は帆柱下の積荷の上へ動乎と腰を曏けた。擧動も言語も追々異しくなつて來る。

風いだ青空に、雨呼ぶ雲の叢立つたかのやう、お梅は急に不安の思に襲はれるのである。『それでは八丈島に行くと被仰つたのは嘘なんですね、尊君は私をお欺しなんですね』、怫然として睨みつけた、聲は顫える。

『欺されたのを今になつて氣が注いたか、欺すが商賣の藝者上りにも似合ねえ、さりとは鈍間な女だ、ハッハッハ』、茂兵衛は嘯いて乾笑つた。『さア、意趣も怨も無え旅の女を、何故殺生に欺したか、手前はそれを聞きたからう聞きてえならソノ所以因緣を斷して安心させもするが、コウ、お梅、その前にの、今まで冠つた化の皮を脫いて、俺の正体を見せて遣らなけりやア、心から腑に落ちめえ、ドレ、此の景色を殺に一杯飲みながら、そく〳〵噺にかゝると爲ようかコレ』と後背を回顧つて『野郎どもッ、酒を持つて來いッ、碌な肴負も出來ねえ癖に、朝つばらから盆蔫いちりは止しッちめえ、騒々しくつて此方の邪魔にならア』、烟乎と眼が光る。

此時の茂兵衛は今まで見た商人の伊豆屋ではなかつた。体度一變、唯兇險な野卑な、殺氣と凄氣とを渾身を帶びた無賴の惡漢！優しい鳩が摶きする下から、忽ちにして恐ろしい毒蛇と化つたかの如く、お梅は戰慄しつゝ其の面を仰看げた。

嘻、佛も神も無き世なるか、如何なれば斯くも片桐親子に、憂き數々の奇しくも附纏ふや、父義郷はさせる罪も無うして、絕海の孤島に配所の月を眺め、母は今又毒蛇の口中に落ちて、刹那生死の危境に臨めり、而て可憫なる蕾の花子は、其後何國何者の手に歸して、如何なる運命にや弄ばれつゝあるか、あはれ健氣にも女性の身をもて、浪風荒ぶ八丈ケ島に戀しき良人と艱苦を共にせんと願ひし、貞烈愛すべき薄命の佳人梅吉は能くその清操と命を全うして、彼岸に達するの素志を遂げ得べきや、又悼ましき少女の花子は、生きて現世で懐かしき、父母に再び邂逅ふべきや、其他疑問なる森有禮氏の前途、或はお春や辰之明等の身の上に、如何なる變化波瀾を生ずるか、悲慘、血と涙なる一大悲劇は、將にこれより其佳境に入らんとす、實に本篇は、默禪先生苦心の大作にして、又最得意會心の雄編なり、乞ふ刮目して、續編發行の日を待たれよと、隆文館の主人謹で白す。

千里眼（後編）終

大正二年一月十二日印刷
大正二年一月十七日發行　【定價四拾五錢】

著者　渡邊默禪　大阪市南區鰻谷仲之町二百二十四番屋敷
發行者　樋口源次郎　大阪市西區阿波座中通二丁目四番地
印刷者　荒木佐兵衛

發賣元　樋口隆文館　大阪市南區三休橋鰻谷南へ入西側（振替口座大阪八七九番）

不許複製
（千里眼後篇奥附）

東光寺改メ
松月堂楳林講演
丸山平次郎速記

日本三槍傳
佐分利左内
日本三槍傳
大嶋伴六
日本三槍傳
梅田杢之亟

實價各一冊 參拾五錢
郵稅各一冊 六錢
表紙口繪共極彩色美本

これは中古槍術の三名人と云はれましたる佐分利流の佐分利左内、大島流の大島伴六、本心鏡智流の梅田杢之亟……以上三名人の傳記を楳林翁が、得意の雄辯で演じたのでございますから、面白いことは御受合いたします……

松日堂魯山講演　吉田松茵速記　長谷川小信畫

鐘捲通家入道自齋
鐘捲自齋巡國記

表紙口繪共極彩色美本紙數二百余ページ
實價各一冊 參拾五錢 郵稅各一冊 六錢

中古元龜天正の年間、世は戰國と亂まして群雄四方に蜂の如く起りましたるの際、諸國に數ある武術家の中にも、嶄然として一頭群を拔で、劒法の聖か武道の神かと迄る言はれて、雷名轟々天下に鳴り響かされましたる、劒道の偉人鐘捲流の元祖鐘捲太郎通家入道自齋大先生の記傳にございます

△△△△ 樋口隆文舘營業案內 ▽▽▽▽

△樋口隆文舘は主として小說の出版……及其卸賣を專業と致居候に付各地方の販賣業者諸君……及貸本を營業とせられる諸君は多少に拘らず御注文被下度候

△卸賣目錄御入用の諸君は郵券二錢御送り被下度候其節には販賣用としてなるや又は貸本用としてなるや御書き添へを願ふ

△樋口隆文舘は成る丈珍いそして內容も成る丈面白い物を擇んで毎月二三種宛は缺さずに發行致べく候

△每月新版の通報料として一ケ年分金二拾四錢御送金の向へは每月一回新版物の御通報致すべく候

△御照會の節は返信用切手を御封入せらるゝか又は徃復はがきにて願上候猶御住所と御氏名及御照會の要点は出來る丈字体明瞭に御書きを願ふ

△樋口隆文舘の所在地は大阪三休橋鰻谷南入西側に御座候、振替番號は大阪八七九七、御注文の節には代金郵送料共總て御前送相成度候着金後にあらざれば一切送本仕らず候大都數の御注文には瀧車便又は瀧船便其他成丈早く屆く方法を以て御送品可致候

遲塚麗水君著
井川洗厓君畫

前編 白菊御殿
後編 銀杏小路

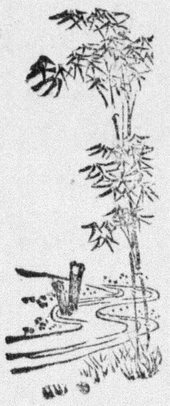
木版口繪極彩色美本
實價各一冊四拾五錢
郵稅各一冊六　錢

本書は曾て東京都新聞紙上に連載して、江湖の大喝采を博せし怪小說であつて、事の起りは明星伯爵が一婦人の愛に溺れしより始まる、綰中に活動する人物には、二八の花の姫御前が、あられもなや、雪か玉かと白く麗き膚に、冴わたる藍の色も濃く、髑髏を卷ける巨蛇の文身をして、毒蛇のお金と怖ろしき仇名を呼ばれし妖婦も居れば、放れ駒太郎と勇ましき異名を取り、身分は……丁であるが忠義は天晴古武士にも劣らぬ、剛俠不敵の快男子も居る、可憐愛すべきは侍女のお糸、境遇憫むべきは貴公子の春丸、怪腕物凄きは花魁の小夜衣、奸詐憎むべきは詐僞賭博師の蟹澤……かゝる各種の人物が善惡それ〳〵に趣味の有る活動をして、變幻怪奇の波瀾縱橫、局面に生じ回轉應接に暇も無き、劇に演じても活動寫眞に行つても、いづれも非常の好評を博したるもの、乞ふ愛讀の榮をたまへと隆文館の主人が謹で白す。

渡邊默禪氏著　長谷川小信氏畫

事實小說 怪の怪

表紙口繪共極彩色美本
實價　一冊　四拾五錢
郵稅　一冊　六　錢



これは文名東都に鳴る渡邊默禪子が、天馬奔空の快筆を揮ツて、黑石子爵家大波瀾の眞相を描寫した、奇々怪々の怪小說であるから、是非一冊は購て見玉へと、隆文館の主人が御勸告をする……

大阪新報記者　行友李風君著
長谷川小信君畫

小說 因果經

表紙口繪共極彩色美本
定價　一冊　四拾五錢
郵稅　一冊　六　錢

これは前年大阪新報紙上に連載して非常ある好評を博し、續いて第一流の新派俳優、秋月高田小織等の諸優によつて劇に演せられ、これ又大々好評を博した、悲哀深刻ある活小說であつて、これ實に著者李風子が、文壇に名告り揚げた初陣の傑作であるから、其內容の面白いことは、論より證據だ讀で見玉へと、例によつて例の如くに隆文館の主人が御勸告をする

神戸又新日報掲載
同記者中村兵衛著
長谷川小信畫

探偵小説

血染の手巾

表紙口繪共極彩色美本
實價四拾錢
郵稅六錢

この血染の戸巾は神戸又新日報紙上に連載して、大好評を博せし探偵小説である、可憐花の如く妙齢の一佳人は、可恐殺人の嫌疑者となつた、吁、實に大疑問である、外面如菩薩妙齢の一處女、什麽に迫つて敢てこの大罪を犯せしものぞ、吁疑問實に不可解の大疑問である、此大疑問を解せんが爲に、如何に探偵が慘憺の苦辛をするか、これ一篇の讀みどころである……

稻花生著

小車新三

表紙口繪共極彩色美本
實價一冊四拾五錢
郵稅一冊六錢

小車新三とは
何者であるか
武士か町人か
遊俠の徒か
如何なる時代に
如何なる活動を
したか……

神戸又新日報記者
中村兵衛君著
長谷川小信畫

小説

月の輪

表紙口繪共極彩色美本
實價四拾五錢
郵稅六錢

これは血染の手巾の著者として、諸君が既に御馴染の中村兵衛君が、一種豊艶の麗筆によつて描かれた、可憐薄命なる一美人の半生涯……!!

中村兵衛著
長谷川小信畫

俠女

水月尼

表紙口繪共極彩色美本
實價四拾錢
郵稅六錢

水月尼とは恁麽な女か
淫婦か貞女か美人か醜婦か
恁麽な女で恁麽な事を爲たのか
此本を購て讀めば分曉る

玉田玉秀齋講演　山田唯夫速記

元和豪傑
中條兵庫之助

入間川大仇討
中條武勇傳

奥羽漫遊
中條兵庫旅日記

後の中條

實價各一冊　參拾五錢　郵稅　各一冊六錢

エ……こゝに御披露つかまつりまするは、京都八流の中なる鞍馬流より、別に一流を工夫いたされて、中條流の流祖と相成られましたる、元和の豪傑、中條兵庫之助の一代記でございまして、其後編に相成りますると、關東武州にて其名も高き、入間河畔にて大仇討をいたすといふ、至極面白い武勇談でございます

松月堂魯山講演
吉田松茵速記

劍客
磯畑伴藏秀國
磯畑伴藏旅日記

表紙　口繪共　無類美本
實價　一冊　參拾五錢
郵稅　一冊　六　錢

エー、茲に御披露いたしまするは、古來數多ある武術家の中にも、嶄然として一頭兵群を拔き勇名天下に陰れも無きところの、磯畑伴藏秀國先生が諸國武者修行の旅日記でございますから勇を尚び武を好まれる諸君は、是非一冊は購ひ玉へと隆文館の主人が慾張て申す……

秋月玉光講演　天野三郎速記

豪傑客
藥師の梅吉

俠客
後の藥師の梅吉

俠客
其後の藥師

俠女
龍神お玉

俠女
後の龍神

實價各一冊參拾錢　郵稅各一冊六錢

茲に御披露いたしまするは、梅の浪花か浪花の梅かと其俠名を小歌にも殘しましたる、浪花俠客藥師の梅吉……及び其情婦なる女俠龍神お玉との面白い關係を玉光一流の口調で演じたのでございますから其面白いことは御請合いたします……

玉田玉秀齋講演　中尾甚三郎速記

野州庚申山
惡狐塚の由來

天下豪傑
惡狐退治

豪傑
松平康之助

實價各一冊參拾錢　郵稅各一冊六錢
表紙口繪共極彩色木版摺
美裝菊版二百餘頁

關東に於て其名も高き、野州は庚申山なる惡狐塚の由來記にございまして、後篇になりましては天下擊劍の名家、柳生飛彈守、小野治郎左衛門等の諸豪傑が、庚申山の奥猿渡りの洞窟といふに乘りこみ、其處で鐵化自在の惡狐を退治いたすといふ至極壯怪の講談でございます

松月堂魯山講演　吉田松茵速記　長谷川小信畫

龜井名槍傳

豪傑 龜井武藏

實價各一冊　參拾五錢
郵稅各一冊　六錢
表紙口繪共極彩色美本

エー茲に御披露いたしまするは、其槍法の妙一世に秀で、無敵獨歩の大名人と言はれました、山陰の豪傑龜井新十郎茲矩……後年に至つては豐臣秀吉公の幕下に屬して、從五位龜井武藏守と任官を受け、四万三千石の侯伯とまでも出世いたされましたる大槍術家の傳記でございます……

桐野金城講演　天野三郎速記

天下三傑 幽靈問答

怪談後日の幽靈

天下三傑 最後の譽

實價各一冊參拾五錢　郵稅各一冊六錢
表紙口繪共極彩色美本

エ……茲に廣告いたしまするは、古來有名なるところの大阪妖怪御殿の由來記にございまして、初編なる幽靈問答……それに續いて怪談後日の幽靈の二冊は、既に出版せられまして、大方諸君の非常なる御愛讀を蒙りましたが、いよ〳〵第三編なる天下三傑最後の譽をもちまして當講談も完結を告げまする故、どうか前編同樣に御愛讀あらんことを御願ひいたします

東光齋吹メ
松月堂楳林講演
丸山平次郎速記

日本三槍傳 佐分利左内

日本三槍傳 大嶋伴六

日本三槍傳 梅田杢之亟

實價各一冊　參拾五錢
郵稅各一冊　六錢
表紙口繪共極彩色美本

これは中古槍術の三名人と云はれましたる佐分利流の佐分利左内、大島流の大島伴六、本心鏡智流の梅田杢之丞……以上三名人の傳記を楳林翁が、得意の雄辯で演じたのでございますから、面白いことは御受合いたします……

松日堂魯山講演　吉田松茵速記　長谷川小信畫

鐘捲通家入道自齋

鐘捲自齋巡國記

表紙口繪共極彩色美本紙數二百余ページ
實價各一冊　參拾五錢　郵稅各一冊　六錢

中古元龜天正の年間、世は戰國と亂まして群雄四方に蜂の如く起りましたるの際、諸國に數ある武術家の中にも、嶄然として一頭群を抜で、劒法の聖か武道の神かと迄も言はれて、雷名轟々天下に鳴り響かされましたる、劒道の偉人鐘捲流の元祖鐘捲太郎通家入道自齋大先生の記傳にございます

玉田玉秀齋講演　中尾甚三郎速記　鈴木錦泉書

豪傑 緒方力丸弘行
豪傑 魔風軍藤太
緒方力丸 黒姫山の旗揚

實價各一冊 參拾五錢
郵稅各一冊 六 錢
表紙口繪共極彩色美本

エ……茲に御披露いたしまするは、徳川八代將軍の治世享保の年間におきまして、越後の國に其名も高きところの、黒姫山の山寨に立籠つて、豐臣天下回復の義旗を飜し、徳川幕府を顚覆せんと致しましたる、堀尾家の遺臣豪傑自來也……卽ち緒方力丸引行の履歷でございますから其面白いことは請合ます……

秋津洲櫻香講演
墨浦漁村速記
鈴木錦泉書

怪談 不思議の家 全一冊

實價 一冊 參拾五錢
郵稅 一冊 六 錢
表紙口繪共極彩色美本

不思議の家……？、不思議の家とは何時代何國に在つたのであるか？、そして其不思議の家には如何なる怪異が有つたのであらうか、幽靈が出たのか、妖物が出たのか、鬼が棲んで居たか、魔が伏て居たか……？、不思議の正體とは何物であらうか、諸君よ、もしも諸君にして此奇怪なる不思議の家の眞相を知らんと思はるゝならば、奮て一部の不思議の家を買ひたまへ！

玉田玉秀齋講演
山田唯夫速記
玉田家十八番の内

天保事變 浪花の大潮
天保事變 後の大潮

實價各一冊 參拾五錢
郵稅各一冊 六 錢
表紙口繪共極彩色美本

これは玉田家十八番の内にて、玉秀齋が得意の讀物でございますから、從來流布の大鹽傳とは大層違つて面白いものでございます……

松月堂魯山講演
吉田松茵速記

劍法名人 諸國大天狗
劍法名人 岩間小天狗

實價 各一冊 參拾五錢
郵稅 各一冊 六 錢
表紙口繪共極彩色美本

エ……茲に御披露いたしまするは、微塵流劍法の元祖として古來有名なる、諸岡小太郎直家ノ生……後に諸岡一羽齋と名告られましたる御人、及其高弟にして勇名世に轟くところの、岩間小熊之助との兩劍士の傳記でございますから、勇を尙び武を愛する諸君は一冊購て讀で見玉へ……

神田伯海講演
又新日報社員速記

實說講談 お俊傳兵衛

實價　一冊　參拾五錢
郵稅　一冊　六　錢
表紙口繪共極彩色美本

……茲に御披露いたしまするは、古來演劇戲曲等において人口に膾炙いたして居りまするお俊傳兵衛の實譚でございまして前日に神戸又新日報紙上に連載して讀者の大喝采を博したものでございますから、其面白いことは御請合いたしますから是非一冊は購て見玉へ……

玉田玉秀齋講演
中尾甚三郎速記
長谷川小信畫

天明俠客 文珠九助

實價　參拾五錢
郵稅　六　錢
表紙口繪共極彩色美本

……茲に御披露いたしまするは、彼の佐倉宗五郎と其名をひとしくいたして、伏見の義民と俠名を世に知られましたる、天明俠客文珠九助の履歷をば、玉田玉秀齋翁が、老練輕妙の辯をもつて至極面白く講演せられたのでございます

玉田玉芳齋講演
馬塲三郎速記
長谷川小信畫

小松三勇士 後藤荒太郎數盛
小松三勇士 稻葉太郎正滿
小松三勇士 水間大八郎兼時

表紙口繪共極彩色美本
實價各一冊　參拾五錢
郵稅各一冊　六　錢

この小松三勇士傳は、玉芳老人得意の讀物でございますから、其面白いことは御請合いたします……

神田伯海講演
又新日報社員速記
川上恒茂書

豪傑 瀨川采女

表紙口繪共極彩色美本
實價　參拾五錢
郵稅　六　錢

これは有名なる曲亭馬琴翁の著書、松浦佐用姫石魂錄によつて、孝勇の美名を不朽に傳へました瀨川采女吉次の傳記を、演者が得意の辯で述べたのでございますから、其面白いことは御請合いたします……

玉田玉秀齋講演
山田唯夫速記　長谷川小信畫

天正三勇士　幽靈半之丞
天正三勇士　母里太兵衛
天正三勇士　飯田覺兵衛

表紙口繪共極彩色美本
實價一冊各參拾五錢
郵稅一冊各六錢

これは織田家の猛將柴田勝家の勇臣にして幽靈半之亟と云へば誰知らぬ者無く、後には淺野家に仕へて龜田大隅綱縣と名告り、泉州樫井畷に於て大阪方の豪傑、塙團右衛門直之を討取つて益々其勇名を天下に揚げましたる溝口半之亟……及び其義兄弟たる黑田家の勇士母里太兵衛、加藤家の勇將飯田覺兵衛……此の三勇士の豪快なる傳記を、御馴染の玉田玉秀齋が得意の辯で述べたのでございますから其面白いことは御受合いたします……

東海亭金龍講演
三木花夫速記　川上恒茂畫

武勇の譽　槍の小太郎
四十八番　御前大試合

表紙口繪共極彩色美本
實價各一冊三十五錢
郵稅各六錢

エ……茲に御披露いたしまするは、德川三代將軍家光公の御前におきまして、天下諸侯の御選拔になつたる、有名の武術家四十七名をば見事いろは順に突伏せ、最後四十八番目の試合に於て、時の天下の御師範役たる、村山三左衛門入道眞海大先生に勝を取りました槍術の大家、磯田淡路守義光殿の傳記でございますから、武を尙び勇を好まれる諸君は、一冊購て見玉へて申す……

武田家三彈正

玉田玉秀齋講演
山田唯夫速記
鈴木錦泉挿畫

初編　眞田鬼彈正
二編　保科槍彈正
三編　高阪智惠彈正

（頗美本）
特別實價一冊三十錢
送料　一冊に付六錢　三冊迄十二錢

これは御馴染の玉秀齋翁が、古來有名なる武田家の三彈正、眞田鬼彈正、保科槍彈正、高阪智惠彈正……此三豪傑の勇ましき一代記を懸河流水の快辨を揮つて、縱橫自在に演述したのでございますからまことに近來の好讀物でございます。

豪傑勢揃

討仇大城輪箕

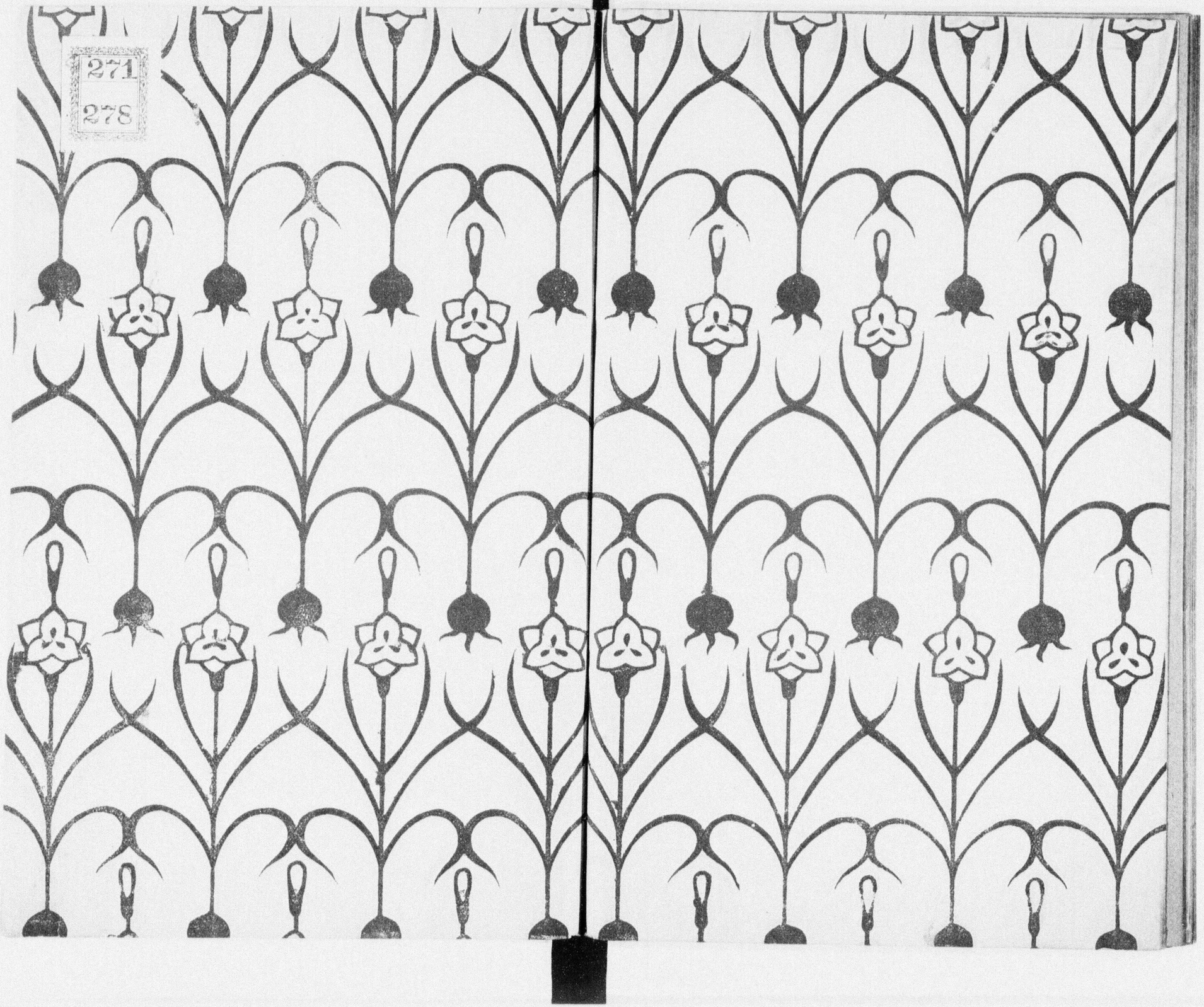
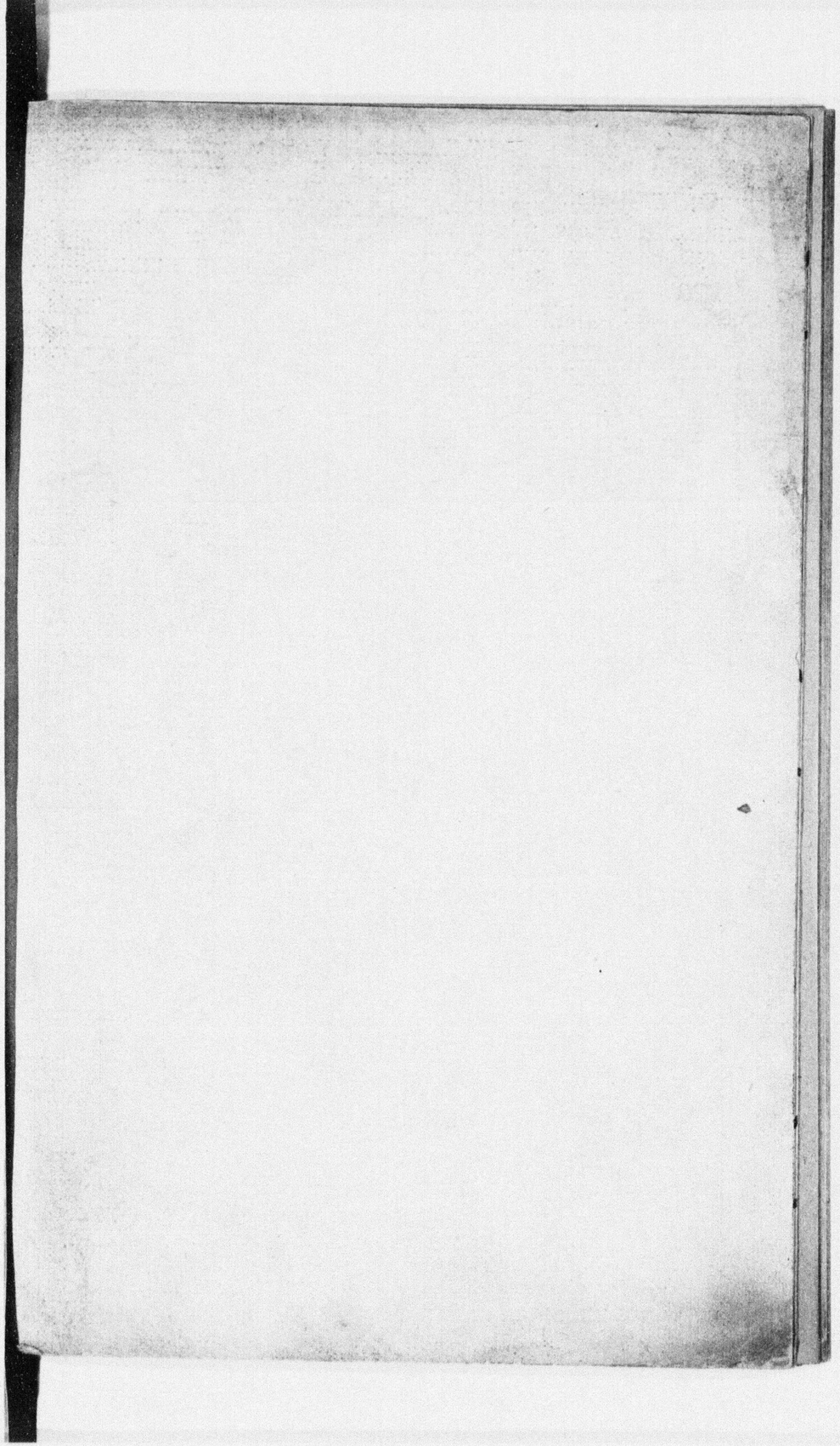
玉田玉芳齋講演
馬場三郎速記
長谷川小信挿畫

初編　杉本備前守
二編　武田武者之助
三編　武田鬼景
四編　神刀忠次郎
五編　豪傑勢揃箕輪城大仇討

これは大阪玉田派の隊長ある玉芳齋翁が、最得意とする十八番物でございまして、最後の終局と相成りますれば、磯畑伴藏、武田武者之助、神刀忠次郎、柳生又左衛門、其他に多くの豪傑達が勢揃ひをして、上州箕輪城の主にして十八萬石の大守ある金森豊前守を對手に廻して、血の雨降して大仇討をいたさうといふ、實にも勇ありて又義ある、いとも壯烈ある武勇譚でございまする。

木版極彩色頗美本
特別實價一冊貳十五錢宛
送料　一冊ゐれば　六錢
　　三冊迄は　八錢

271
278



終